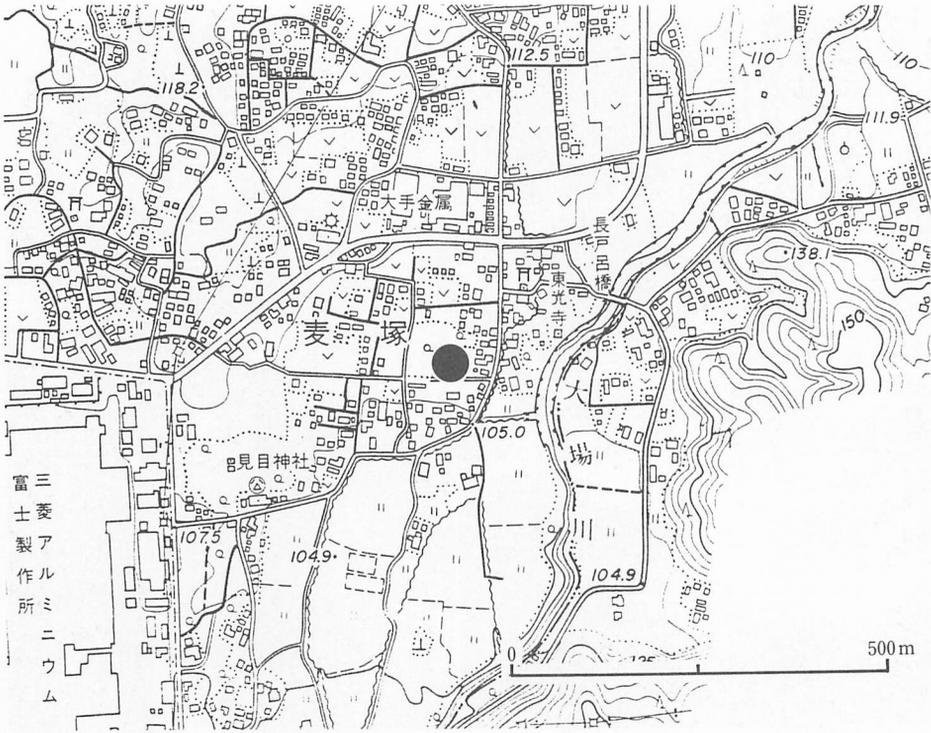


第五章 歷史時代

勝俣屋敷
かつまたやしき

所在地 裾野市麦塚字寛嶮一七九番地ほか
ひろさき



位置図



勝俣屋敷範囲図



勝俣屋敷北側空堀址

位置と立地 本屋敷は、麦塚集落のほぼ中央の平坦地、海拔一〇九mの字寛嶮に位置する。北と西は畑地、東と南は人家を挟み水田が展開しているが、住宅地となりつつある。周辺には富士山の溶岩流が露出し山林となっている。本屋敷の東五〇mのところを境川が流れている。

発見と調査 本屋敷の遺構については、早くから芹沢充寛の指摘していたところであったが、昭和六三年（一九八六）、市史編さん事務局の勝俣家文書調査の折、空堀と土塁址を確認した。その後、同事務局の中世城館跡調査で踏査し、「裾野市史研究」第一号に報告されている。平成元年（一九九〇）、勝俣家で住宅地造成工事が行われることになったため、裾野市教育委員会によって空堀と土塁の確認調査が実施された。

遺構 本屋敷は東西約一〇〇m、南北約八〇mあり、北東隅と東側南半分が不整形となっている。遺構は、北側とそれに続く北西隅に空堀と土塁址の一部が残存し、南側の東半分には半ば埋没した空堀址がある。平成元年の遺構確認調査によると、北西隅と北側において、底敷幅約五m、高さ一・一・五mの土塁と、幅約五・六m、深さ約一・一・五mの空堀が検出され、それに併行する溝址も検出された。

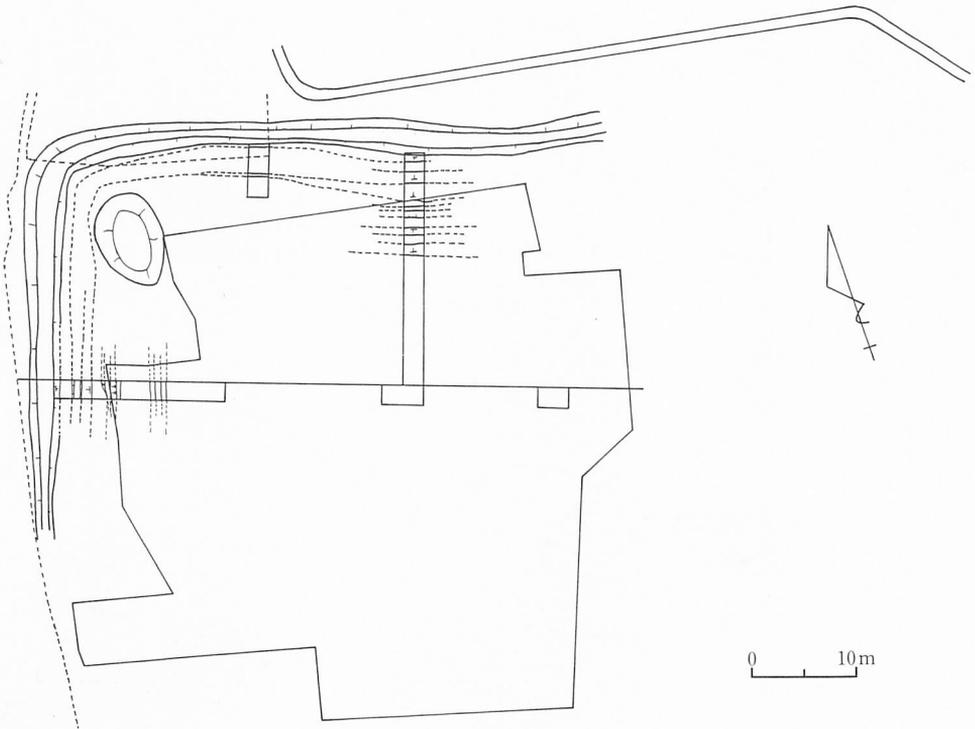
遺物 ほとんど近世、近代の陶磁器片で、かわらけ破破片が少量出土している。

現状 宅地である。

資料の所在 裾野市教育委員会 保管



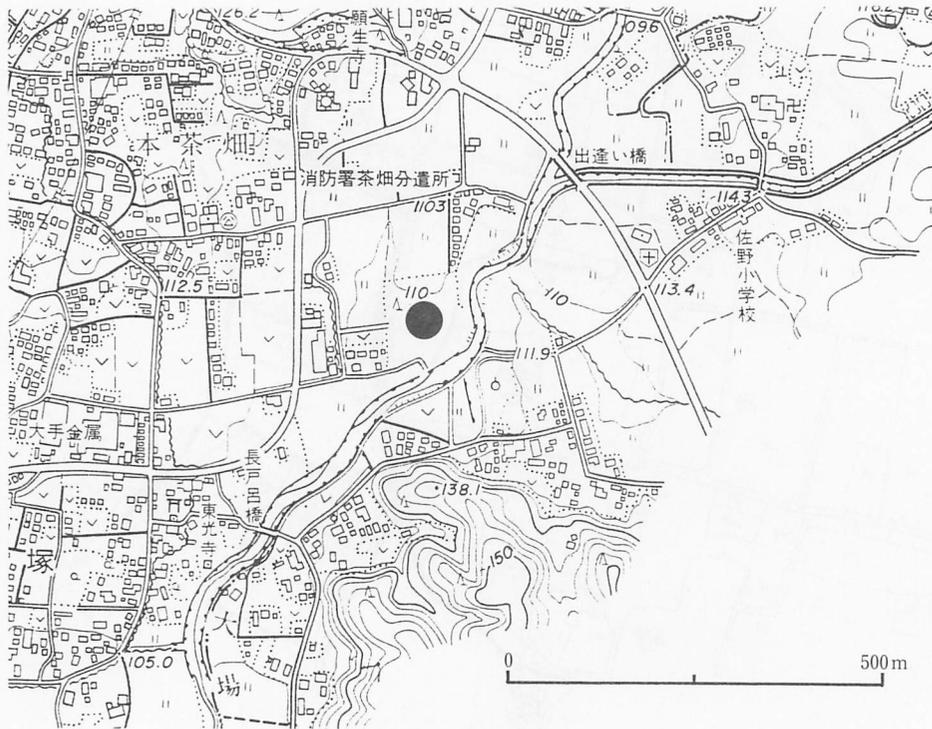
勝俣屋敷周辺地籍図



勝俣屋敷遺構確認調査図

かしわぎ
柏木屋敷

所在地 裾野市茶畑字境川九七四番地ほか



位置図



柏木屋敷範囲図



柏木屋敷遠望(東南より)

位置と立地 本屋敷は、箱根外輪山の西麓を流下する境川(大場川)が、茶畑地区に形成した沖積低地の海拔一一一mのところに位置する。東側から南側に接して境川が流れ、屋敷地内との比高は、わずかに一m前後にすぎない。周辺は広く水田が展開し、茶畑集落とは孤立したところに位置する。

発見と調査 本屋敷は、古くから柏木屋敷として知られており、裾野郷土研究会の佐藤隆が注目し、昭和五〇年代の初め、東海古城研究会の関口宏行が踏査し、相前後して、中野国雄が県教育委員会の委嘱を受けて調査している。昭和六〇年代に入って、市当局が本屋敷地を整備した。

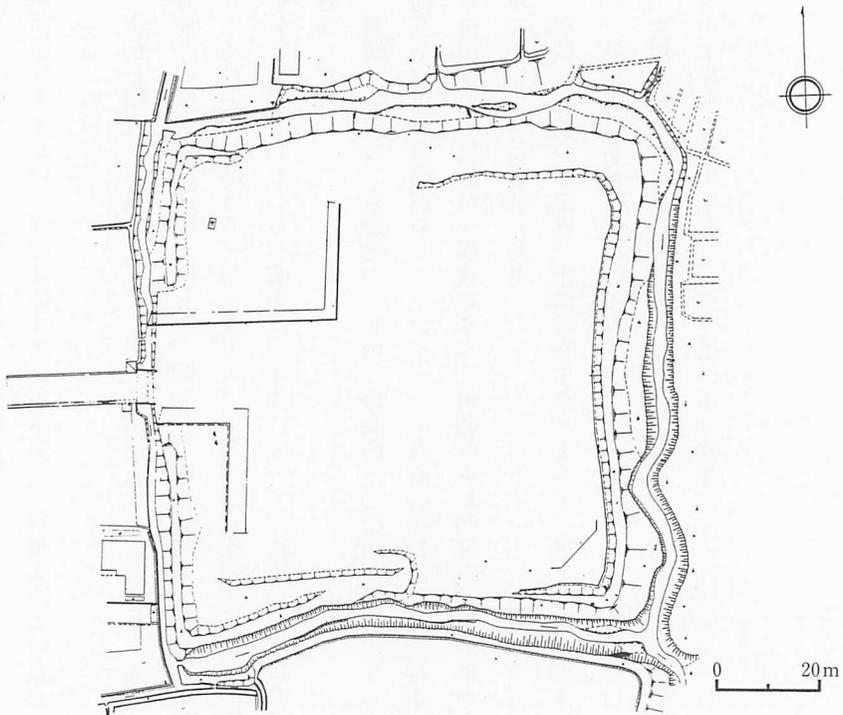
遺構 外形は、東西約一一七m、南北約一二〇mの方形をなし、幅約五〜六mの水濠がめぐっている。その内側に底敷約八m、高さ一・五m前後の土塁址が一部残存する。南側中央に門址らしきものがある。現在の出入口は西側にある。

現状 西側の水濠は、水路改修工事によって、著しく原形が失なわれ、敷地内は整備工事で、旧態を失っている。

文献 関口宏行「柏木屋敷」 日本城郭大系9 一九七九、中野国雄「柏木屋敷(境川屋敷)」 静岡県の中世城館跡 一九八一

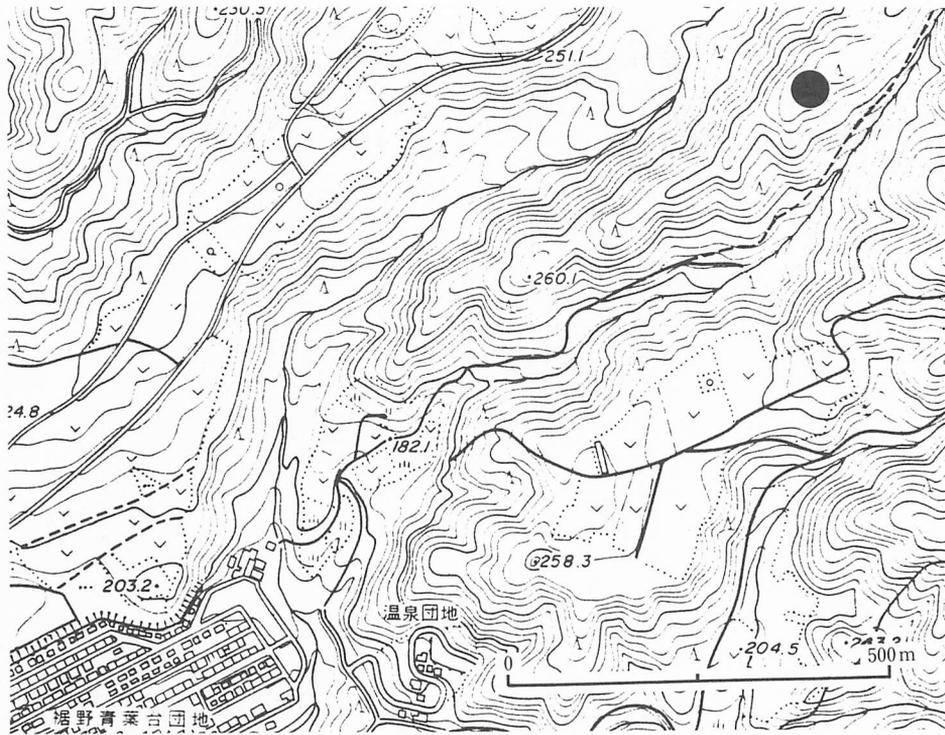


柏木屋敷地籍図

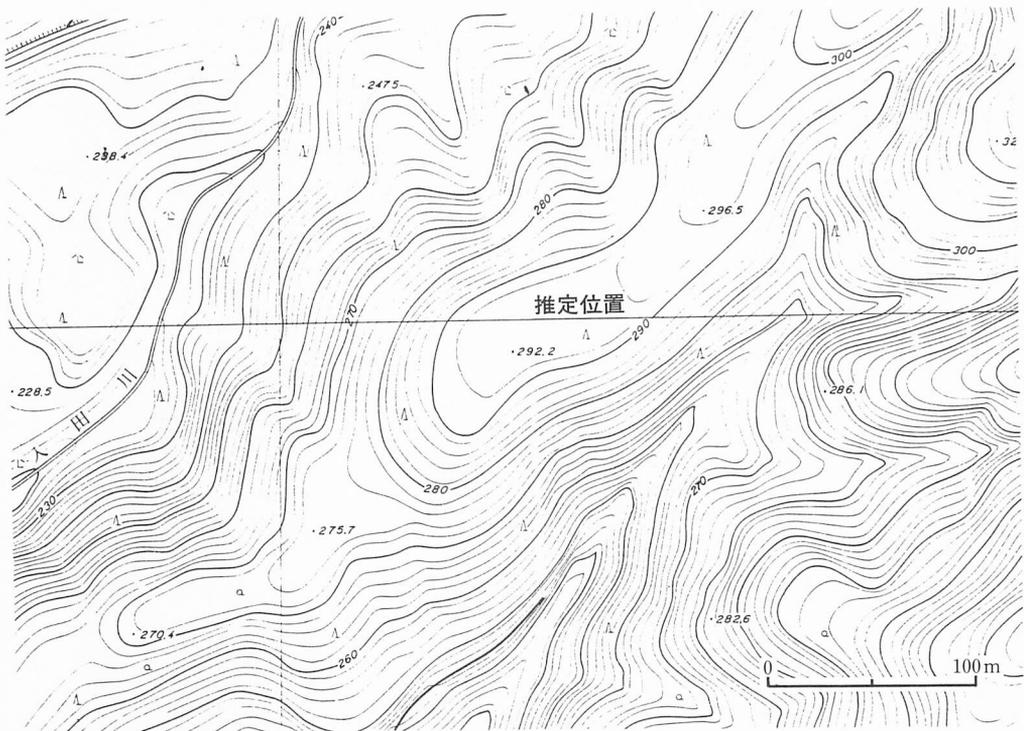


柏木屋敷実測図

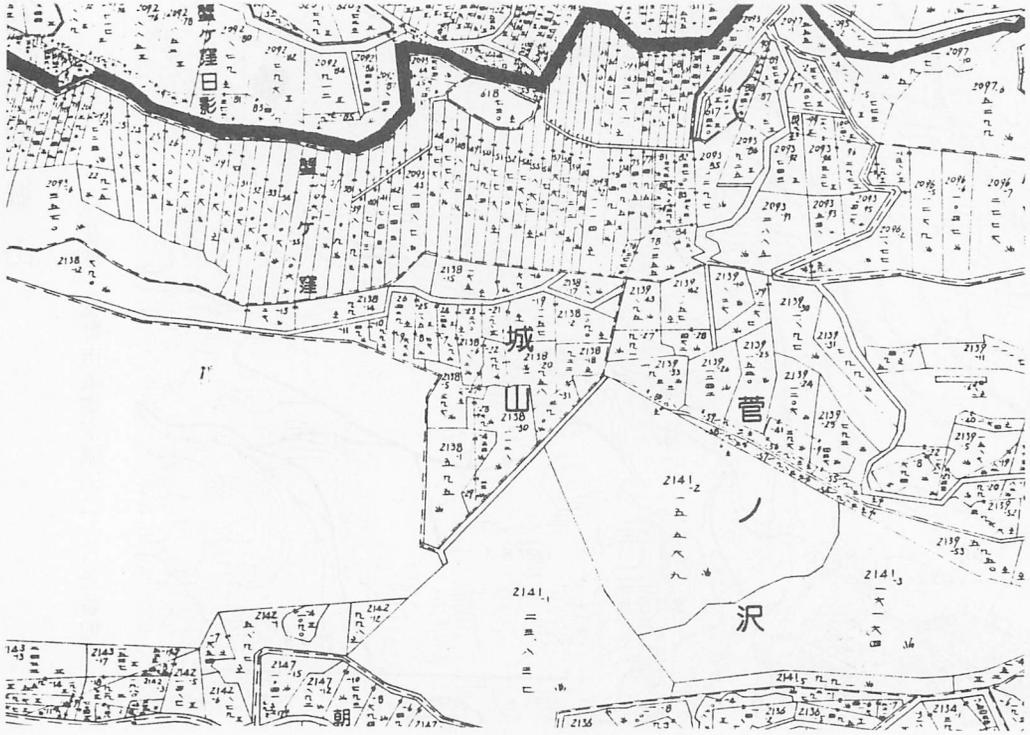
所在地 裾野市茶畑字城山二一八三番地ほか



推定位置図



推定立地図



茶畑城山地籍図

位置と立地 箱根外輪山の三国山から南西に延びる尾根の、菅沢と

その北側の入田川の沢谷に挟まれた、海拔二九二m付近の尾根稜部、

字城山に位置する。裾野青葉台団地の字大入から北東の尾根を、約九

〇〇mほど登った地点である。

発見と調査 平成元年（一九九〇）、市史編さん事務局の城館跡調査では

確認することができなかったが、平成三年（一九九二）、その位置を確認し

た。この地名に関して、内容を知ることのできる文献、伝承は一つ

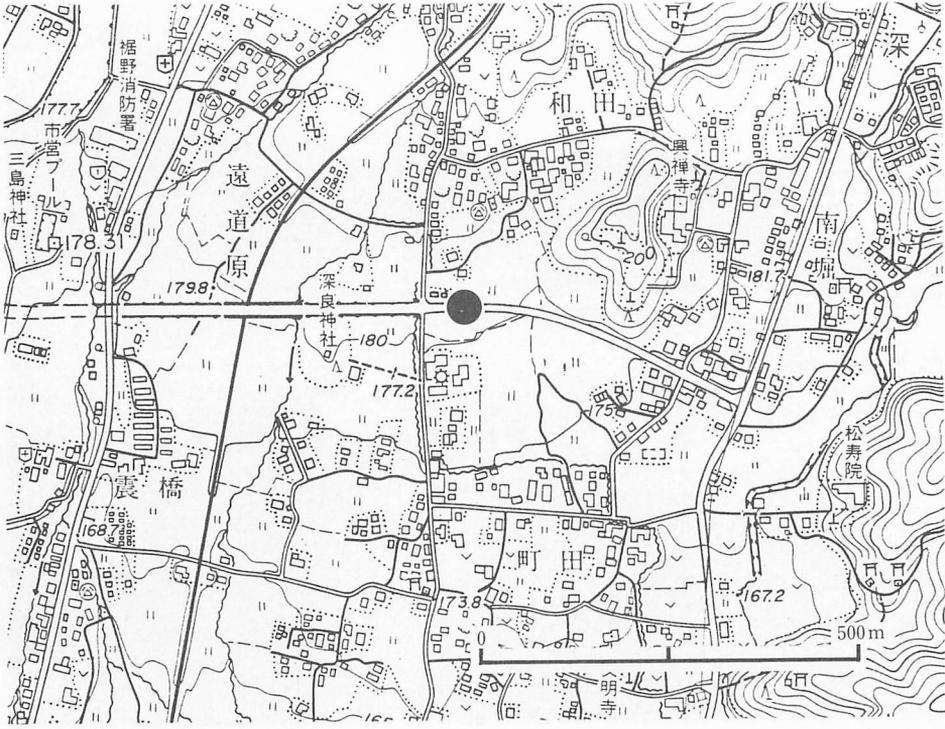
残されていない。城館跡の立地する位置としては、本編後述の愛鷹山

中にある、葛山かくし砦とよく類似している。

遺構は不明で、現状は山林である。

74
うえのほら
上原遺跡

所在地 裾野市深良字上原二三七二番地ほか



位置図



遺跡範囲図



上原遺跡近景

位置と立地 本遺跡は、箱根外輪山と愛鷹山の間に挟まれた、富士山東南麓末端の溶岩流上に形成された台状の緩傾斜地、深良上原に位置する。この傾斜面は北から南へ向かって連続しているが、舌状の微高地があり、本遺跡はこうした微高地上に立地している。

発見と調査 昭和五六年（一九六二）一月、市道一七号御宿深良線の建設工事中、表土下五〇～七〇cmのところから土器片が出土し、工事担当者から裾野市教育委員会に通報された。同教育委員会では、直ちに路線範囲内の調査を実施し、住居址等の遺構を確認した。

層序と遺構 表土の耕作土下に、現水田の基盤層（埋立粘土層）があり、その下に厚さ四〇～五〇cmの黒褐色土層が堆積し、下層の黄赤褐色の小礫を含む砂層に切り込んで、「カマド」を構築した方形の堅穴住居址群が検出された。1号住居址群は、上部が削平され、住居掘方の輪郭がわずかに確認できたにすぎなかったが、A～Eの五軒の住居址が重複するらしく、このうちA住居址に、かろうじて「カマド」が検出された。2号住居址は、東西に掘方が検出され、方形になると考えられる。3号住居址は、路線内に掘方床面の輪郭と「カマド」が検出され、三m×三mの方形住居址であった。4号住居址は、一辺が七m、掘方深さ五〇cmの「カマド」を持つ大形住居址で、遺物の大半はこの4号住居址から出土した。

遺物 第1図は、須恵器である。このうち2・8は2号住居址、3・5は4号住居址、その他は住居址外から出土したものである。1～4・6は坏の蓋部分で、5・7・8は坏の身の部分である。蓋には擬宝珠状のつまみがつく。5・7は切り高台がつき、8は糸切りの平

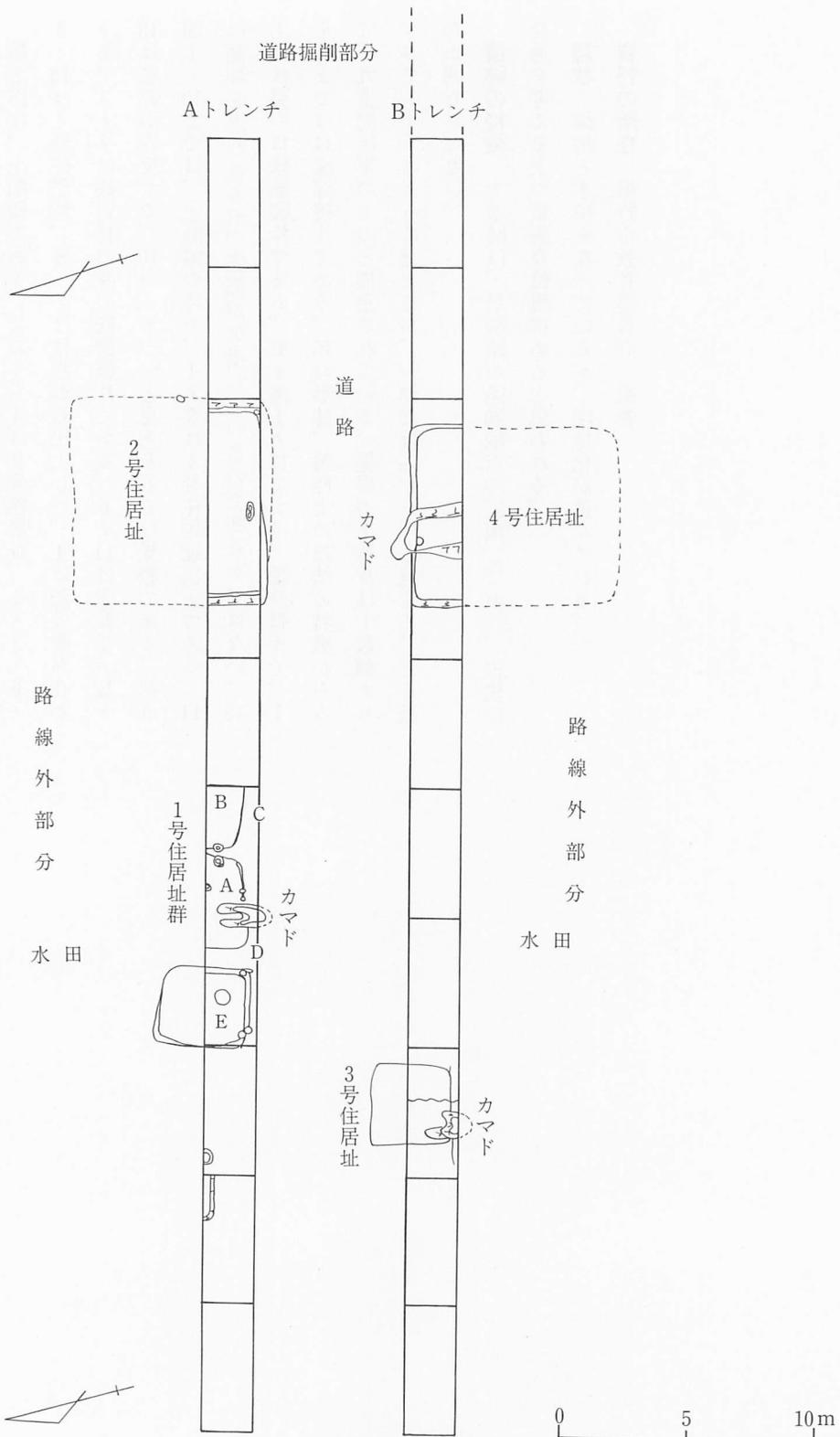
底である。9・10は埴の頸部であろう。11・14・16は甕の破片と思われる。16の形態は不明である。

第2図は、土師器である。このうち4は2号住居址、1・3・6・8・13は4号住居址、5・7は柱穴から出土した。1は蓋と身が合わさる。3・7は高台付の身の底部破片である。8・11は平底で、12・13は底部が内反する。10の「十一」と見えるものは墨書である。第3図1・10までは、土師器の坏で、1・8は4号住居址出土である。11は高坏と思われるが、底部が欠損しているので明らかではない。13・15は甕の口縁部破片である。第4図1・15までは、甕の破片で、1・10までは口縁部破片である。坏の形態、製作上の技法の特徴からみて、九世紀後半のものと推定されている。墨書の土器片は十数個あり、すべて「十」のように見えるが、一つだけ「十一」と見える。どう読むか明らかでない。

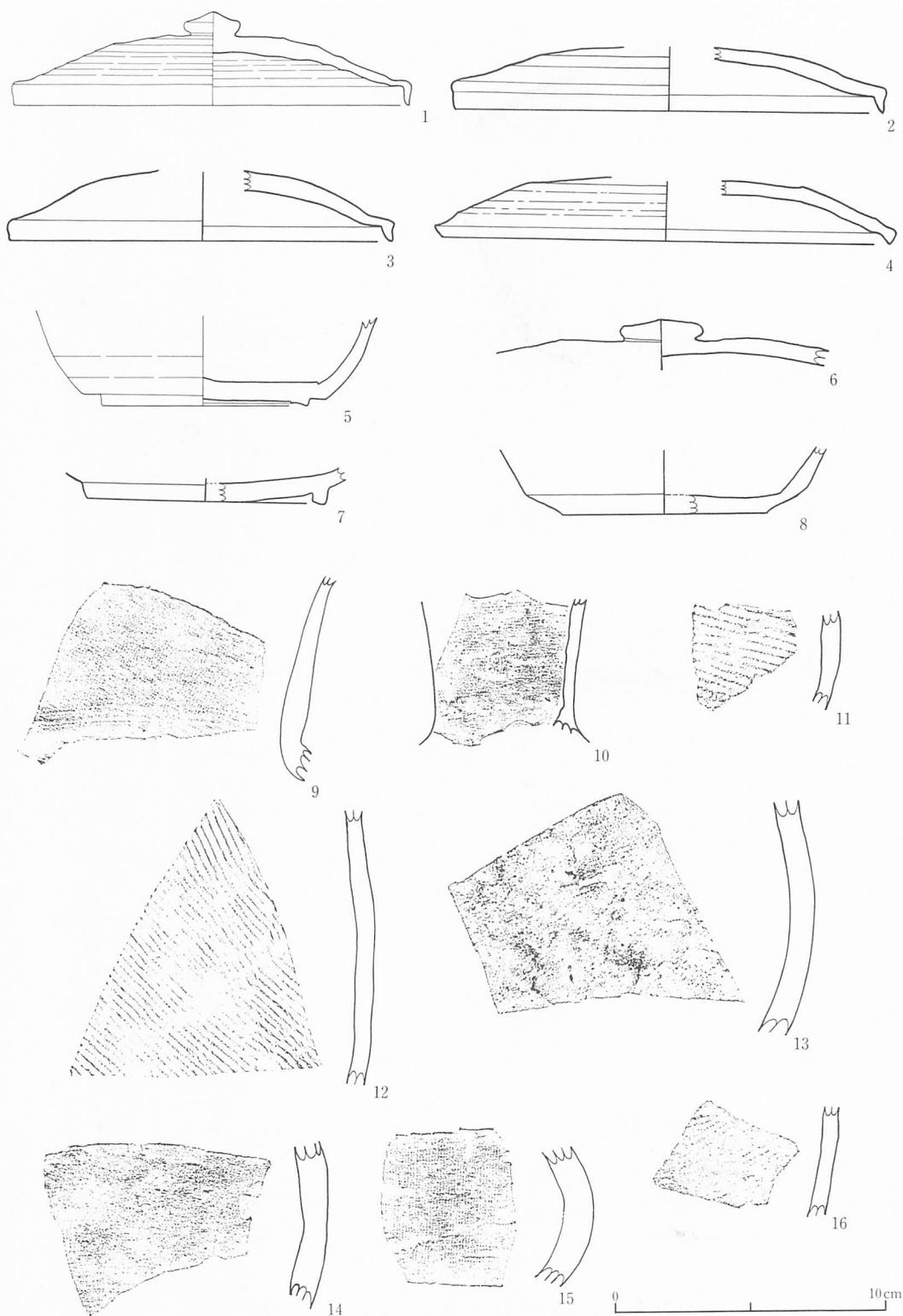
遺跡の特徴 本遺跡は、足柄路の通過地点に立地しており、古代の交通を考えると重要な位置にあると思われる。

現状 畑地と水田となっているが、宅地化が進んでいる。

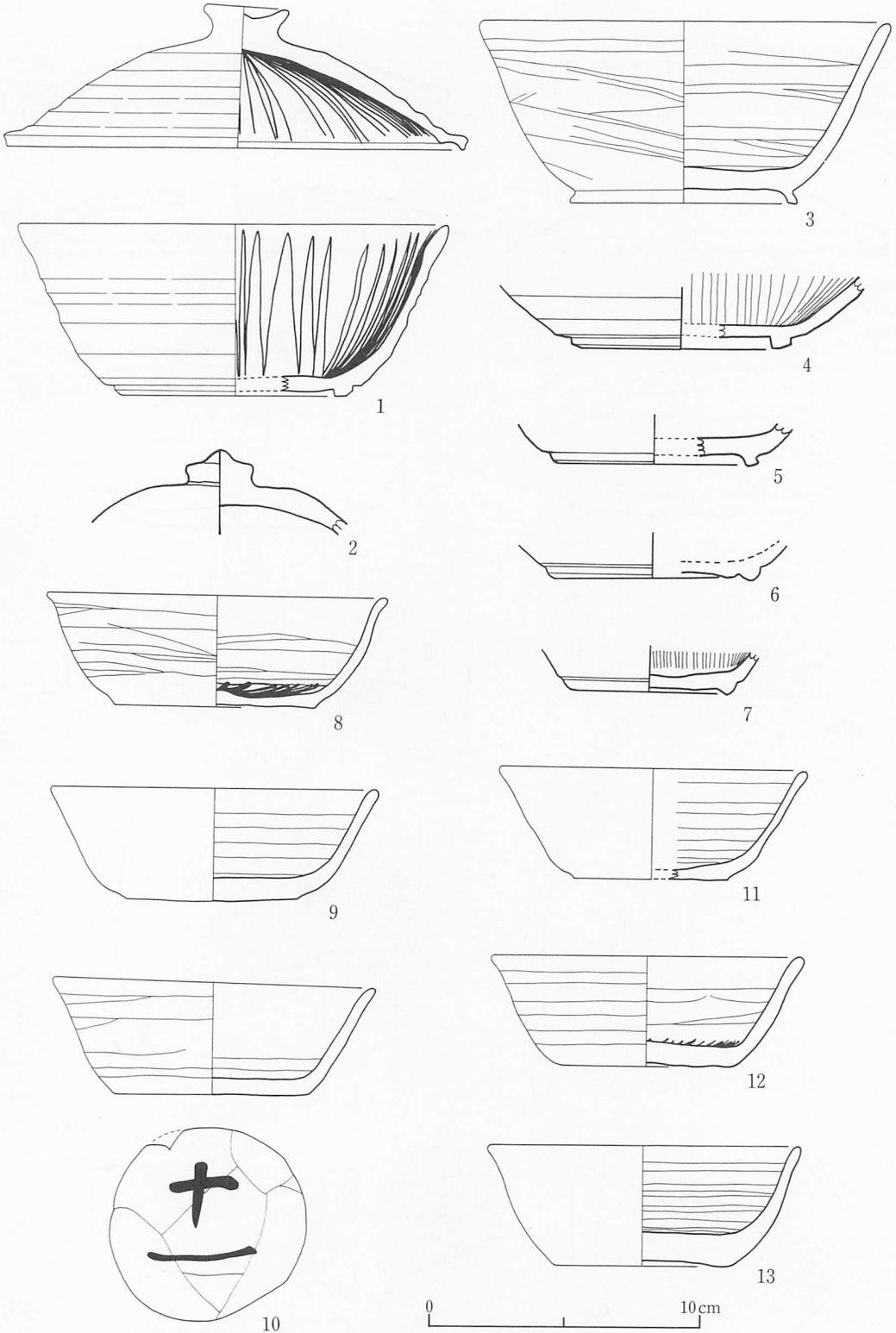
資料の所在 裾野市教育委員会 保管



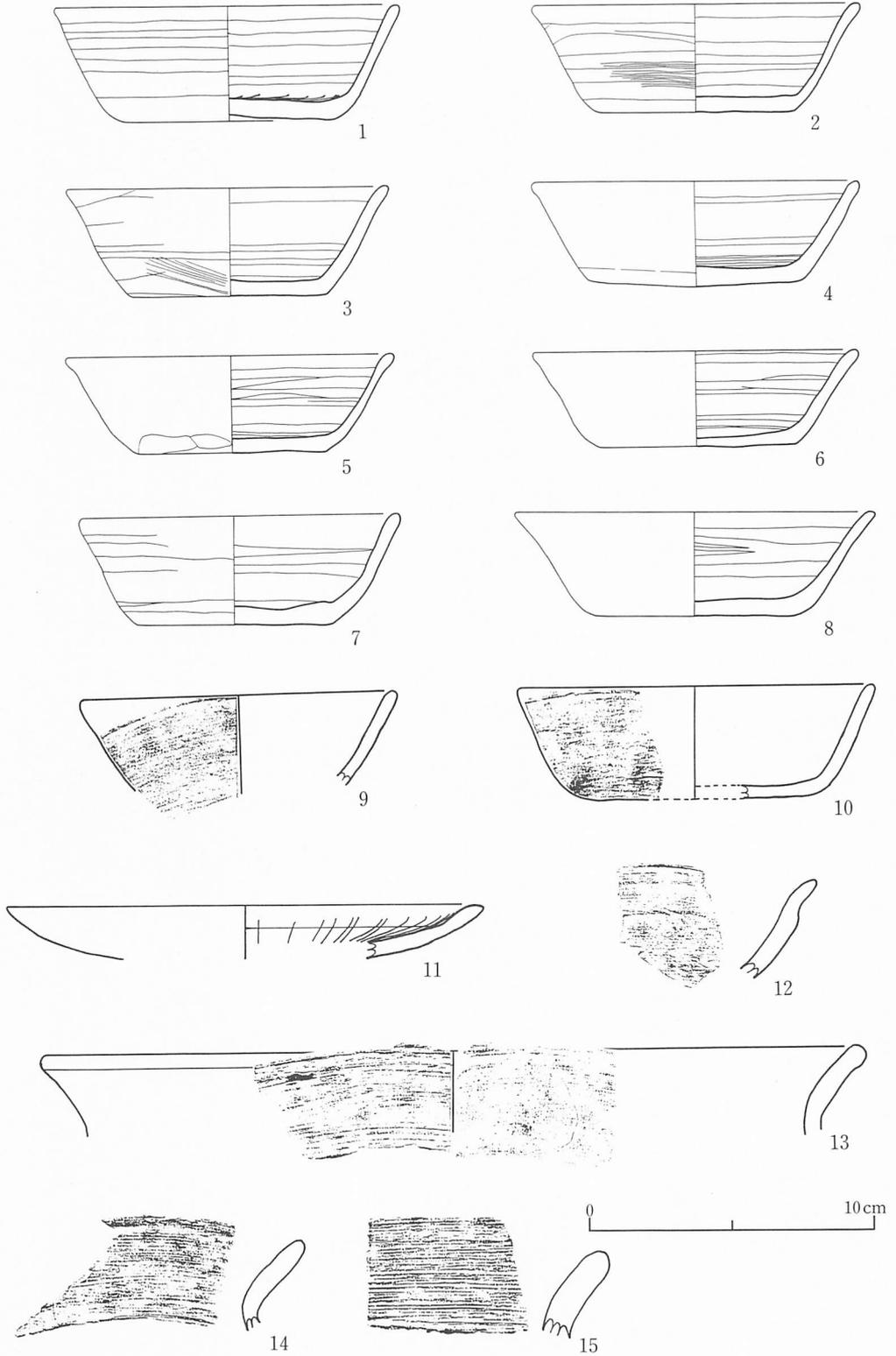
上原遺跡発掘調査図



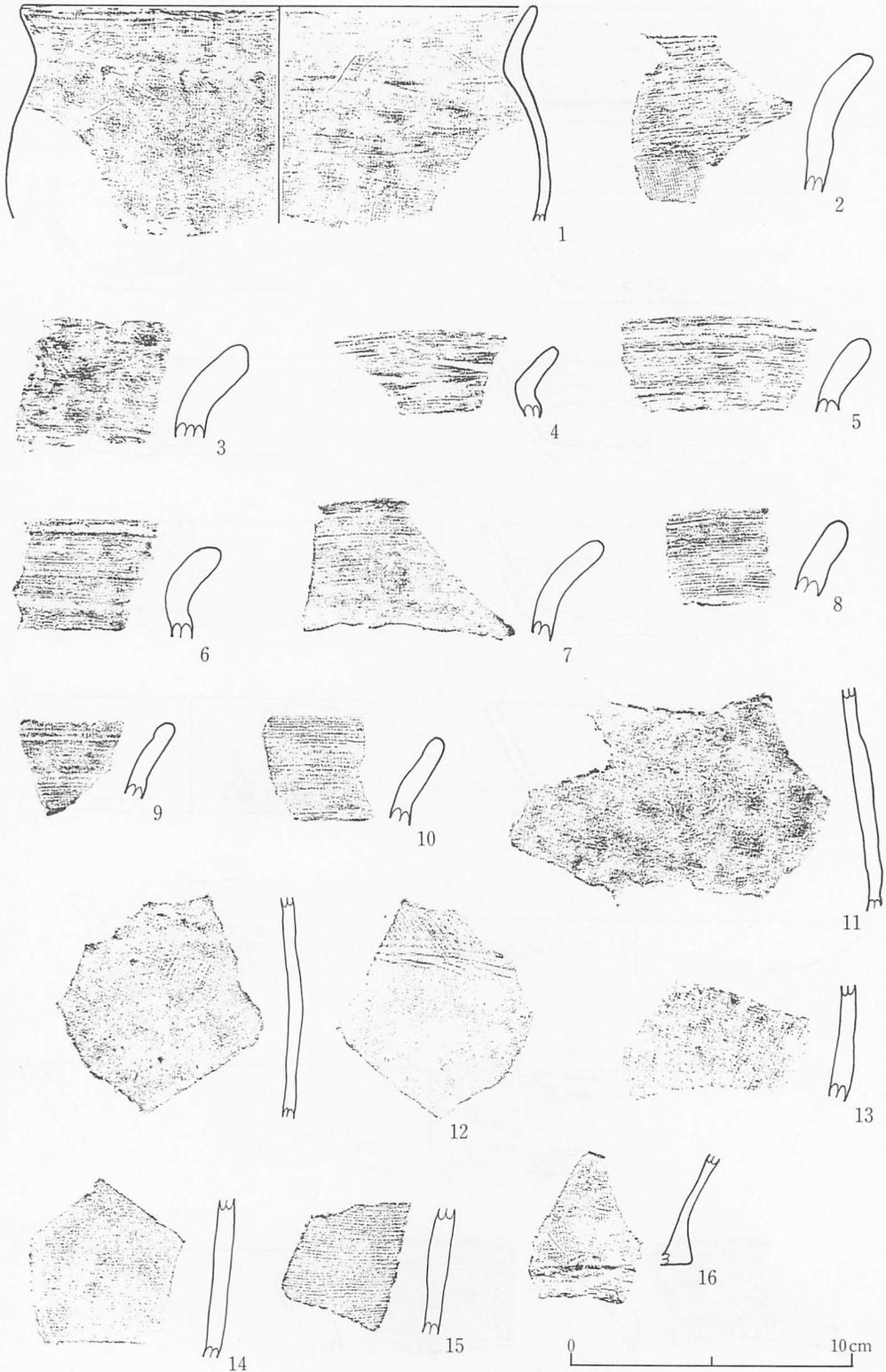
第1図 上原遺跡出土須恵器実測図・拓影



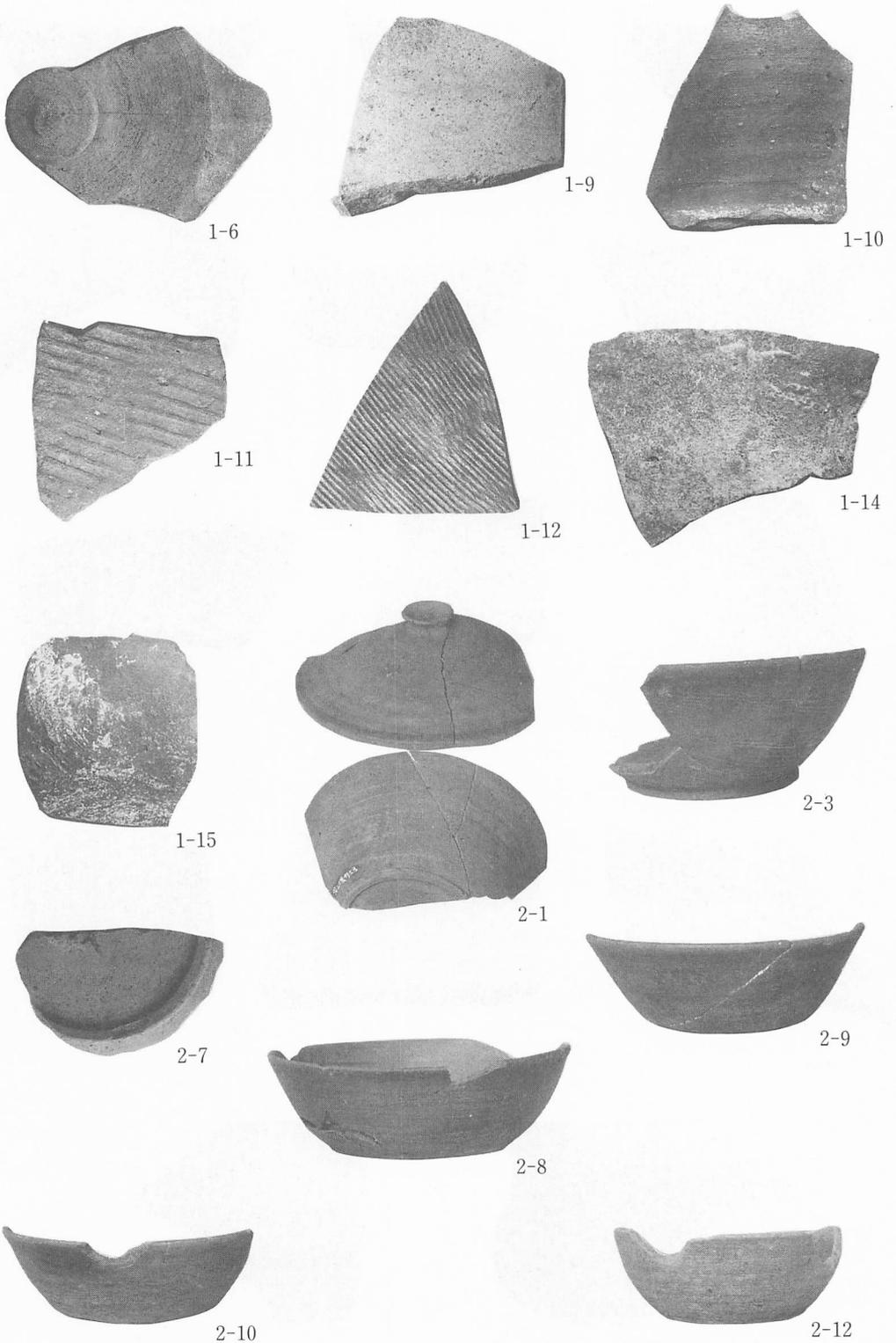
第2図 上原遺跡出土土師器実測図



第3図 上原遺跡出土土師器実測図・拓影



第4图 上原遺跡出土土師器拓影



図版1 上原遺跡出土須恵器・土師器



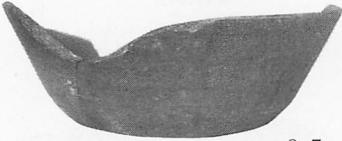
3-2



3-3



3-5



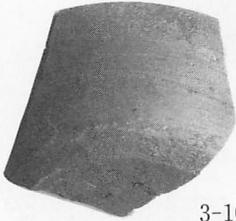
3-7



3-8



3-9



3-10



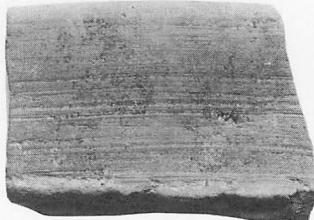
3-12



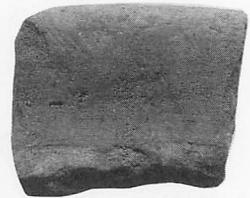
3-13



3-14



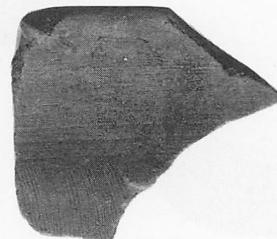
3-15



4-3

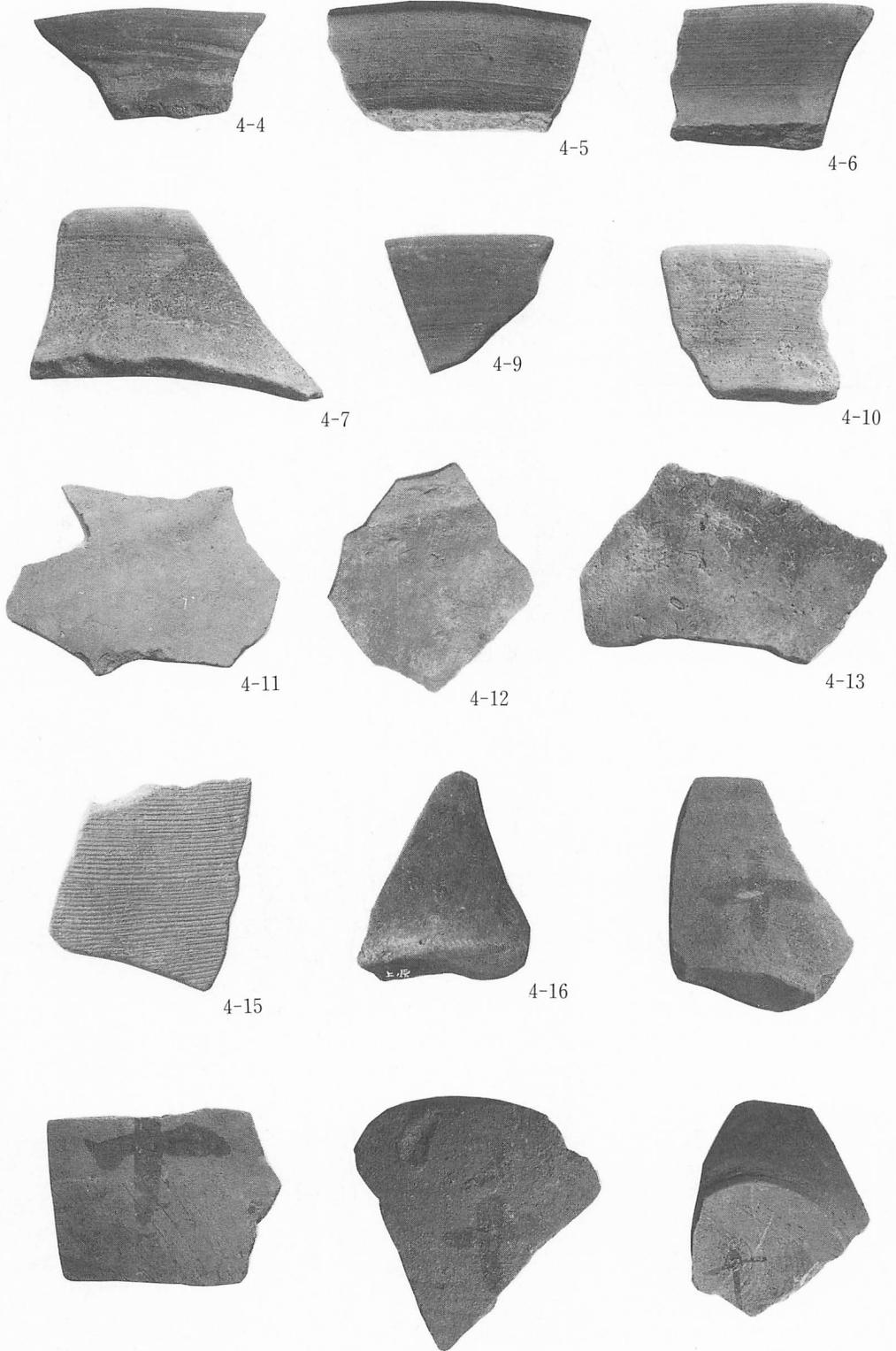


4-1



4-2

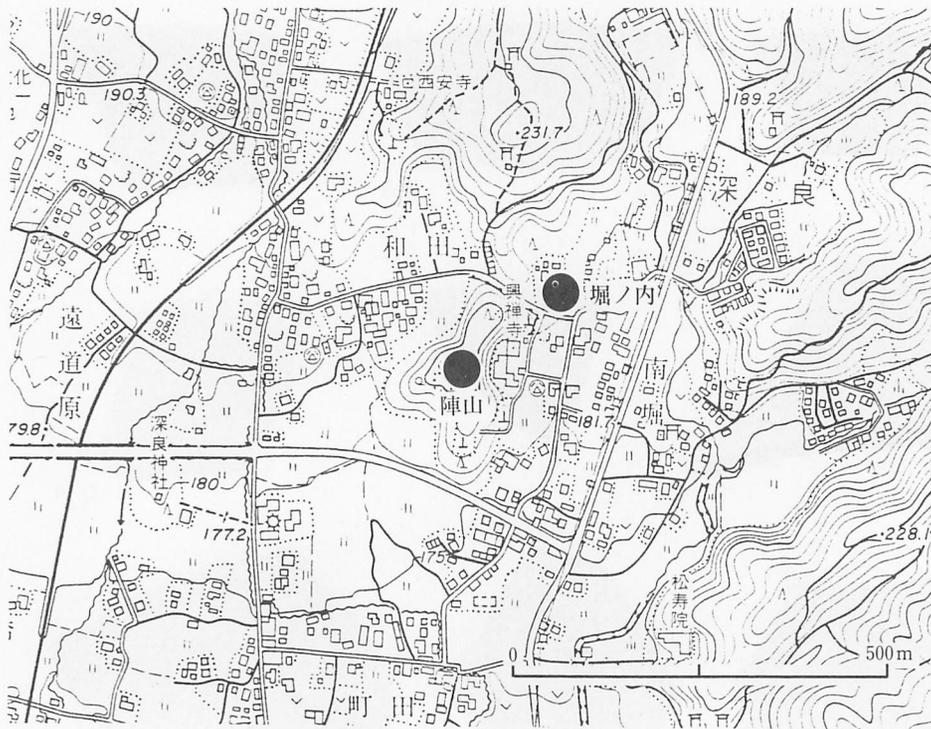
图版 2 上原遺跡出土土師器



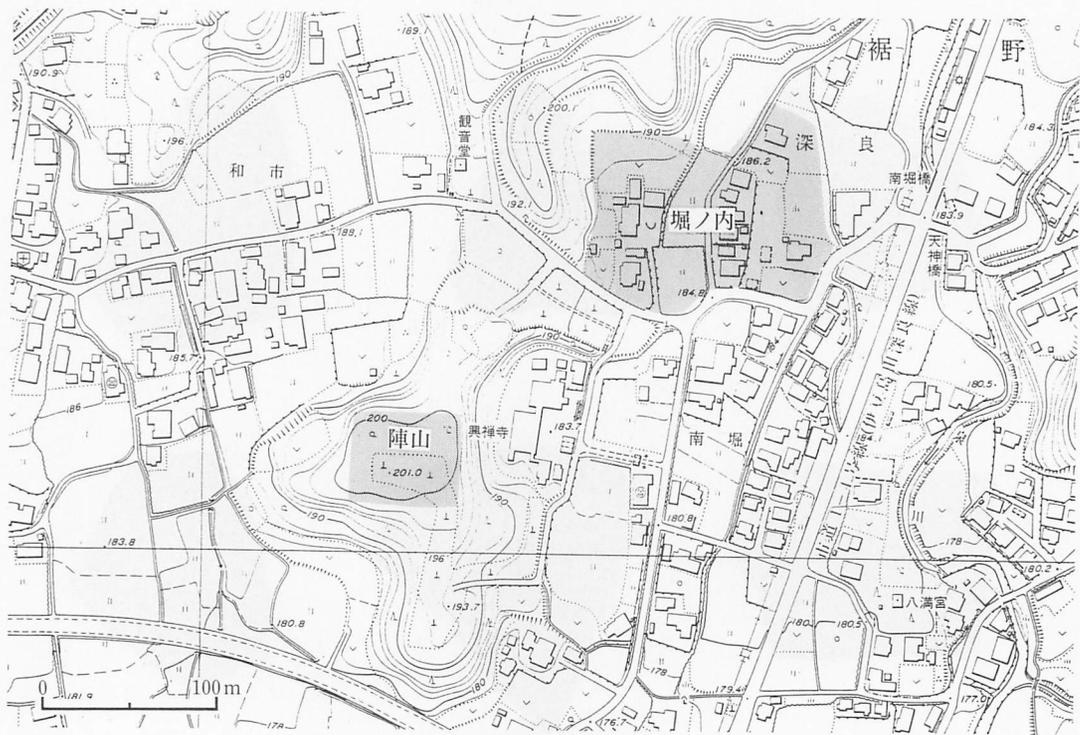
図版3 上原遺跡出土土師器

深良陣山・堀ノ内
ふからじんやま

所在地 裾野市深良字尾崎二二八九番地ほか



位置図



陣山・堀ノ内範囲図

位置と立地 箱根外輪山西麓の尾根末端が細く切れて、残丘状となった高雄山南の、深良字尾崎、通称陣山、海拔二〇一mの平頂部に位置する。東側下に大森頼春が創建したとする興禅寺があり、この北東に隣接して字堀ノ内、南西約二五〇mのところ、に字鍛冶屋敷、南約二〇〇mに字常孝屋敷がある。

発見と調査 陣山土居は、昭和五〇年(一九七五)、伊禮正雄が確認し「御殿場市史研究1」に発表し、その後昭和五三年(一九七八)、中野国雄が踏査して「静岡県の中世城館跡」に報告している。堀ノ内については、昭和一〇年代に、沼館愛三が調査し「駿東地方に於ける城郭の研究」に発表している。これと相前後して昭和五〇年代に関口宏行が「日本城郭大系9」に記載している。

遺構 陣山平頂部は、方約四〇mあり、その東側に高さ約二m、長さ約三七mの土塁が残存しているが、一部は墓地のため消滅している。この平頂部を中心に西側と北及び南側の中段、及び裾部に、小さな平場と帯郭状の遺構らしきものが残存し、陣山丘陵の全体が中世の城郭遺構を示している。北の高雄山丘陵の境目には、和田と堀ノ内を結ぶ古くからの切通しがあり、堀切状遺構となっている。東側の裾部に、谷戸形式的な平坦部があり、前記の興禅寺境内となっている。この興禅寺境内北側に隣接して堀ノ内があり、居館跡としているが遺構はない。また南東約二五〇mに鍛冶屋敷、南約二〇〇mに常孝屋敷があるものの地名だけで遺構はない。なお歴代大森氏墓と伝えられている墓石のある和田上も谷戸地形となっていて、居館跡の可能性もある。沼館愛三は高雄山(天神山)も大森氏の城跡であろうとするが、遺構は

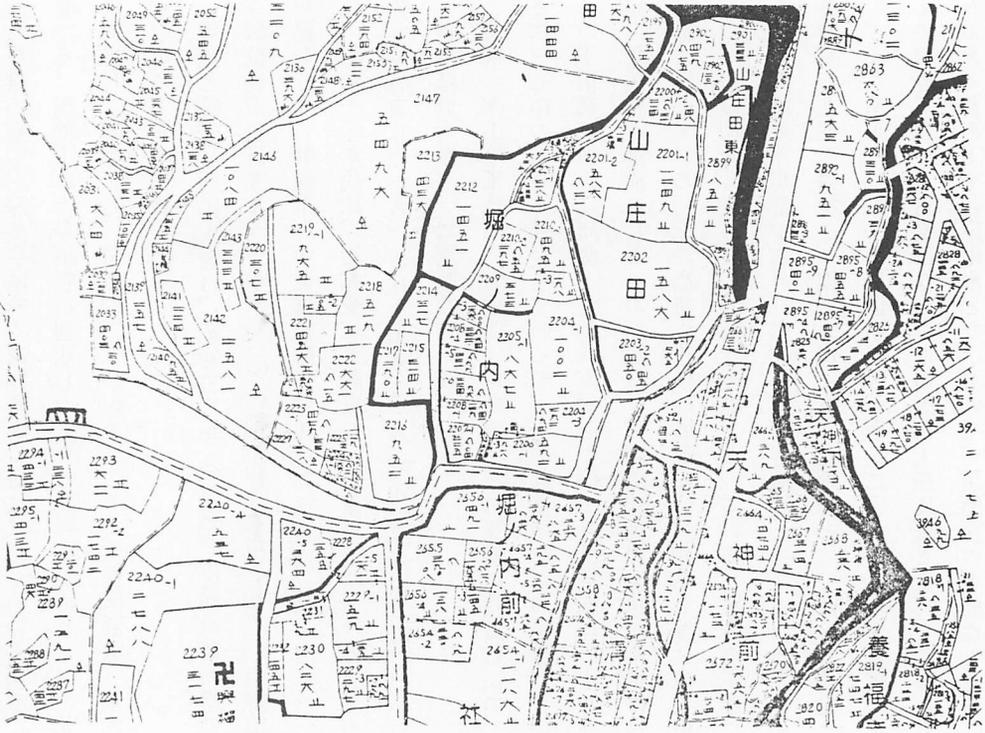
ない。

遺物 昭和五〇年代に、深良南堀出土の遺物として、天目茶碗が確認されている。口径一二cm、高さ六・五cm、底径五cmあり、切高台である。口縁部に細く低い玉縁状の円帯がわずかに見え、曲線を描いて底部となっている。長い間、土中にあつたためか釉は濁暗褐色となっており、底部は露胎である。形状からみて、一五世紀代の美濃古窯産のものと考えられている。

現状 深良陣山土居は墓地と山林、堀ノ内・鍛冶屋敷・常孝屋敷は、住宅地、水田となっている。

文献 沼館愛三「駿東地方に於ける城郭の研究」 静岡県郷土研究第九輯 一九三七、伊禮正雄「御殿場地方の中世城址」 御殿場市史研究1 一九七五、関口宏行「大森館」 日本城郭大系9 新人物往来社 一九七九、中野国雄「大森居館」(堀之内) 静岡県の中世城館跡 静岡県教育委員会 一九八一

(注) 土居というのは、土塁に囲まれた居館跡、屋敷地を指している。



堀ノ内地籍図



深良陣山遠望



深良陣山土居北側



深良南堀出土天目茶碗

〔深良南堀出土の碗〕

図版の碗は、深良南堀出土と伝えられるもので、口径一二cm、高さ六・五cm、底径五cmあり、高台（底の台輪）は削り出している。形態は底部から円曲線を描いて立ち上がり、口縁には玉縁状の小さな縁帯がつく。内外面に暗黒褐色ゆず膚の釉薬が掛けられているが、長く土中であつたためか一部は風化して、暗青褐色化している。底部は露胎で、黄灰褐色を呈している。本品は、裾野市内で出土した唯一の天目茶碗の完形品で、愛知県立愛知陶磁資料館で鑑定したところ、一五世紀代（一四〇―一五〇〇）の古瀬戸系美濃窯のものとされた。

一般に天目茶碗というのは、茶の湯に用いられる抹茶茶碗の一種で、浅く開いた小さな擂鉢形をしている。中国浙江省天目山の仏寺の什器であつたものを、日本の留学僧が持ち帰ってきたので、こう呼ばれるようになったという。中国産のものでは、福建省の建窯の天目茶碗が有名で国宝にも指定されているが、日本では一三世紀以後、僧侶の喫茶の習慣から需要が高まり、一四世紀代から瀬戸古窯で焼かれるようになり、一五世紀から一六世紀にかけて、美濃地方の古窯で多く作られた。中世末には日常用具として普及し、中世の城館跡からは多量に出土する。

所在地 裾野市深良字城ヶ尾三八〇五番地ほか

位置と立地

本遺跡は、箱根西側外輪山から延びた尾根末端の、海拔二六九・六mの丘陵上に営まれた城館跡である。(縄文時代 城ヶ尾遺跡参照)

発見と調査

深良地区には、中世の豪族大森氏にかかわる伝承地があり、城ヶ尾遺跡もその一つである。大正六年(一九一七)に刊行された「駿東郡誌」の城址の項によれば、大森氏館址として「深良村切久保、西安寺上の山にして、其西南に堀の内、又南堀、城ヶ尾などと称する地あり、大森氏世々居住の地にして其墟なり」とある。昭和一二年(一九一七)、駿東郡内の城館跡を調査した沼館愛三は、「静岡県郷土研究」第九輯の「駿東地方に於ける城郭の研究」に於て、城ヶ尾を大森氏の城郭であろうとしている。以後、城郭研究者の手によって再三調査され、おおむね沼館の調査をベースにして、城ヶ尾を城館跡と取扱っている。

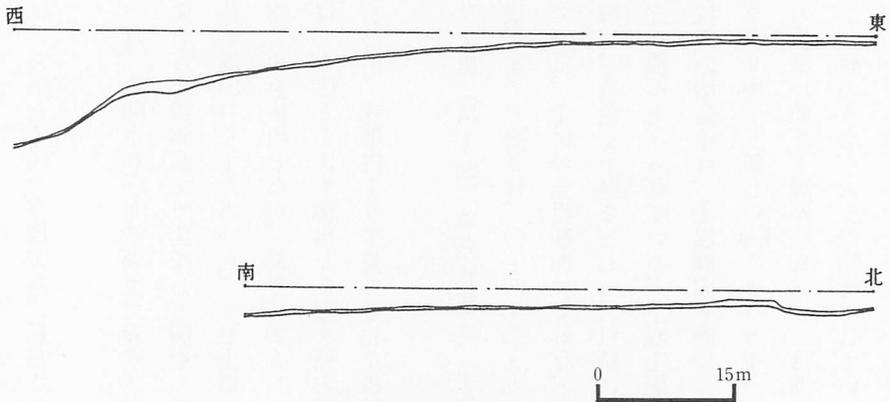
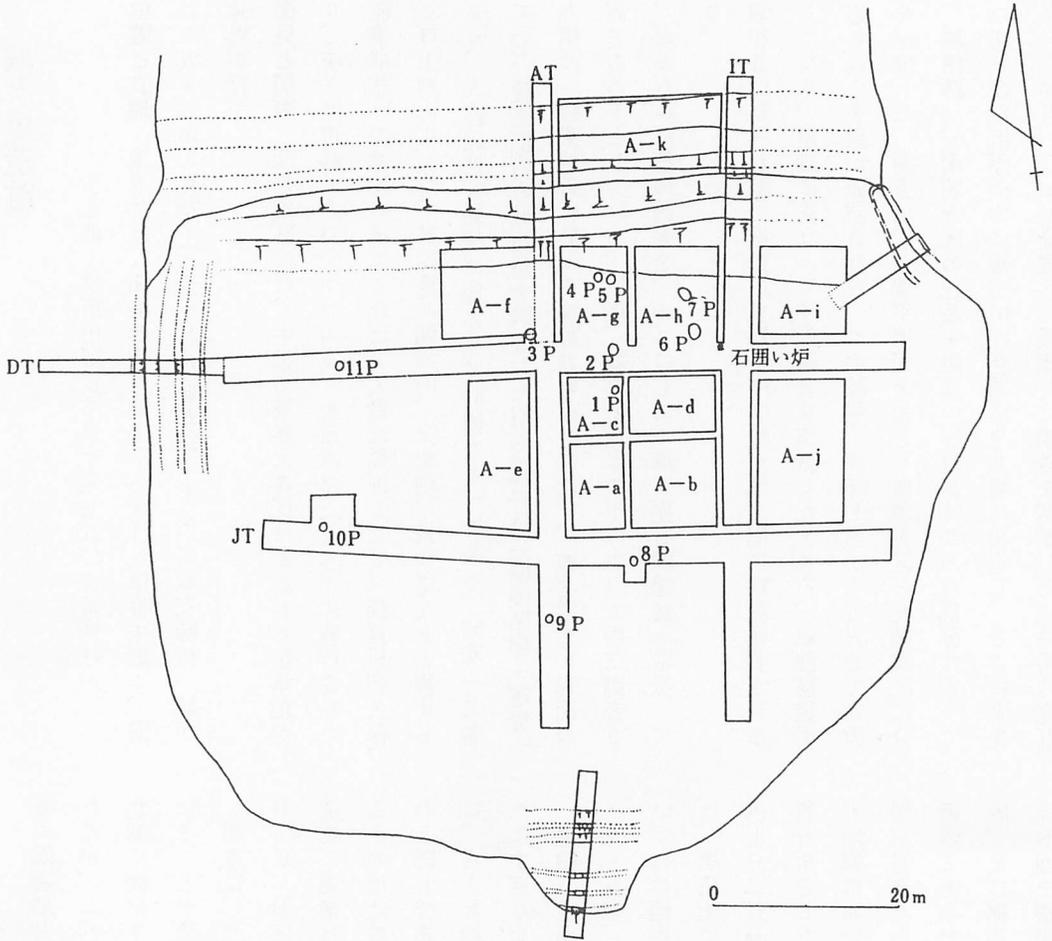
昭和五二年(一九七七)、裾野市立深良中学校が城ヶ尾に移転建設されることになり、建設に先立って予備調査を実施したところ、城館跡遺構と思われる土塁が確認された。この結果、同年七月から九月まで本調査を実施した。調査は、丘陵平坦面を大きく南調査区と北調査区に分け、城館跡は、南調査区の丘陵平坦面の一段高くなった部分であって、この部分の平坦面全体に幅三mの発掘区を井桁に設定し、さらに中央部に一〇m×一〇mの発掘区を設定して調査を開始した。井桁の発掘

区からは、若干の土師器・須恵器が出土し、中央の発掘区からは、少量の陶磁器片が出土した。また土坑七カ所と石囲い炉一カ所が検出されたが、これらは直接城館跡に結びつくものではなかった。発掘区の北側に検出された土塁と空堀は、A区とI区で東西方向に延長されていることが確認された。

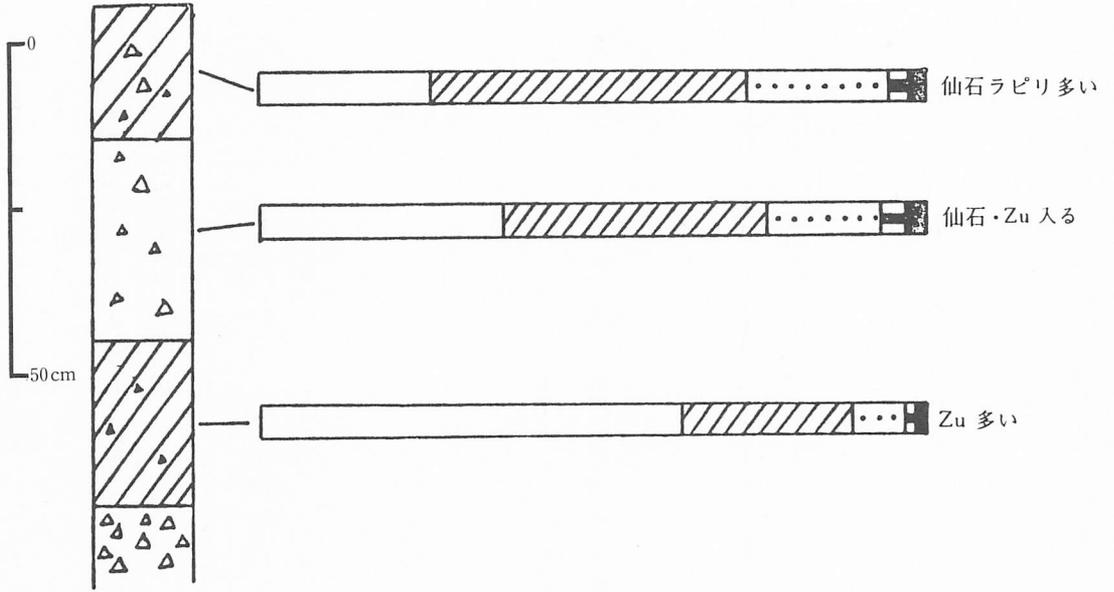
調査は、翌五三年(一九七八)二月、再開され、予備調査で設定されたB・C・D区を、さらに平坦面から丘陵斜面まで延長して調査したが、遺物、遺構は検出されず、全体が地山のままであった。また土塁下部とその周辺の調査では、土坑四カ所を検出したが、前年、調査したものと同じであり、空堀の調査は、A区とI区で検出した堀を結ぶ線上に、A-k地区を設定し調査したが、空堀内より少量の遺物を検出したにすぎなかった。

遺構 三地点で計測された土塁(第1図)の基底幅は、平均九

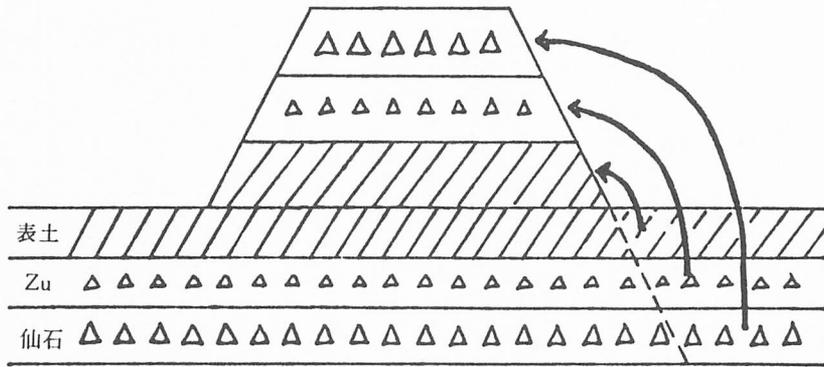
〜九・五m、基底部より現存頂部までの高さは、〇・八〜〇・九mで、いずれの地点でもほぼ同規模である。I区の土塁断面によれば、I層は、黒色土で厚さ三五cm、II層は、茶色土で厚さ三七cm、III層は黒褐色土で二五cmの厚さで、それぞれ積み上げられている。土塁土層の土質分析をした県立吉原高等学校教諭増島淳は、土塁構成土層について、本地域においては、Zu II砂沢ラピリ層より新しいKey IIカワゴ平バミス層が見当たらないため、土塁の構築時期を土層から知ることが非常に困難であるが、土塁を構成する土層のうち、人工が加えられている土層、及び構築方法を知る手がかりは若干得ることができた。土塁のカット面を観察すると、砂沢ラピリ層以下は自然堆積層であるが、その



第1図 城ヶ尾城館跡発掘調査図(土塁と断面)



城ヶ尾遺跡土層分析



城ヶ尾遺跡土層構築模式図

第2図 城ヶ尾城館跡土層構築工層図

上部の極暗褐色土層から上部は人工によっているようである。また土塁の構築方法は、肉眼的特徴からみて、カワゴ平バミスからなる堆積物の混入量が上下で自然状態に対して逆転しているように思える。その模式的な推定構築図を第2図に示しておく。

このことから、土塁構築時の表土は、Ⅲ層の黒褐色土と考えられ、土塁は、その上に空堀から掘り出した茶色土を、堤状に固めながら構築したものと思われる。また、土塁が空堀と接する基底部は、後世、耕作時に削られ、かなり破壊されていることが明らかとなった。土塁基底部に該当する一〇mの範囲に帯状の黒褐色土は、南地区台部の大部分には見られず、耕作、植林時に失われたものと思われる。土塁の基底幅を〇・九mとすれば、土塁の高さは、一般的には四m以上と推定される。Iトレンチの土塁基底部直上の第Ⅱ層茶褐色土中から、土師器三片が出土しているので、土塁構築時期は、古墳時代をさかのぼることはないと思われる。

空堀(第1図)は、表面調査と予備調査で、丘陵上を東西方向に横断した、延長約七五mの空堀と土塁が確認され、A-k地区を全面調査した結果、第1図のように、いずれの地点で計測しても平均の幅九〇m、最深部〇・八〇・九mで、断面は、ゆるやかなレンズ状を呈していた。空堀内は黒色土が堆積し、二層に区分できる。一層は黒色土、二層は黒色土に少量のスコリアが含まれている。空堀内から完形石鏃一点、黒曜石片二点、土師器片三点、陶器片が検出されたが、攪乱は全面に及んでいた。空堀は、丘陵上を東西に横断しているが、東端は支谷に下り、西端は豎堀状に丘陵斜面を下っている。

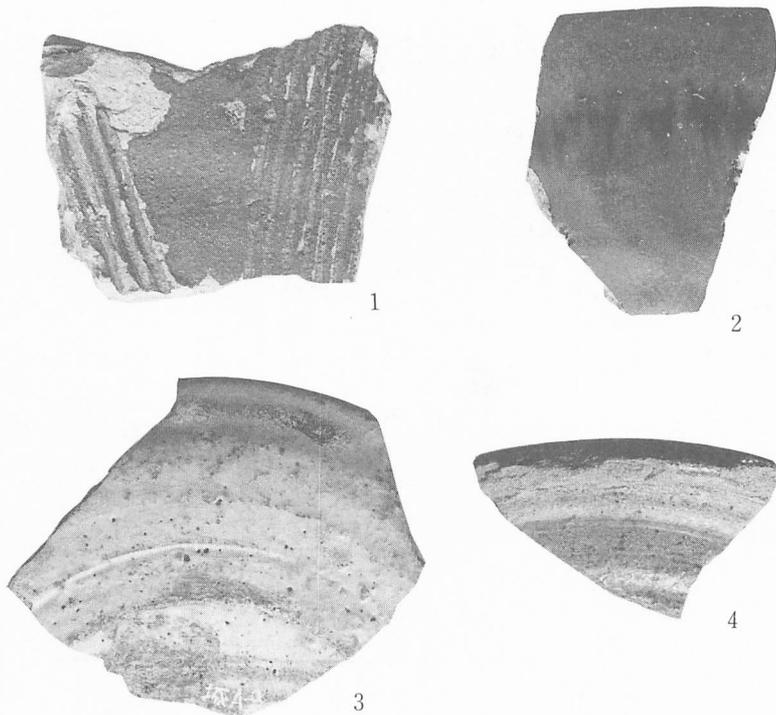
これ以外の遺構に、土坑が九カ所検出されているが、直接、城館跡と結びつくかどうか明らかでない。土坑は、調査区全体に分布し、上部が攪乱されているため、切り込みは明瞭でない。土坑内の覆土は、表土、茶色土、白色軽石層、茶褐色土層、栗色土層と堆積し、土坑底部は、茶褐色土層でとまっている。茶褐色土層は、当地方では富士マサと呼ばれる固くしまった火山灰層で、土坑底部はいずれも固層でとどまっていることが共通している。土坑は、形状から皿状、漏斗状、皿状に柱穴を伴うものの三種類に分類できる。土坑内から土師器の小片が出土しているが上面からのものであり、構築時期や性格を明らかにする遺物は出土しなかった。

遺物

図版の1は、青灰濁色の釉(鬼板)がかかる播鉢の破片で、

数条の播目がみえる。美濃古窯産の特色をもち、一六世紀代のものと思われる。2は、全体に茶黒褐色の光沢のある鉄釉のかかる、天目茶碗の口縁部破片で、播鉢と同時期の美濃古窯産のものと思われる。3は、やや厚手の灰釉のかかった、志野焼風の小皿破片で、これも同時期のものとしてよからう。4は、同じ灰釉のかかった角のある円帯をめぐらす陶片であるが、器形は不明である。(奥田直栄記 中野国雄補筆) その他に、「かわらけ坏」破片と、窯不明の陶片が若干あった。

遺跡の特徴 本遺跡の土塁は、東北端に一まわり小さな土塁が鈍角をなして存するだけであるし、空壕も中世通有の葉研堀やげぼりや箱堀ではない、ごくゆるやかなU字形をなす変わった空壕である。その他に顕著な遺構が見当たらず、土坑も年代不詳であるし、柱穴状のものも建造物を示すほどには及ばない。しかし一種の防御施設であることは間違



図版 城ヶ尾遺跡出土陶片

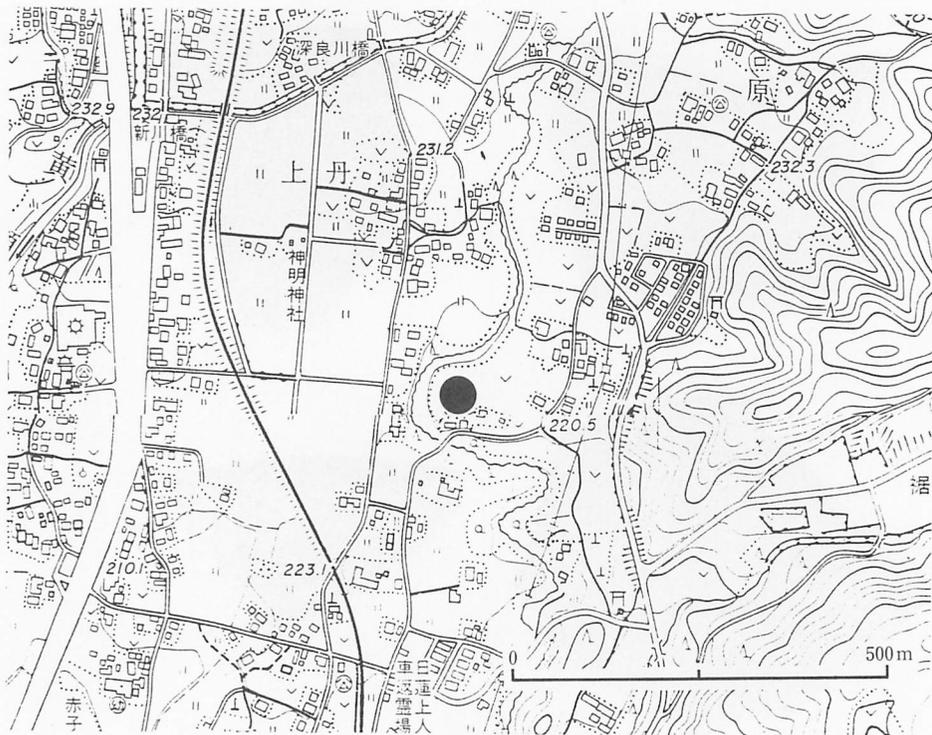
いなかろう。出土遺物は、わずかな破片しかなく、しかもあいまいなところもあって、城郭的遺構の年代論の決定的なきめてにはならないが、層位の観察から須恵器、土師器の年代よりも、城郭遺構に結びつく公算が強い。(奥田直栄)

現状 発掘調査後、裾野市立深良中学校敷地となり完全に消滅した。

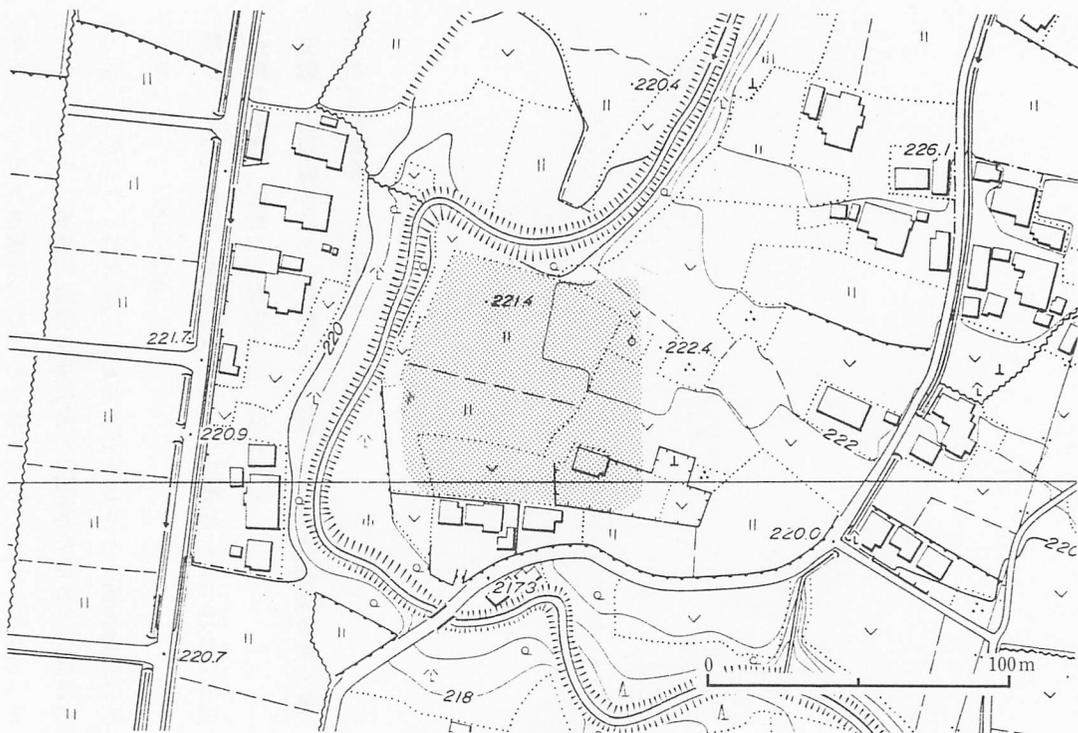
資料の所在 裾野市教育委員会 保管

文献 笹津海祥ほか「裾野市深良城ヶ尾遺跡発掘調査報告書」 裾野市教育委員会 一九七七

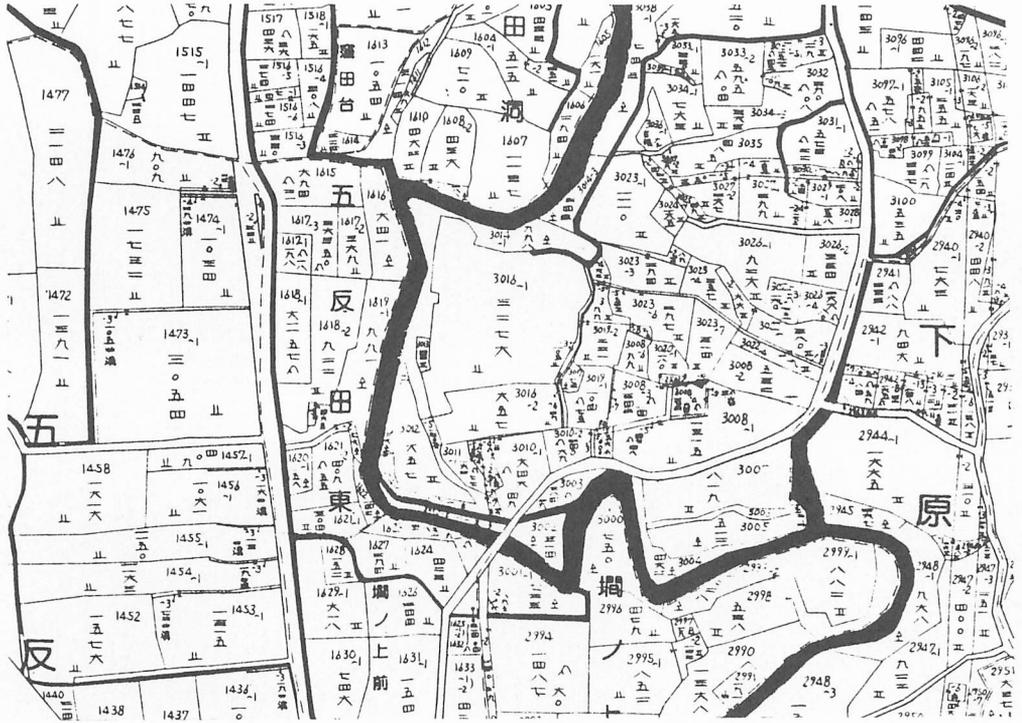
所在地 裾野市深良字原三〇一六番地



位置図



上丹屋敷範囲図



上丹屋敷地籍図

位置と立地 深良須釜方面から南へ向かって流れる、旧深良川（古川）が、原地区で大きく逆コの字状に迂回する内側に囲まれた、海拔二二一mのところの位置する。方約八〇mほどある平坦地で、北から西、南側を古川の沢谷が台状平面を浸食して流れ、東側に広く開けている。

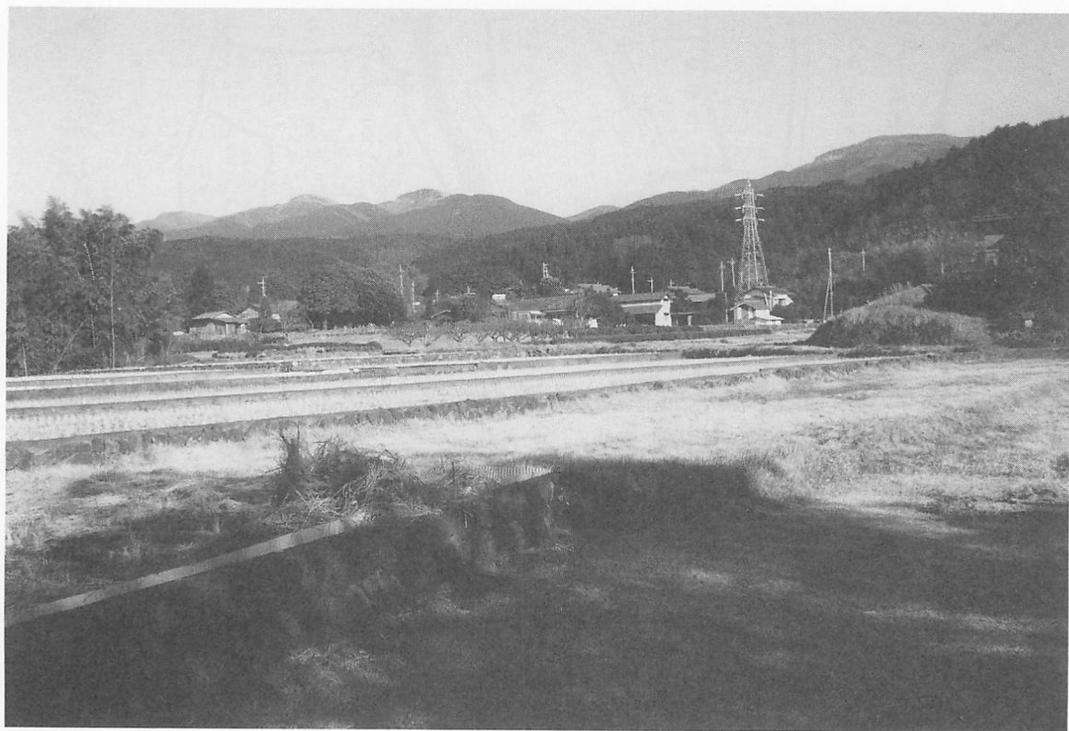
発見と調査 昭和一〇年代、沼館愛三が踏査し、中世大森氏の居館跡として、「駿東地方の城郭の研究」に発表している。その後、昭和五〇年代の前半に、相前後して伊禮正雄、関口宏行、中野国雄が調査している。（深良陣山土居の項参照）市史編さん事務局の城館跡調査で、上丹屋敷というのは沼館愛三が呼称したものであって、地元では古屋敷といい、勝又家の屋敷地であったという。

遺構 本屋敷地の南西に小丘があり、沼館、伊禮、関口の調査ではこの小丘を本居館跡の土塁址とし、中野は「静岡県の中世城館跡」に於て、古墳の可能性もあると指摘している。（上丹古墳の項参照）

遺構の特徴 古川（旧深良川）の迂曲部を天然の要害とした、中世大森氏の居館跡であるという。

現状 水田、芝畑となっている。

文献 深良陣山・堀ノ内の項と同じ



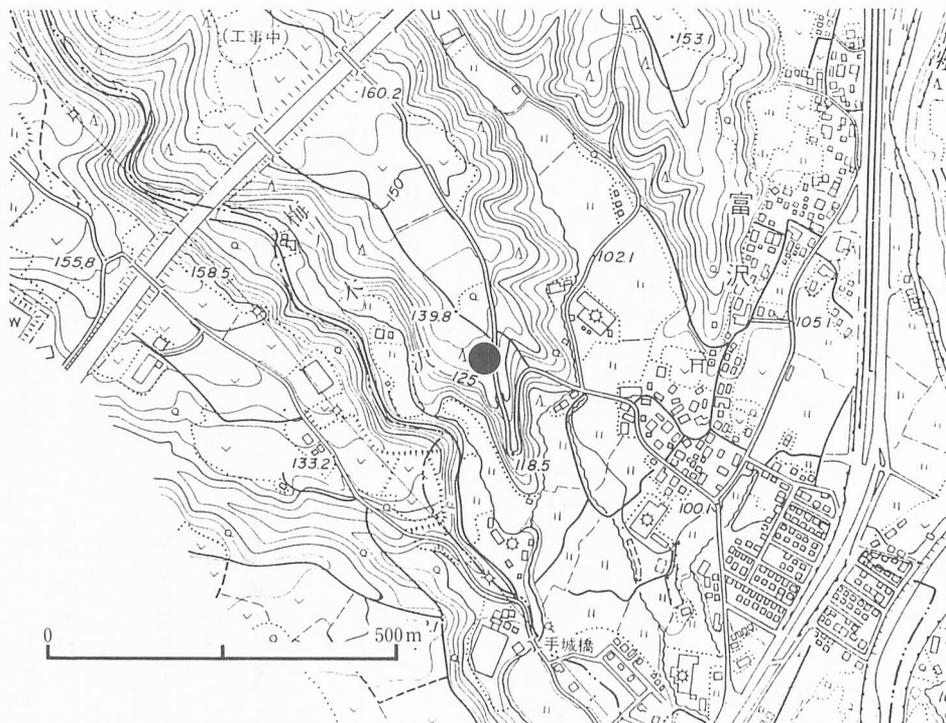
上丹屋敷望景(南西から)

(用語解説)

土塁 土を盛りあげて堤防状にした防御施設で、土居ともいう。外側に堀を掘った時に出土を内側に盛り上げる場合が多くみられ、これを掻上土塁ともいっている。居館跡によくみられる。また山城跡で、地形によって地山を削り出して土塁の形にしたものもある。土塁の規模はまちまちで、大きなものは底辺(底敷)一二m、高さ四m位ある。断面は台形で上面を馬踏ともいう。馬踏に木柵、塀など設けた例もあり、この場合、その外側を犬走、内側のテラス状の通路を武者走などともいう。

とみざわまきはしお
富沢牧橋尾遺跡

所在地 裾野市富沢字牧橋尾五八五番地付近



位置図



富沢牧橋尾遺跡出土鏡拓影・写真

位置と立地 富沢下の集落から長泉町と接している、字牧橋尾の丘陵平坦部の南斜面から鏡が出土したという。南側に梅木沢の沢谷が南東方向に流れている。

発見と調査 明治四十三年（一九一〇）頃、この開墾地畑の耕作中、一尺一尺五寸（約三〇～四五cm）位の地下から発見されたとする。昭和五年（一九三〇）二月、芹沢充寛が調査している。遺構、伴出遺物等は不明である。

遺物 鏡は面径九・二cmの銅鏡。縁帯は直角に立ち上がる。鏡背の外区は二帯の細線文帯をめぐらし、内区に咲き乱れる菊花と二羽の遊雀、下方に州浜の流文を鑄表している。菊花文鈕である。鑄上がりは比較的良好であるが、土中に埋もれていたためか腐食の凹凸がみられる。縁帯が立ち上がり、背文の特徴から菊花双雀鏡といわれ、鎌倉時代一三～四世紀代のものと思われる。

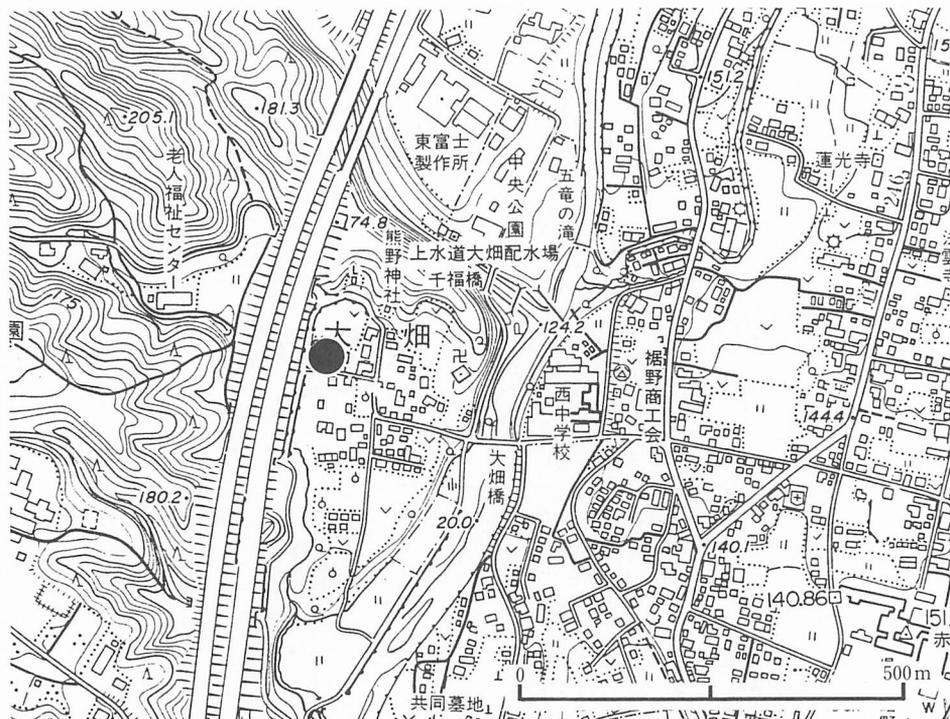
遺跡の特徴 この時代の鏡面が出土する遺跡は、経塚が多い。

現状 畑地である。

文献 渡辺慎一・芹沢充寛「富沢山出土の銅鏡」

おほはた
大畑遺跡 (上屋敷地区・中屋敷地区)

所在地 裾野市大畑



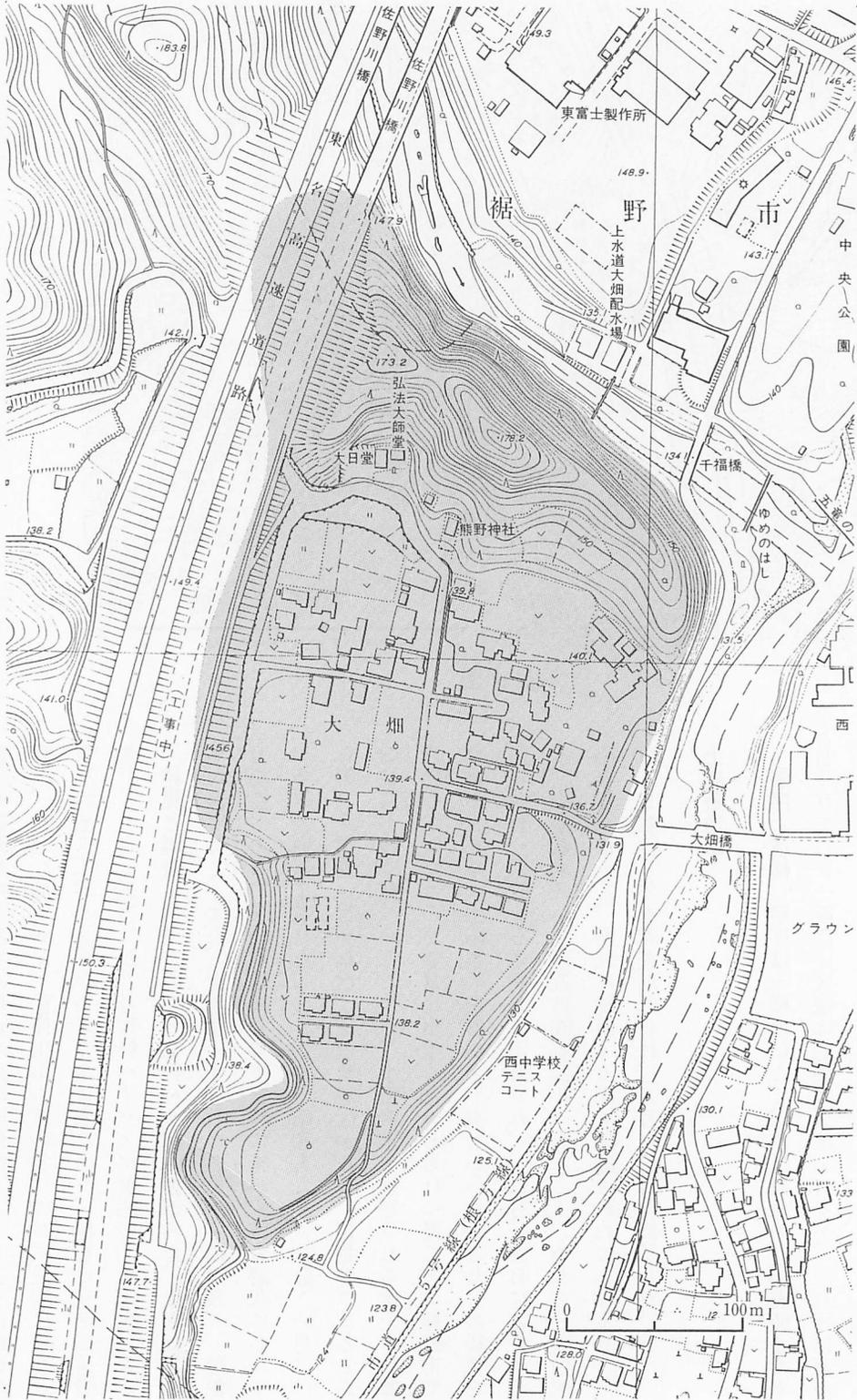
位置図

位置と立地 愛鷹山の東麓、北方の葛山、千福から南下してくる佐野川が黄瀬川に合流する地点の南西に位置し、すぐ近くには著名な景勝地、五竜の滝がある。愛鷹山から放射状に伸びる丘陵に挟まれた台状平坦地に広がる大畑の集落の西辺部にあり、現在は東名高速道路と並行して走る国道二四六号裾野バイパスが遺跡の上を通過している。

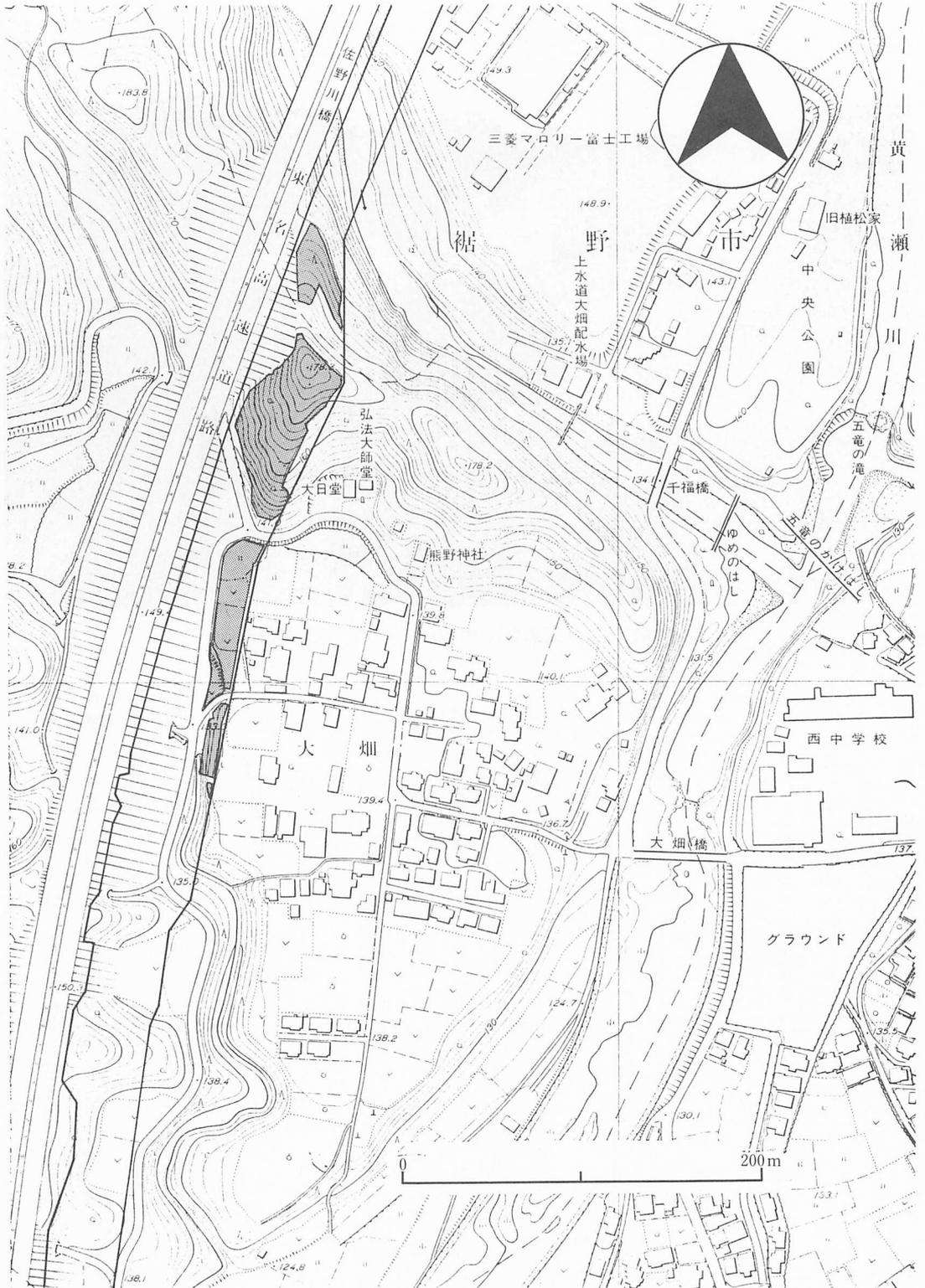
発見と調査 国道二四六号裾野バイパス路線内に、大畑城跡の一部がかかること、また、上屋敷・中屋敷などの小字名が残り、居館跡の可能性があること、現地踏査で平安時代末から鎌倉時代にわたる遺物が多数表面採集されたことにより、昭和五九年（一九八四）一月二〇日から第一次調査が行われた。上屋敷地区からは、建物跡になると思われる柱穴が多く見つかったこと、小鍛冶址と推定される焼土が広範囲に点在していたこと、豊富に出土したかわらけに混じって裾野市では類例があまりない中国製の磁器が多く見つかったことなどの経緯をへて、同年四月一〇日から本調査が実施され、一二月一五日には終了している。中屋敷地区からは近世陶磁器片に混じって、かわらけ・中国産陶磁器片が出土し、南北に縦断する溝も確認されたことにより、上屋敷地区と並行して本調査が行われ、五月三〇日に終了した。

上屋敷地区

層序と遺構 層序は一樣ではなく、六区以北の、調査時まで水田が営まれていた一段高い区域は七層に分けられるが、一六区以南の畑地では表土を取り除くとすぐ基盤層が現れた。区域ごとの基本的な層序は次のとおりである。



遺跡範囲図



大畑遺跡周辺地形図及び裾野バイパス路線図



大畑城跡・大畑遺跡全景(南から) バイパス工事着工前

(三区～六区) 第I a層 耕作土(水田)。第I b層 赤褐色土、粘性強く、硬い。第I c層 暗黄褐色土、粘性強く、極めて硬い。第I d層 黒褐色土。第I e層 灰褐色土、小石を多量に含み、硬い。第II層 暗黒褐色土、粘性弱く、やや軟らかい。遺物包含層。第III層 黄褐色土、粘性弱く、やや硬い。遺構検出面、基盤層。

(七区～一三区) 第I a'層 耕作土(畑)。第I b'層 旧耕作土(畑)。第II層 暗黒褐色土。第III層 黄褐色土。

(一四区～一五区) 第I a'層 耕作土(畑)。第II層 暗黒褐色土。第III層 黄褐色土。

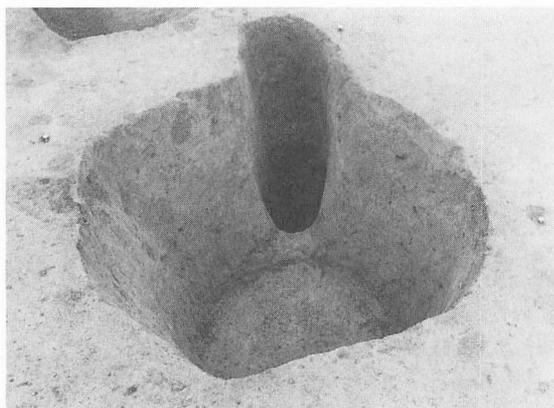
(一六区～一八区) 第I a'層 耕作土(畑)。第III層 黄褐色土。主として遺物は第II層から出土し、遺構は第III層から検出された。

遺構の種類と数は次のとおりで、土坑状遺構六〇基、竪穴式住居跡二基、柱穴状ピット一〇四六基、掘立柱建物跡四基、溝状遺構一六基、小鍛冶遺構二七基、中世墓一基、集石土壇一基が検出された。

土坑状遺構(SK) 遺物が出土し、その遺構の年代や性格が推定できるものを取り上げる。SK1は(図版1) E一四・一五区に位置し、南側は現代の芋穴により削られている。長径二〇七cm、深さ七二cmの隅丸方形の土坑である。山茶碗の底部と線刻石製品が出土している。平安時代末期の土坑と考えられる。SK2(図版1)はE一三・一四区に位置する。長径一五三cm、短径一三七cm、深さ九一cmの隅丸方形の土坑で、山茶碗の底部とかわらけの破片、大小の礫が出土している。平安時代末期～鎌倉時代初頭の土坑と思われる。SK3(図版1)はE一五区に位置し、長径一〇三cm、短径九六cm、深さ

五四 cm の規模をもつ円形の土坑で、山茶碗の底部が出土しているが、出土位置が上端に近い。土坑に伴うものか明らかでない。SK 18 は C—八区に位置する。長径一五四 cm、短径一一六 cm、深さ二二 cm の隅丸楕円形の土坑で鏡と礫が出土している。灰の流れ込みがみられる。SK 19 は C・D—八区に位置する。長径一九二 cm、短径七六 cm、深さ一八 cm の隅丸長方形の土坑で、かわらけと砥石の他、二五〇 cm 大の礫及び直径二五 cm の鏡餅状の円礫が出土している。SK 20 は D—八区に位置する。長径七九 cm、短径六九 cm、深さ三三 cm の隅丸方形の土坑で、青磁・かわらけ・釘・多量の炭化物が出土している。平安時代末〜鎌倉時代初頭の土坑と考えられる。SK 32・33 は C—七区に位置する。SK 32 は SK 33 を切って検出され、長径九一 cm、短径八〇 cm、深さ二六 cm のほぼ円形の土坑で、炭化物と焼土が多量に混入している。小鍛冶関係の遺構か、あるいは、炭化物・焼土の廃棄用の土坑であろう。軽石が出土している。SK 33 は長径九一 cm、短径八三 cm、深さ二三 cm のほぼ円形の土坑でかわらけ小片・砥石の他、炭化物を少量混入する。SK 35 は D—三・四区に位置し、長径九四・五 cm、短径六三・五 cm、深さ四九 cm の楕円形の土坑で、土師器甕を出土している。古墳時代中期の土坑と考えられる。SK 37〜39 は C—四区に位置し、三基重複しあって検出された。SK 37 は長径八一 cm、短径七九 cm、深さ四五 cm のほぼ正円形の土坑で、SK 39 に切られている。SK 39 から鉄滓と石床と思われるものが出土しているが、石床は覆土の上端であることから土坑に伴わない可能性もある。

竪穴式住居跡 (SB) 二基が検出されている。SB 1 は D—六区



右上 SK1

右下 SK2

左上 SK3

図版 1 土坑状遺構 (SK)

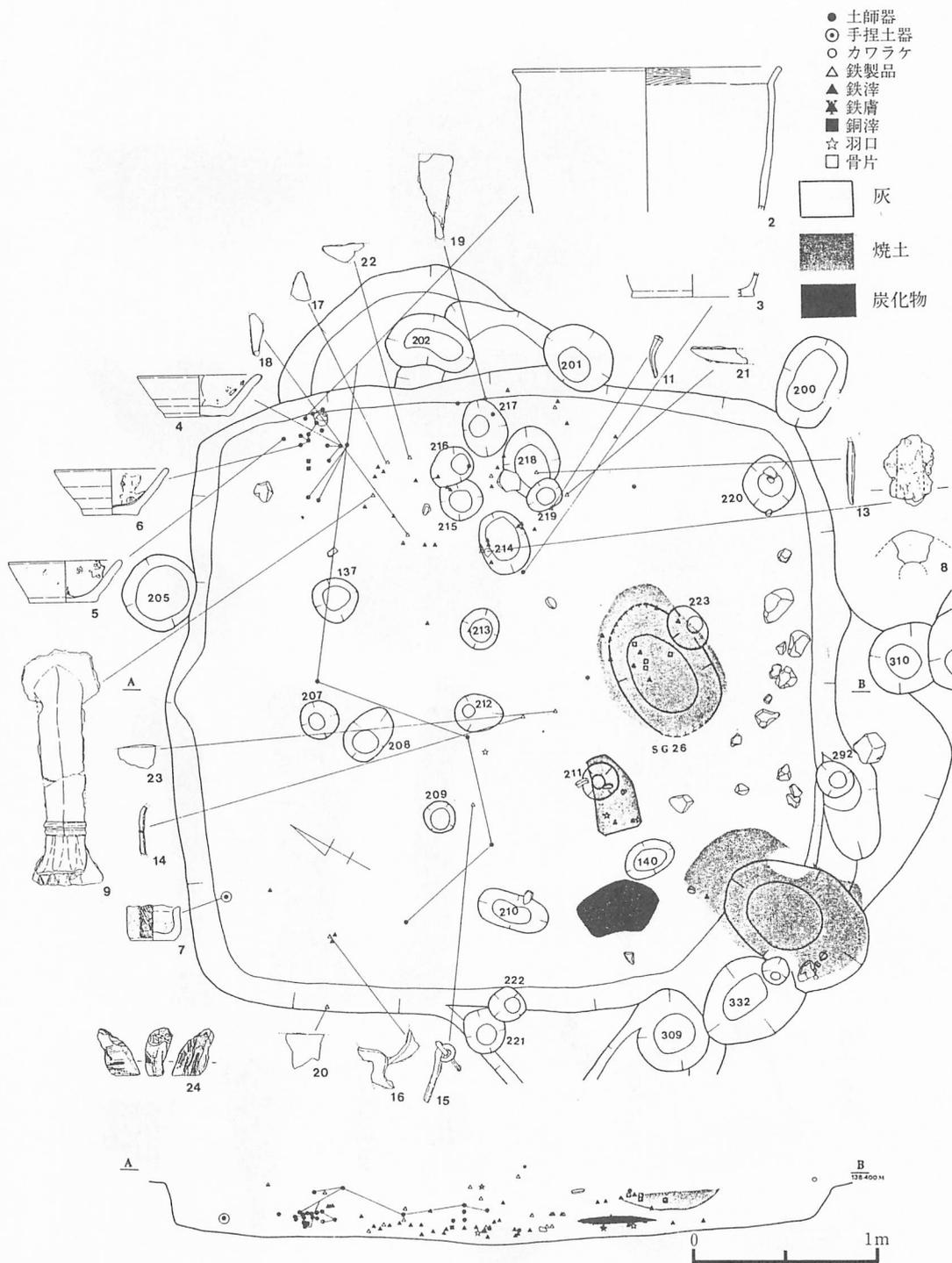
に位置し、二七五cm×二五〇cmの方形プランをもつもので、残存壁高は一八九二七cm。柱穴はいくつか検出しているものの、SB1に伴うものかどうか確定できなかった。土師器甕の胴下部破片、鉄滓、鞆羽口、磨石状の砥石が出土している(図版3-1)。土師器の年代からこの遺構は平安時代後期と考えられる。

SB2(第1図、図版2)はB-六区に位置する。三六五cm×三四五cmの方形プランをもち残存壁高は一八二二三cm。柱穴は多く検出しているが、竪穴との関係は明らかでない。南隅に焼土が検出され、出土遺物、構造からみて小鍛冶遺構と判断できる。小鍛冶遺構は長径八五cm、短径五八cmの楕円形で、第四層が火床にあたるものと考えられる。ここからの出土遺物は鉄滓一点のみであるが、付近の廃棄された焼土と思われる中から鉄滓二点、鞆羽口破片二点が出土している。同じ竪穴内に、この遺構のすぐ北側からもう一基小鍛冶遺構(SG26)が検出されているが、検出面から考えて、SB2に伴うものでなく、新しい時期のものと推定される。

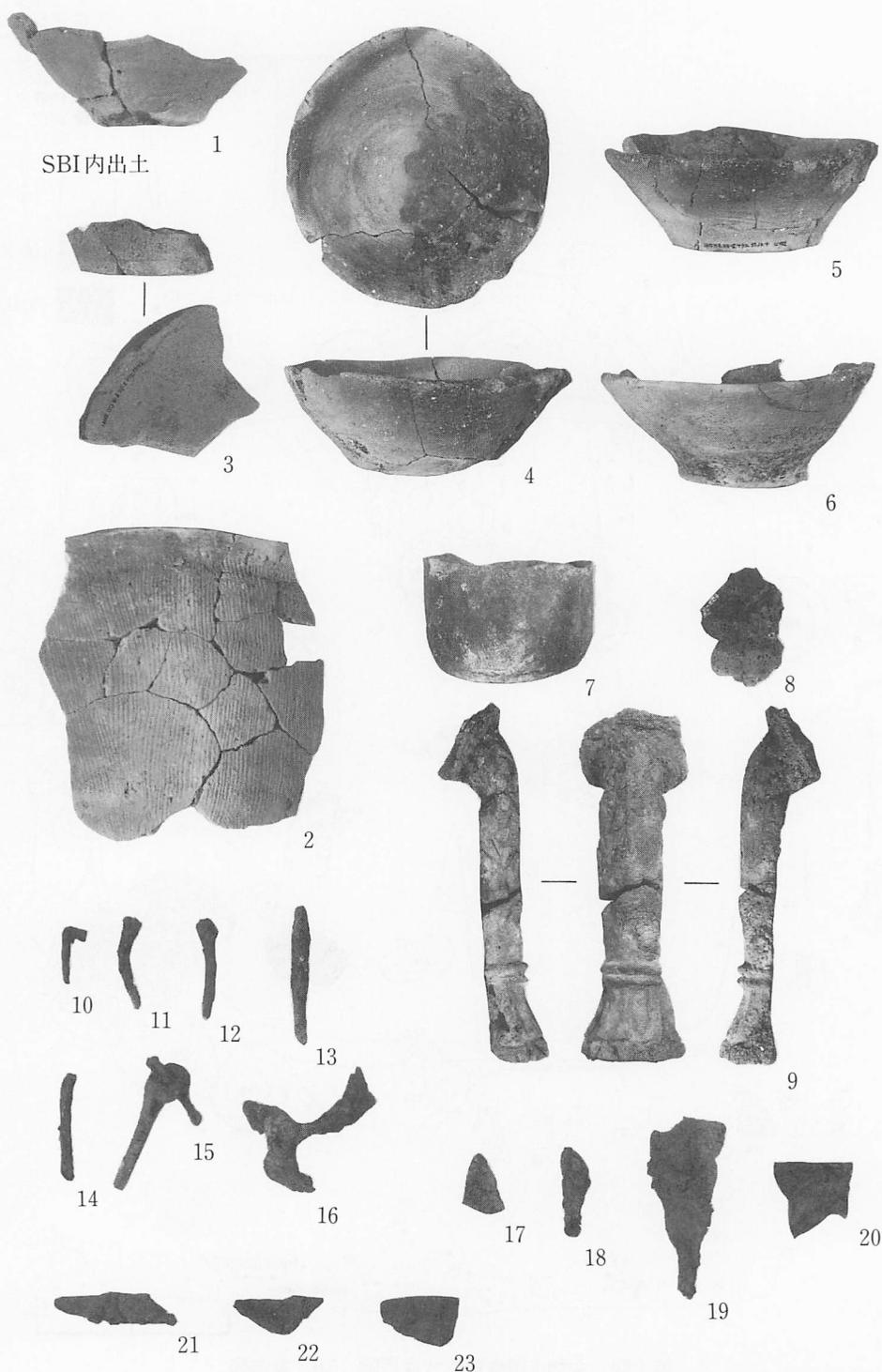
SB2からは、土師器甕二点、土師器坏三点、手捏土器一点、鉄製品一点、羽口五点、鉄滓総重量約一〇四〇g、鉄膚・銅滓・砥石二点が出土している(図版3-2、23)。土師器坏はいずれも高熱を受けて外面は黒く変色し、部分的に亀裂やひずみが生じたり、器胎の発泡化も目立つ。底部内面には金属滓が付着し、緑青がふいているものもある。近接した地点から銅滓が出土していることから、これらの坏が銅製品の鑄造に使われた、るつぽであると考えられる。鉄製品には獣足・釘・留金具・刀子などがある。獣足は鑄造品で、土師器坏の付



図版2 大畑上屋敷竪穴式住居跡 SB2



第1図 大畑上屋敷竪穴式住居跡 SB2 実測図



1 SB1内出土
2~23 SB2内出土

図版3 大畑上屋敷 SB1・2内出土遺物

近から二つに折れた状態で出土した。

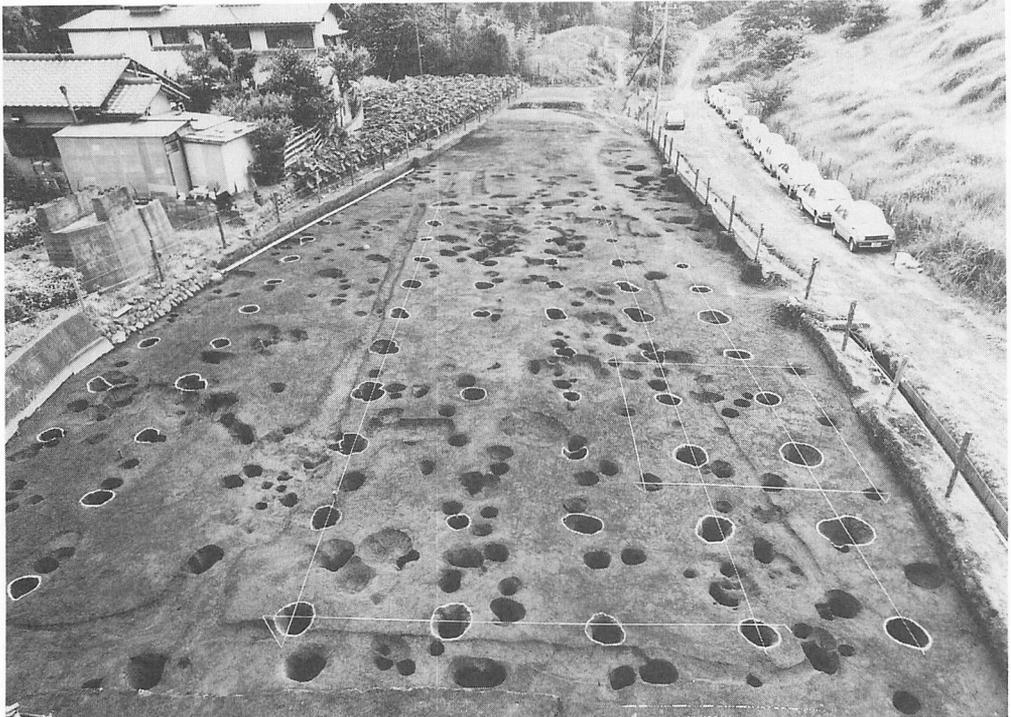
以上、検出遺構と出土遺物を考え合わせると、SB2が小鍛冶、銅
 鋳物生産の場、すなわち工房跡であると断定してもよいと思われる。
 その時期は出土した土師器から、平安時代後期、恐らく一世紀代と
 考える。SB1もSB2に関連した遺構とみてよいかもしれない。

掘立柱建物跡(SH) 本遺跡で検出した柱穴状ピットは一〇〇〇
 を超える。互いに関係づけられない柱穴が大半で、時代がわかるもの
 も少ないが、四棟の建物跡が確認できた。いずれもほぼ真北に中軸線
 をとり、束柱を備えた床張りの建物である。

SH1(第2図、図版4)は七区～一二区にかけて位置する建物で、
 南北一〇間、東西三間(二二・八二m×七m)の規模をもつ。西側には
 南北六間、東西一間の張り出し部がつくが、建物を囲む溝から考え
 て、この張り出し部は後の拡張部と考えた方がよいかもされない。重
 なり合った柱穴も多く、建て替えまたは補修したものと考えられる。

建物を構成する柱穴からは、かわらけ・山茶碗・常滑甕の破片が出土
 している。SH1を囲んで三本の溝状遺構(SD)が検出されている。

SD5はSH1の西側に位置し、幅二〇～六〇cm、深さ五cm、長さ一
 一・七m。SD8はSD5と一間半の間隔をおいて南北に伸びる溝で、
 幅四〇cm、深さ六cm、長さ六・九m。SD9はSH1の北側を東西に
 伸びる溝で、幅三〇～四〇cm、深さ五～八cm、長さ九m。SD6はS
 H1の東側を南北に伸びる溝で、幅四〇～六〇cm、深さ五～一五cm、
 長さ二・三m。溝の基盤は硬くしまり、鉄分を多く含む。出土遺物は山
 茶碗・常滑甕・常滑片口鉢・青磁・かわらけ・刀子・釘・有孔磨製石



図版4 大畑上屋敷掘立柱建物跡 SH1(北から)

鏃などがある。このうち有孔磨製石鏃は弥生時代の遺物であり、溝に伴うものではないことは明らかである。SH1の時期は、柱穴または周囲を囲む溝からの出土遺物の年代をもとに、一二世紀後半を中心とした頃と考える。また、この建物の出入口であるが、SH1の西側に伸びるSD5とSD8の間が一間半分空いていることからSH1の西面、北から五間目の位置が推定される。

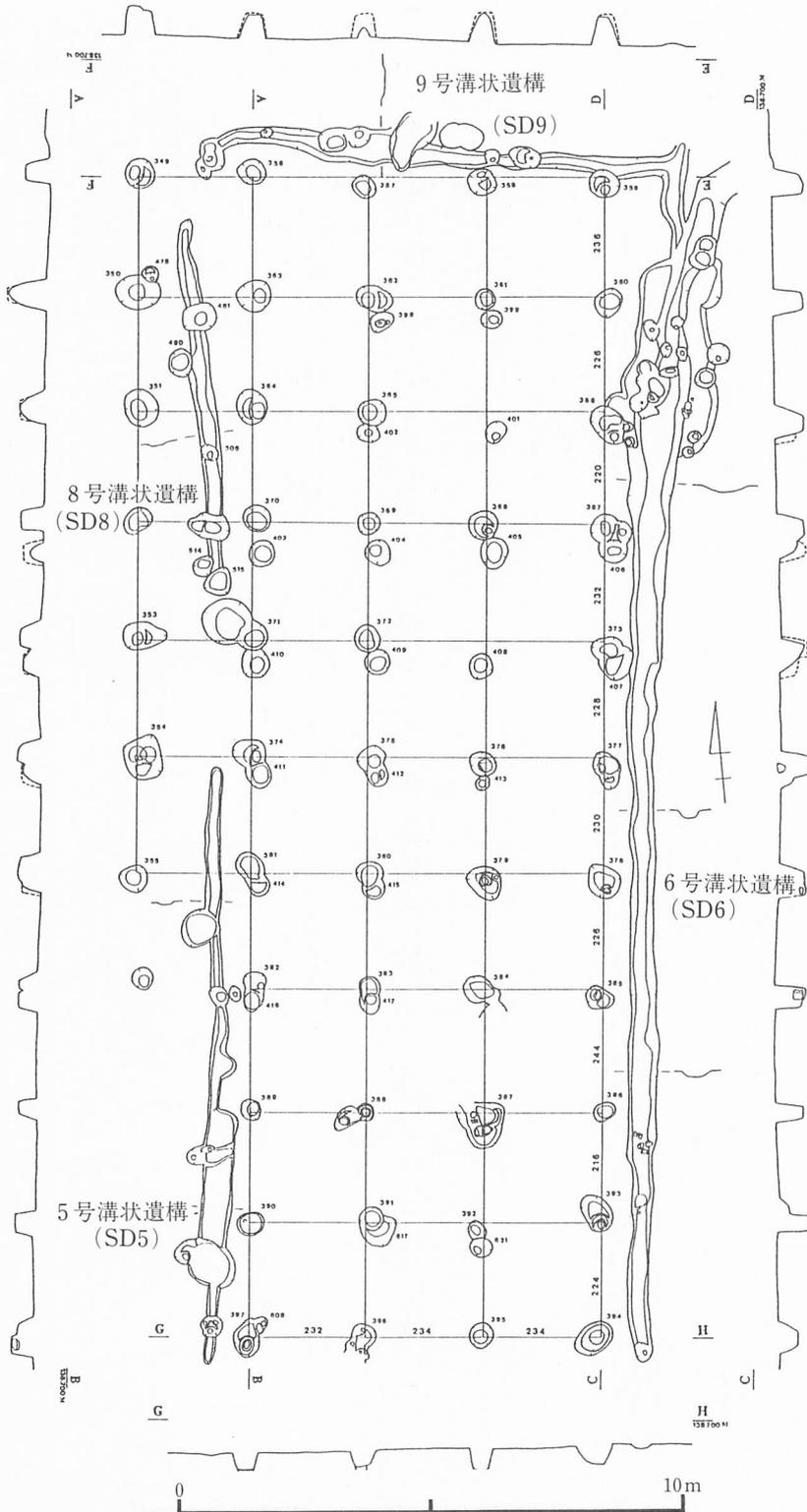
SH2(第3図)はSH1の東側に並列して建てられている。半分は調査区域外に当たり全容は明らかでないが、規模は推定できる。南北一〇間、東西三間(二二・〇八m×六・五六m)で、それぞれ東側南側へ伸びる可能性もあるが、SH1と同規模の建物であろう。東西方向に並ぶ柱列を結ぶ線の延長線上に、SH1の建て替えあるいは修復後の柱穴列が重なることから、SH2の建築はその時期に行われたものと考えたい。柱穴から常滑甕の破片が出土している。この破片はSH1を構成する柱穴から出土している甕と同一個体の破片である。SH3(第4図)は四区～六区にかけて位置する建物で、南北四間、東西六間(九・〇八m×一二・九四m)の規模をもつ。東辺の柱列は西隣との間隔が狭く、西辺の柱列も東隣との間隔がやや狭い。また柱穴も多少貧弱でもあることから、東・西^{ひさし}廂つきの建物とも考えられる。重なり合った柱穴も多く、修復または建て替えをしたと思われる。南北の柱列は、SH1の南北柱列の延長線上にはほぼ重なり、同時期の建物と考えられる。柱穴からの出土遺物は、かわらけ・山茶碗・青白磁台子などの破片・釘があり、このうち青白磁台子は、国内では一二世紀中半から後半にかけての経塚から出土するものに類似している。

SH4(第5図)は六区～八区にかけて位置する建物で、南北四間、東西四間(九・五二(八・九〇)m×九・八八(九・〇四)m)の規模をもち、建て替えを行っている。SH1・SH2・SH3のいずれとも重複して検出されたが、SH4が、SH1～3に先行するものか後のものかは残念ながら確認できなかった。柱穴からの出土遺物は、かわらけ小破片のほか、砥石・鉄滓がある。

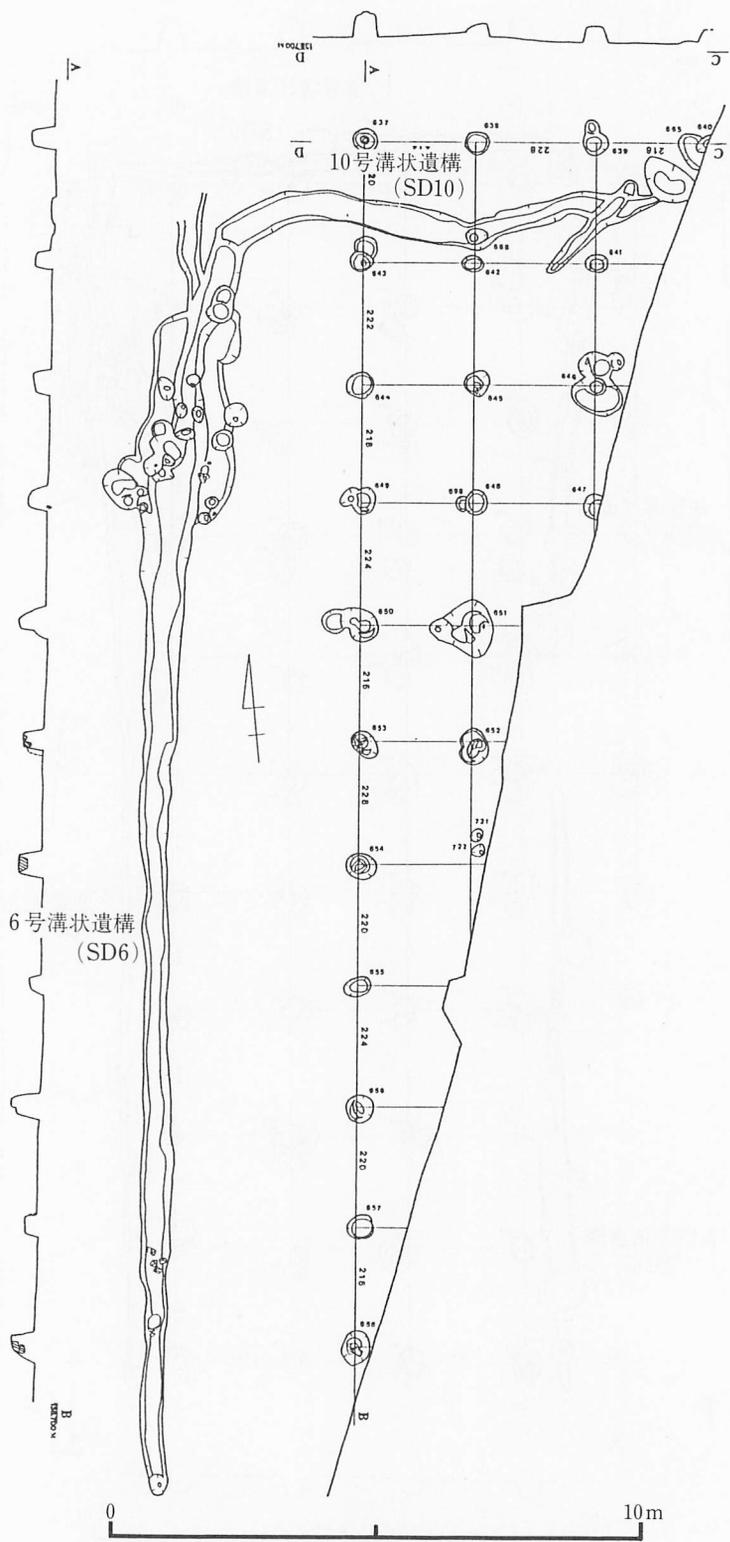
小鍛冶遺構(SG) 本遺跡のある時期を特徴づける遺構として二七基の小鍛冶遺構を検出した(図版5)。小鍛冶火床(小鍛冶炉)の構造をもとに分類するとA₁・A₂・B₁・B₂の四つのタイプに分かれる。Aタイプは火床の下に下部構造をもたないもの、Bタイプは下部構造をもつものである。

A₁―地山を掘りくぼめ、その上に粘質土をはって火床としたもの。粘質土は焼土化し極めて硬い。地山は熱変化を受けて赤変している。このタイプのものにはSG1・14・22・23・26がある。SG22の火床からは銅滓・鉄滓・鉄屑が多く出土したほか、かわらけ片もみつかった。すぐ北側に隣接して一〇〇cm×五五cm、深さ一〇cmの掘り方が検出され、覆土からは中量の鉄滓とともに多量の鉄屑が出土している。銅滓の出土から銅鋳物もこの火床で行われた可能性が高い。SG23からは鉄滓・かわらけ片が出土している。SG26はSB2の覆土を掘り込んでつくられている。火床には焼土が厚く堆積しているがやや粗く、焼き締まり方も弱い。焼土中から、鉄滓のほか小動物の骨とみられるものが出土している。

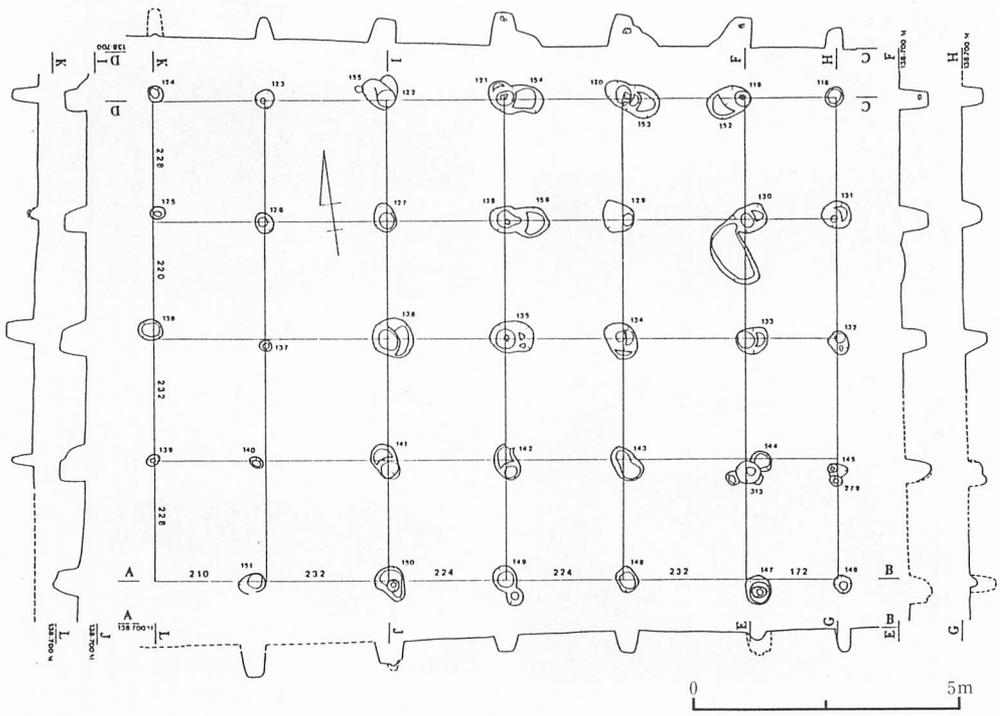
A₂―地山を掘りくぼめ使用したもので、粘質土ははられていない。



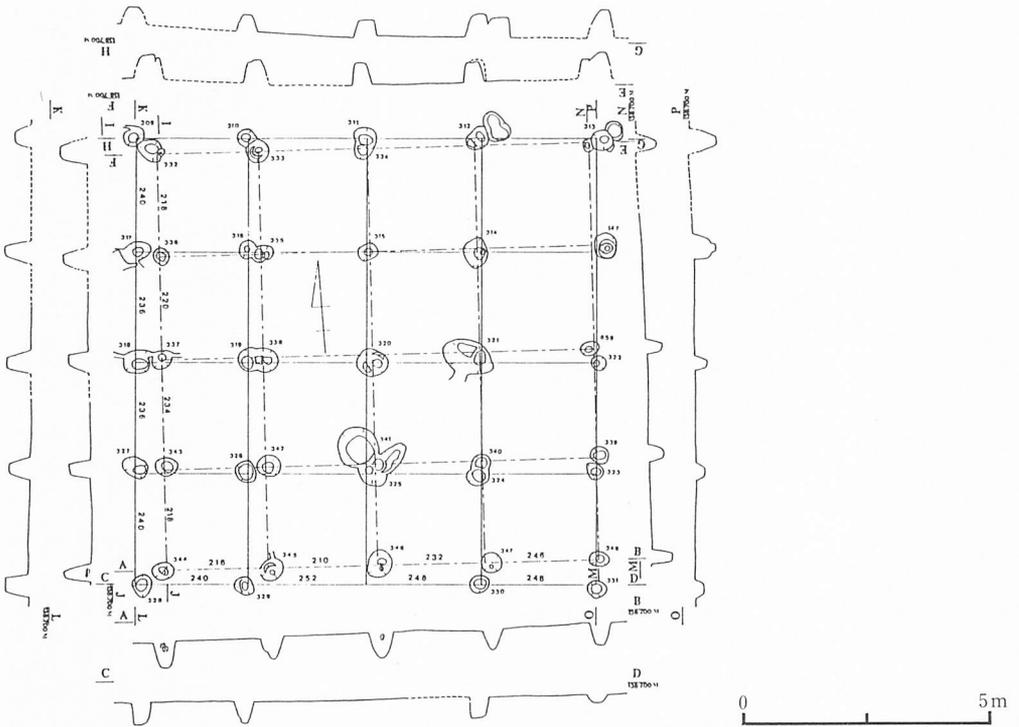
第2図 大畑上屋敷掘立柱建物跡 SH1 実測図



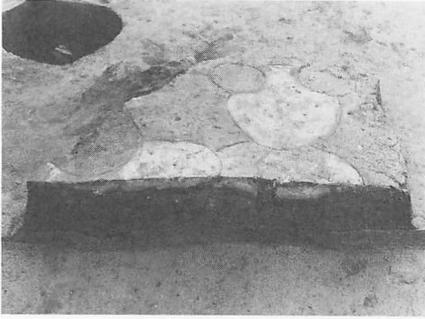
第3図 大畑上屋敷掘立柱建物跡 SH2 実測図



第4図 大畑上屋敷掘立柱建物跡 SH3 実測図



第5図 大畑上屋敷掘立柱建物跡 SH4 実測図

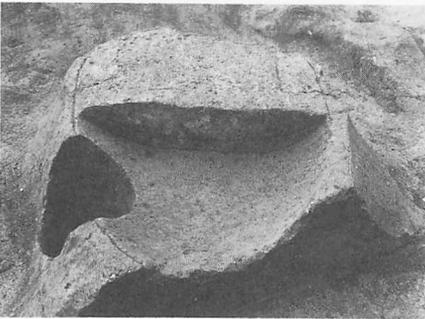


SG24 断面

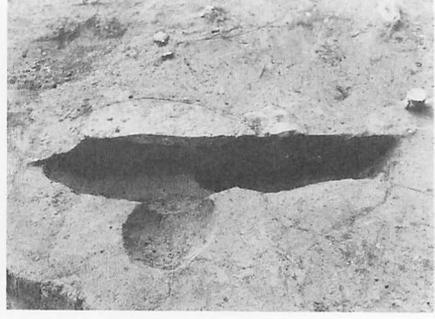


SG25 断面

SG2 断面



SG26 断面及び掘り方



SG16 断面

SG15
SG17 断面

図版 5 大畑上屋敷小鍛冶遺構 (SG)

地山は熱変化を受けて赤変している。SG 18 がこのタイプで、残存状態はよくなく半壊している。火床の底には灰や細かな炭化物が付着して硬く焼き締まり、粘土をはったのと同様な構造になっている。火床には炭化物が多量に堆積し、鉄滓・釘・鋸が出土している。周囲から出土した鉄滓も多い。SG 18 の直上に一〇〜三〇cm 大の石が二〇個近く投棄されたような状態で並ぶが、どういう性格のものか明らかでない。

B₁―地上をいったん大きめに掘りくぼめて下部構造をつくり、その上に粘質土をはり火床としたもので、下部構造の覆土には、炭化物あるいは焼土が含まれている。SG 2・8・(10)・11・13・15・17・21・25 がこのタイプで、全体の六割強にあたる。SG 13 の掘り方の底から焼土が検出され、この埋土および炭化物を含んだ層から、鉄滓・釘・鋸が出土している他、火床とその下層からも鉄滓が出土している。その他 SG 6・21 から鉄滓・鉄膚・からわけが、SG 16・17・25 からからわけが出土している。

B₂―B₁と同様下部構造をもつが、粘質土をはった痕跡がみあたらないもので、SG 12・24・27 がある。SG 24 から鉄滓・鞆羽口片が出土している。

その他、小鍛冶火床としたが疑問が残るものに、SG 9・19・20 がある。

小鍛冶火床の構造は、南伊豆町の日詰遺跡から検出されたものと同様に似たものが多く、时期的にも平安時代中期〜末期とされる日詰遺跡のそれに近いが、日詰遺跡の場合、火床の粘土が焼けて固化し、黒色ないし灰黒色の炉壁を形成しているのに比べ、本遺跡の火床はやや脆

弱で黒色の炉壁とはなっていない。また重複している火床もある。これは、本遺跡の小鍛冶操業が長期間継続して営まれたのではなく、必要に応じ数次にわたってその都度比較的簡単な小鍛冶炉をつくり、操業したのではないかと推測できる。

小鍛冶遺構の時期であるが、出土遺物で参考になりそうなものは、SG9の白磁底部とかわらけである。SG9を小鍛冶火床とするには疑問が残ることは先に述べたとおりであるが、小鍛冶に関連した遺構もしくは排土と考えるのは順当であろう。白磁底部は、玉縁碗の底部破片の可能性が強く、一二世紀～一三世紀にかけてのものである。かわらけについては細片であり、直接時期を決定する資料にはならないが、小鍛冶遺構が構築されている面から出土するかわらけの大半が、中国青磁などの伴出遺物により、一二世紀末～一三世紀初頭と考えられることから、これらの細片もこの時期であると推定される。また、小鍛冶遺構群と範囲が重なるSH1の存続期間と考え合わせても、これらの小鍛冶遺構が平安時代末～鎌倉時代初頭の遺構とするのが妥当であろう。

その他、小鍛冶に関連したものとして、炭化物の散布が目立った。五区～一〇区にかけてかなり濃く広がっていたが、特にC―七・八区では数力所から多量に炭化物が検出された。またC―七区からは羽口片・鉄屑・椀形滓を含む多量の鉄滓が集中して出土している。それぞれ、炭の集積場、廃棄場であったことが推定される。

中世墓(SX) 大畑遺跡上屋敷地区の西北隅にあたるB―四区に位置する方形の集石墓である。二七五cm×二三五cmの規模をもち、周

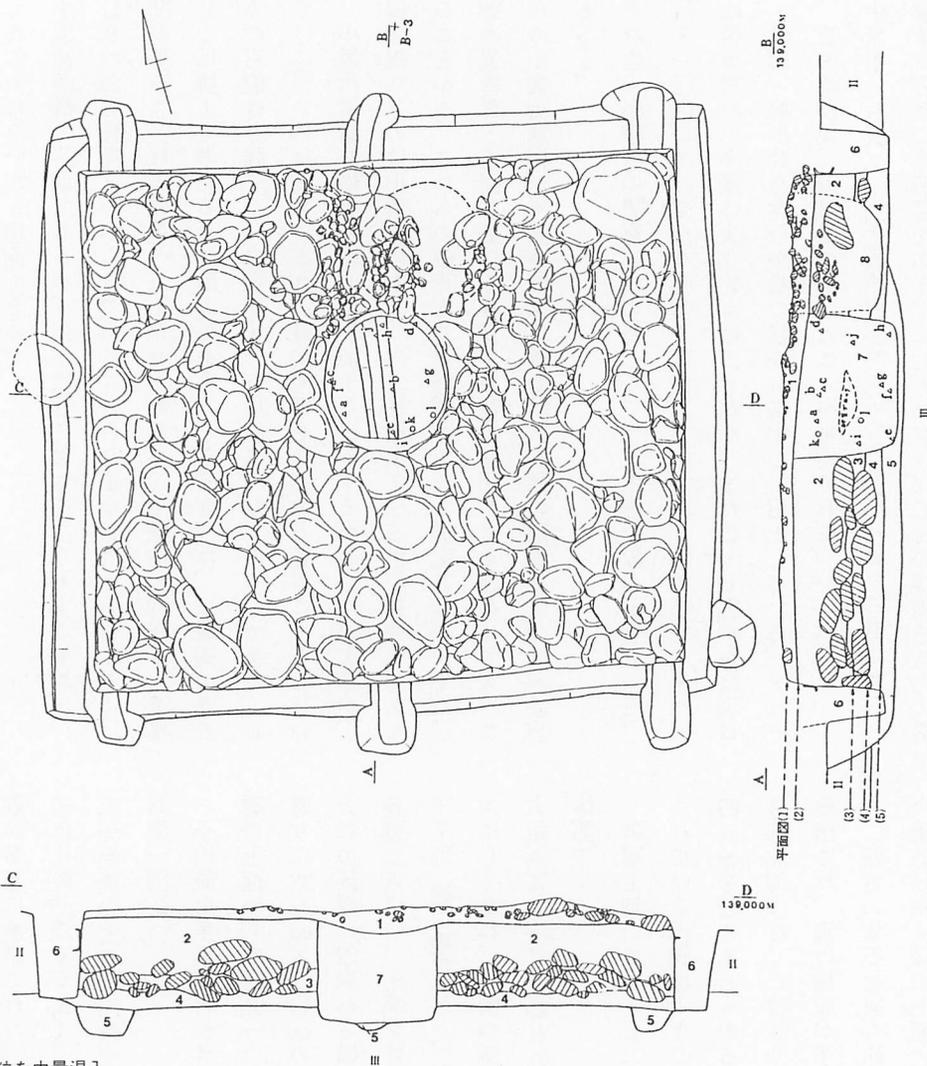
囲には木枠を埋設するため幅二〇～二三cmの溝をまわす。

SX1(第6図)の構造を検出の順序に従って説明すると、まずIe層を取り除きII層の掘り下げにかかったところ、三～五cm大の河川礫が多量に検出された。南辺と西辺はかなり乱れていたが、東辺と北辺は比較的残りが良く、この集石が方形のプランをもち、外縁を径一五cm前後の大きな円礫で区画していたことがわかった。(図版6 集石第一面)

小円礫を多量に含む砂混じりの灰褐色土を剥ぐと砂層が現れた。砂層の上面から布目瓦一点とかわらけ一点が出土している。中央やや北寄りに六五cm×六〇cmの円形土壇(第一主体部)を検出するとともに、方形の区画の四周から幅二〇～二三cmの溝を検出した。この溝からは各辺二点ずつ、先端を外側に向けた状態で鋳が出土した(図版7―1～7)。鋳に残存していた木質部から判断すると各辺二本の角材を横木にして重ね、二個の鋳で固定したものと考えられる。各辺の連結は木組みによって行われたものであろう。(図版6 砂層および第一主体部)

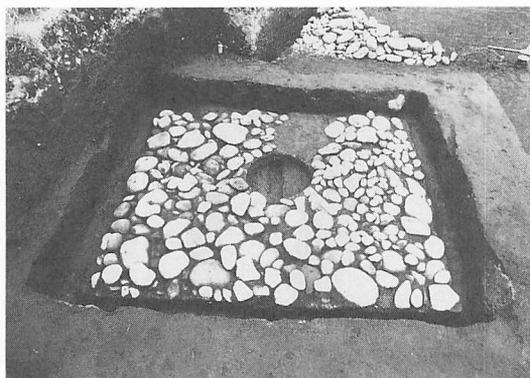
砂層を剥いでいくと二段目の集石にぶつかる。一段目に比べ、使用されている円礫は大きく、径一五～二五cm大のものが多く、なかには四五cmを超える石もある。平たい形状のものを選んで用いている。主体部北側に接した位置で砂層であるべきレベルから小礫がかたまっている。別施設が予想された。(図版6 集石第二面)

二段目の集石を取り除くと、接して三段目の集石が現れる。三段目の集石は粘土層の上面に敷かれ、淡黄褐色土で覆われている。二段目



1. 灰褐色土 砂粒を中量混入
3~5cmの小石を多量に含む
2. 青灰色土(砂層)
3. 淡黄褐色土
4. 淡白黄褐色土(粘土層)
5. 暗青灰色土 砂粒を多量に含む
6. 暗褐色土
7. 灰黄褐色土
8. 灰黄褐色土

第6図 大畑上屋敷中世墓 SX1 実測図



集石第三面



集石第一面



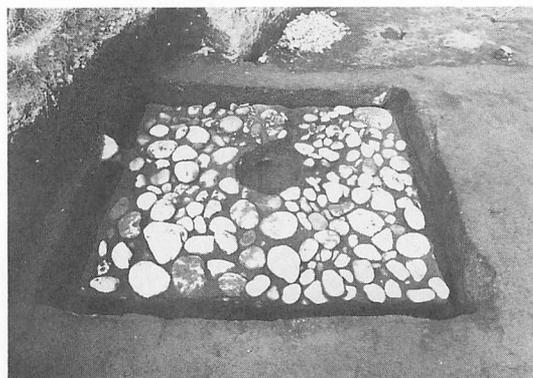
粘土面



砂層および第1主体部



完掘状態

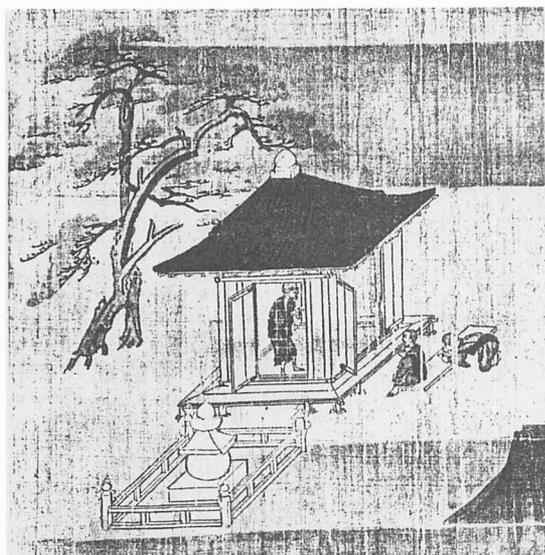


集石第二面

図版 6 大畑上屋敷中世墓 SX1 (南から)



図版7 大畑上屋敷 SX 1内出土遺物(a~1は第1主体部内)



第8図 『一遍聖絵』 正安元年(1299)



第7図 『餓鬼草紙』 平安時代末期

より若干小さめの円礫が使用されている。主体部北側の小礫をはずし、覆土らしき淡黄褐色土を掘り下げると粘土層まで達する土壇であることが判明した。この土壇(第二主体部)の上面は第一主体部と同じと考えられる。(図版6 集石第三面)

三段目の集石を取り除くと、厚さ一〇cm前後の粘土層(図版6 粘土面)が現れる。この粘土層を剝ぐと基盤層となる。この基盤層上に板材が付着したような痕跡が東西方向に六条検出された。六条の筋は一〇cm幅で、互いにほぼ四〇cm間隔で並ぶ。第一主体部の直下を南北に伸びる排水溝の他に、東辺と西辺および南辺の一部からも排水溝が検出された。覆土は砂粒を多量に含む。幅約二〇cm、深さ八cm。(図版6 完掘状態)

第1主体部 六五cm×六〇cmの円形土壇で、深さは中心で四五cm。

覆土は灰黄褐色で粘性はなく、粒子は粗い。しまりはやや硬い。土壇の中心付近には砂質ブロックが詰まる。粉末状の焼骨は土壇全体に散らばるが、特にこの下部から多く検出されている。遺物は釘一〇点、かわらけ片二点が出土。釘は出土位置から、a-b-c-d、i-j、e-f-g-hに関係づけて考えると、直径四八cm、高さ三〇cm程の円筒形の木製容器が埋納されていた可能性が出てくる。かわらけ二点は同一個体で接合する。出土位置から、木製容器と主体部の壁との間に納められたと思われる。(図版7 a~l)

第2主体部 六五cm×六〇cmの円形土壇で、第一主体部と同規模であるが深さは三三cmとやや浅い。覆土は淡黄褐色土で、上部には礫が混じる。出土遺物はない。検出状況から第一主体部より後に構築され

たと考えられる。

SX1の外表施設はどうであつたろうか。四周を囲む溝に埋設された木枠については前述したとおりであるが、この木枠の役割については木柵の基礎などが考えられる。木柵で囲まれた墓といえ、平安時代末期の作と推定される『餓鬼草紙』の墓の風景の中で、中央に五輪塔を据えた積石塚が描かれている(第7図)、『一遍聖絵』〔正安元年(三九)〕では、ほとんど勾欄というに近い木柵に囲まれ、中央にはやはり五輪塔が据えられた一遍上人の墓が描かれている(第8図)。積石をもたない点でSX1は後者の形態により近いが、最上層の集石上に墓塔があつたかどうかは不明である。

集石土塚(SSK) SSK1はSX1の東、二・五mの位置から検出された円形土塚で、長径八七cm、短径七五cm、深さは中心部で二三cm。七〜一五cm大の礫が多量に充填されている。数個の円礫も混じる。出土遺物はかわかけ片九点で実測できるものはないが、内二点は色調、焼成、胎土ともSX1砂層上面出土のかわかけとよく似る。但し、SK1出土のものとは手捏ねである。SSK1は集石土塚墓と考えられ、その時期はSX1と同一面から掘り下げられていること、よく似たかわかけを含むことからSX1とほぼ同時期と考えたい。

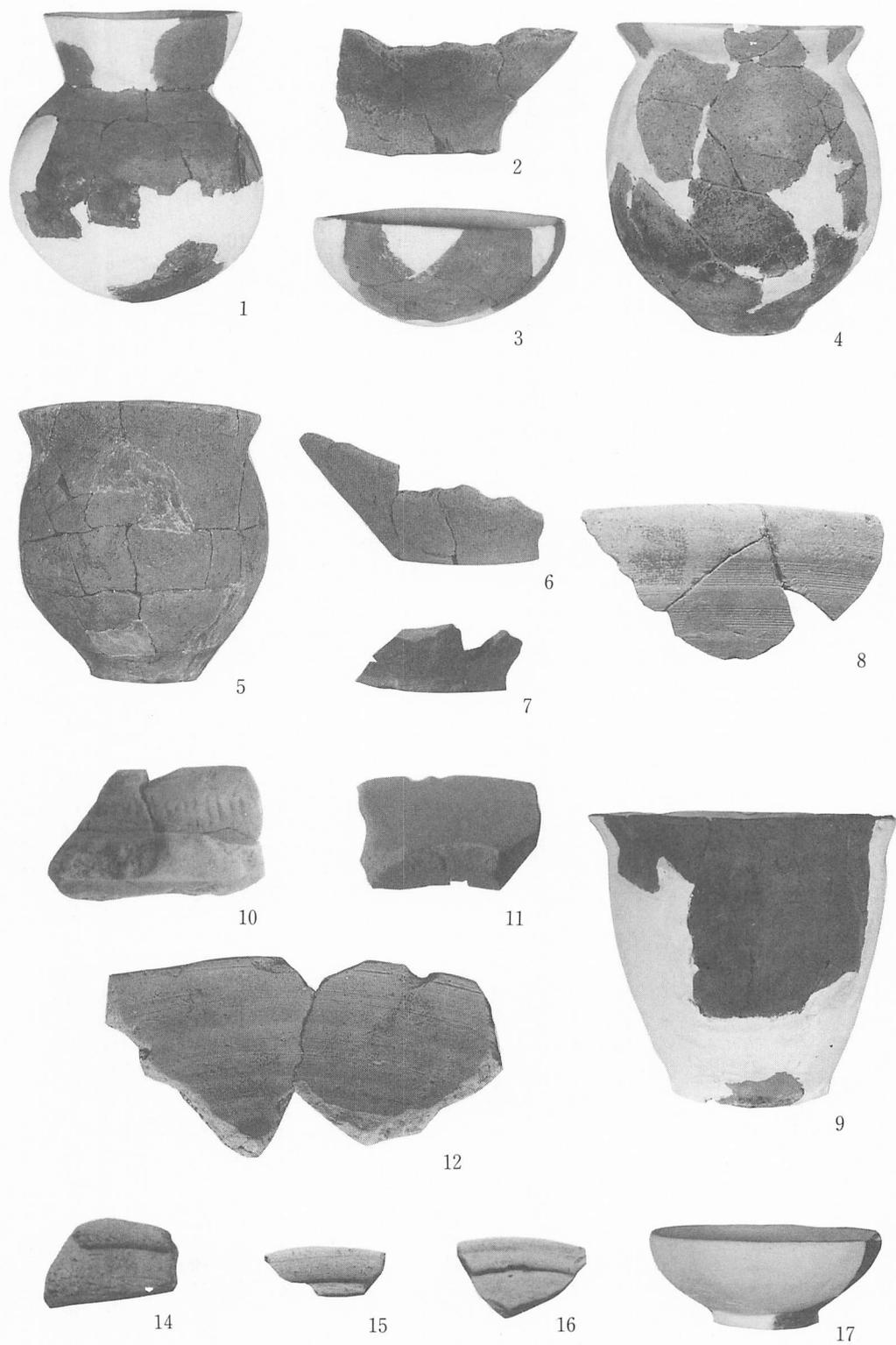
遺物 (イ) 土師器、土師質土器、瓦器(図版8)

1〜11が土師器。1は小型丸底壺で口辺部、胴上部はヘラ磨き、胴下部から底部にはヘラ削りが施される。口辺部内面には横ナデが行われる。底部から胴部にかけて煤が付着している。2は台付壺の胴下部破片で、外面には細かな刷毛目、内面には山型にやや粗い刷毛目が施

され、煤の付着がみられる。3は内外面とも全面赤彩の坏で、口縁部内外面は横ナデ、口縁下から底部にかけて刷毛目が施される。4はSK35内から出土した甕で、器面は磨滅がはなはだしく整形痕は観察できない。胴中央部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は「くの字」状に外反する。底部はやや上げ底で木葉痕を残す。胴中央部から下半部にかけて煤が付着。5は焼土を含む柱穴から出土した小形の甕で、器面全体に細かな刷毛目がみられ、口縁部および胴下部の内面には、やや粗い刷毛目が施される。底部には木葉痕が残る。6・7は甕の胴下部破片で内外面に刷毛目を施すが内面はやや粗い刷毛目である。底部には木葉痕が残る。以上1〜7は古墳時代中期の所産。8は坏の底部と口縁部の破片で接合しないが同一個体と思われるもので、外面は横位の磨き、内面は放射状の暗紋がみられる。八世紀後半と推定される。9は甕の底部と全周の三分の一程度の胴部破片。口唇部および口縁部内外面に刷毛目を施す。10・11は羽釜の破片で平安時代後期の土師器と考えられる。

12は土師器ともかわかけとも判断しかねるものである。焼成は堅緻で、内外面とも、ろくろ水引痕を明瞭に残す。底部は回転糸切り痕が残る。14〜16はいずれも口縁部の破片で、外反する端部を内側に折り返している。土師質で乳白色を呈し、胎土は砂粒を多く含み粗雑である。17は瓦器小碗でただ一点出土している。破片であるが何とか復原できる。器壁が厚くやや深めの碗で、高台は高めで丁寧につくられ畳付をもつ。県下での出土例はまれである。

(ロ) 国産陶磁器(第9・10・11図)



図版8 大畑上屋敷出土土師器・土師質土器

1~7は須恵器で、そのうち1~6はいずれも甕、壺類の小破片と思われる。7は壺の頸部から口縁部の破片で、形態だけでみると、北武蔵地方で焼かれる九一〇世紀代の壺に似る。

8~38は山茶碗。うち、8~18は碗で、8は暗灰青色を呈し、見込外周に重ね焼き痕が残る。つけ高台で、高台断面は三角形。見込は研磨されており硯に転用されたものと思われる。9は灰青色を呈し、見込に重ね焼き痕が残る。10は灰白色を呈し、つけ高台で断面は台形、見込は研磨されており、8と同様硯に転用されたと考えられる。8・9は旗指古窯第20・21号窯跡出土品に類似しており一二世紀初頭頃の製品と考えられる。11~15はその口縁部になる可能性が高い。10・16は胎土、色調などから湖西から西で生産されたものと思われ、8・9と同時期のものであろう。

19~22は高台を有する小皿で、19・20は灰黒色で燻したような色合いを呈し口縁部から内面全体に灰釉がかかる。いずれもつけ高台であるが19は本体を糸切りした後、円盤状の粘土を貼りつけ内側をへら状工具によって削りつけたことが観察される。小皿の最も古い段階のものに近いと思われる。

23~27は無高台皿で、23~25は器形を復原できるものである。23・24は淡灰青色を呈し口縁部外面の一部に灰釉がまばらに見られる。胎土は密で内外面とも研磨されたかのように滑らかである。25は灰白色を呈し胎土はやや粉っぽい。口縁部外面の一部は燻されたように黒ずむ。いずれも底部は糸切り。23~25は釜ヶ谷窯から類似品が出土しており時期は19・20よりやや新しく一二世紀中頃のものと考えられる。

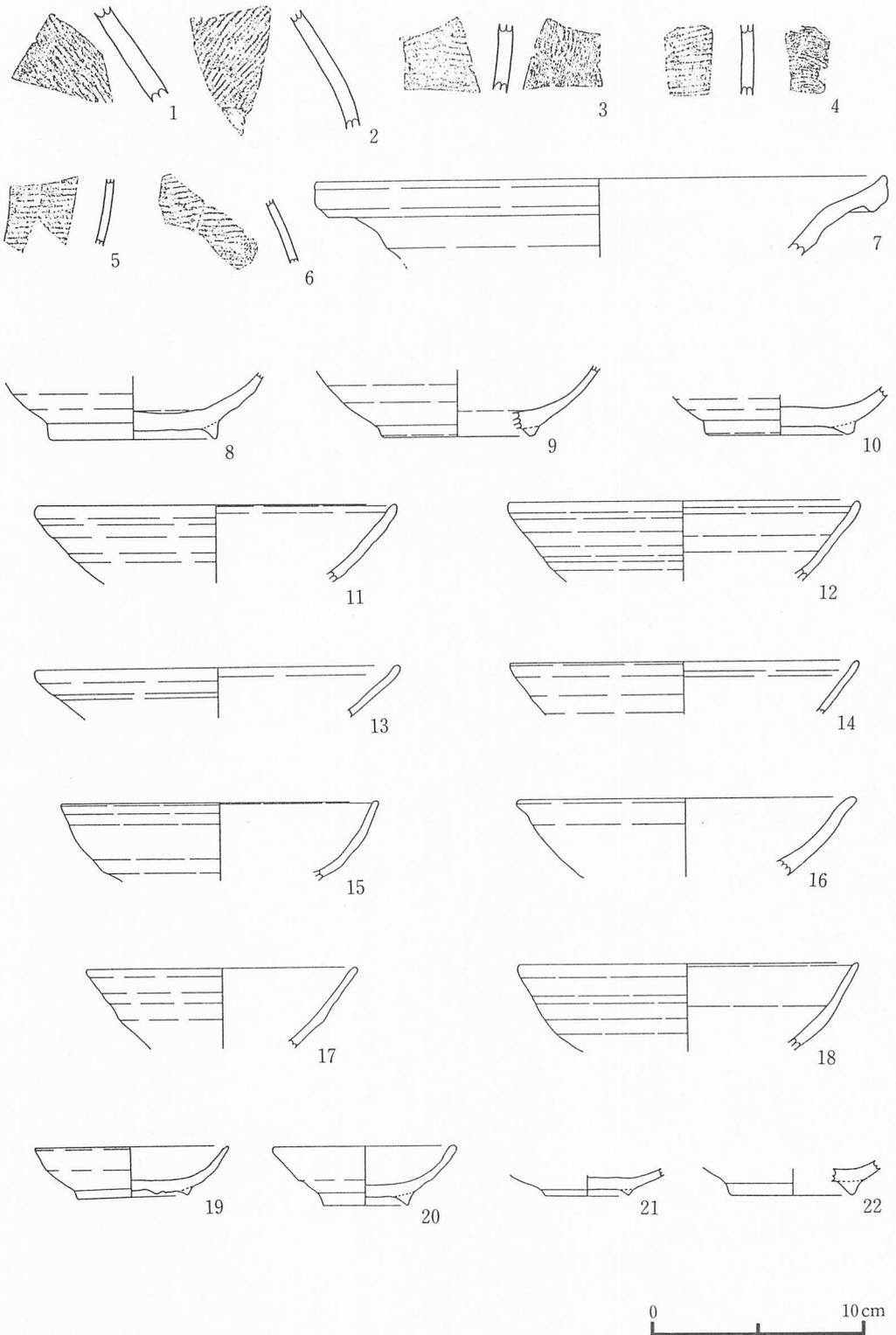
28~38は小皿の口縁部の破片である。

39~46は常滑窯系の陶器である。39は広口瓶の頸部破片で外面は暗黒褐色、内面は暗赤褐色を呈する。内外面とも降灰による灰釉がみられる。内面には粘土紐巻き上げ痕がよく残る。一二世紀前半の所産と考えられる。

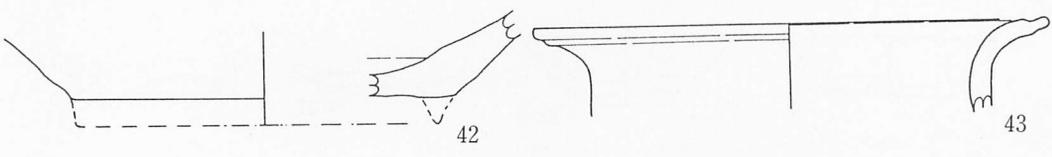
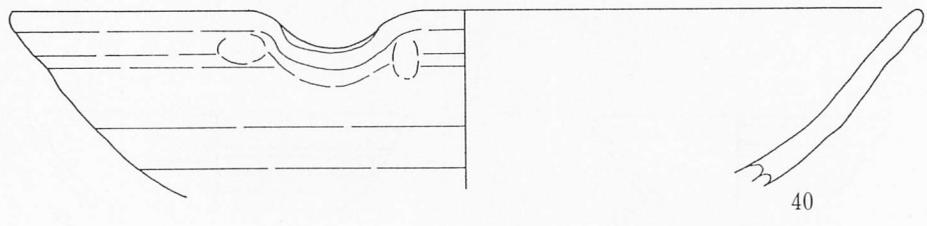
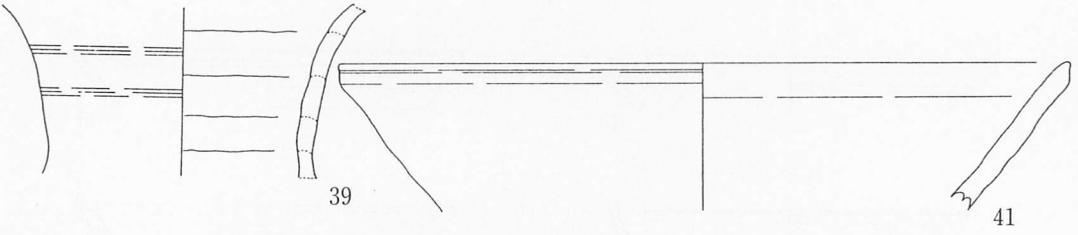
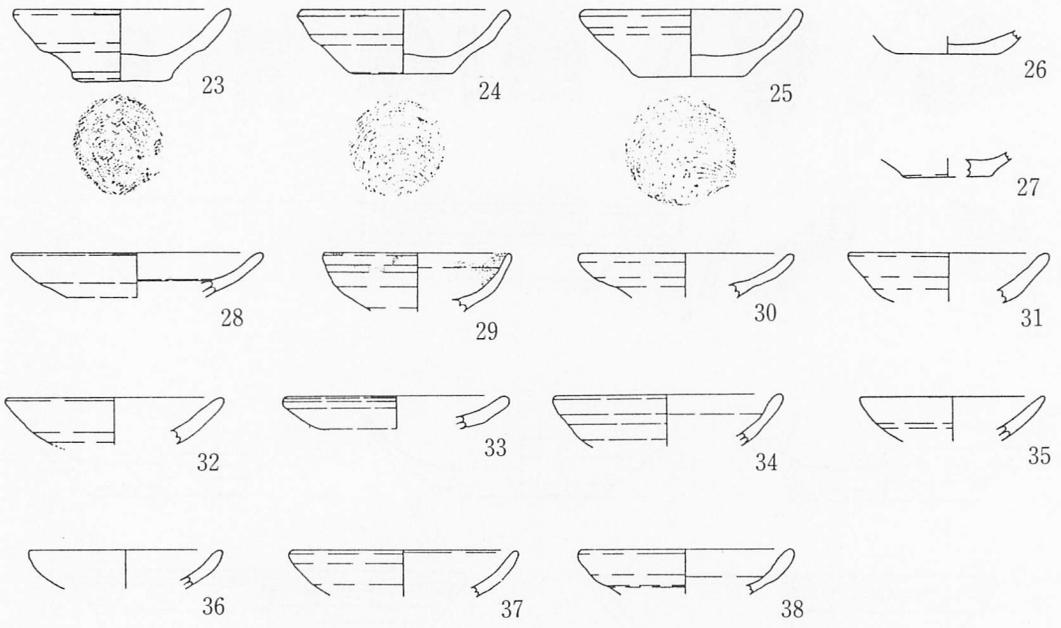
40~42は片口鉢で、40は暗灰色を呈し、外面には粘土紐巻き上げ痕が観察でき、ろくろ水引痕もよく残る。41は流し口部が欠けているが片口鉢の破片と推定できるものである。42は底部で、高台が剝落した痕跡が残る。内面は極めて滑らかでかすかに墨と思われる付着物もみられ、硯として転用された可能性がある。一二世紀第3四半期のものと考えられる。

43~46は甕。43は頸部から口縁部にかけての破片で、肩部から口縁部にかけての断面形がコの字状をなす器形だと思われる。45は口縁部とその同一個体と思われる胴部破片で、遺跡の広範囲から出土している。肩部から口縁部にかけての断面形が43と同様にコの字形をなす器形である。46は同一個体と考えられる甕の破片で、七〇数点が遺跡のかなり広範囲(四区~一四区)から出土している。口唇部を嘴状にのみ出し、押印文は肩部から胴下部にかけて五段に施されていると推定される。胴下部では焼成時の大きなへたりが生じている。43~45は一二世紀第3四半期、46は一二世紀末のものと考えられる。

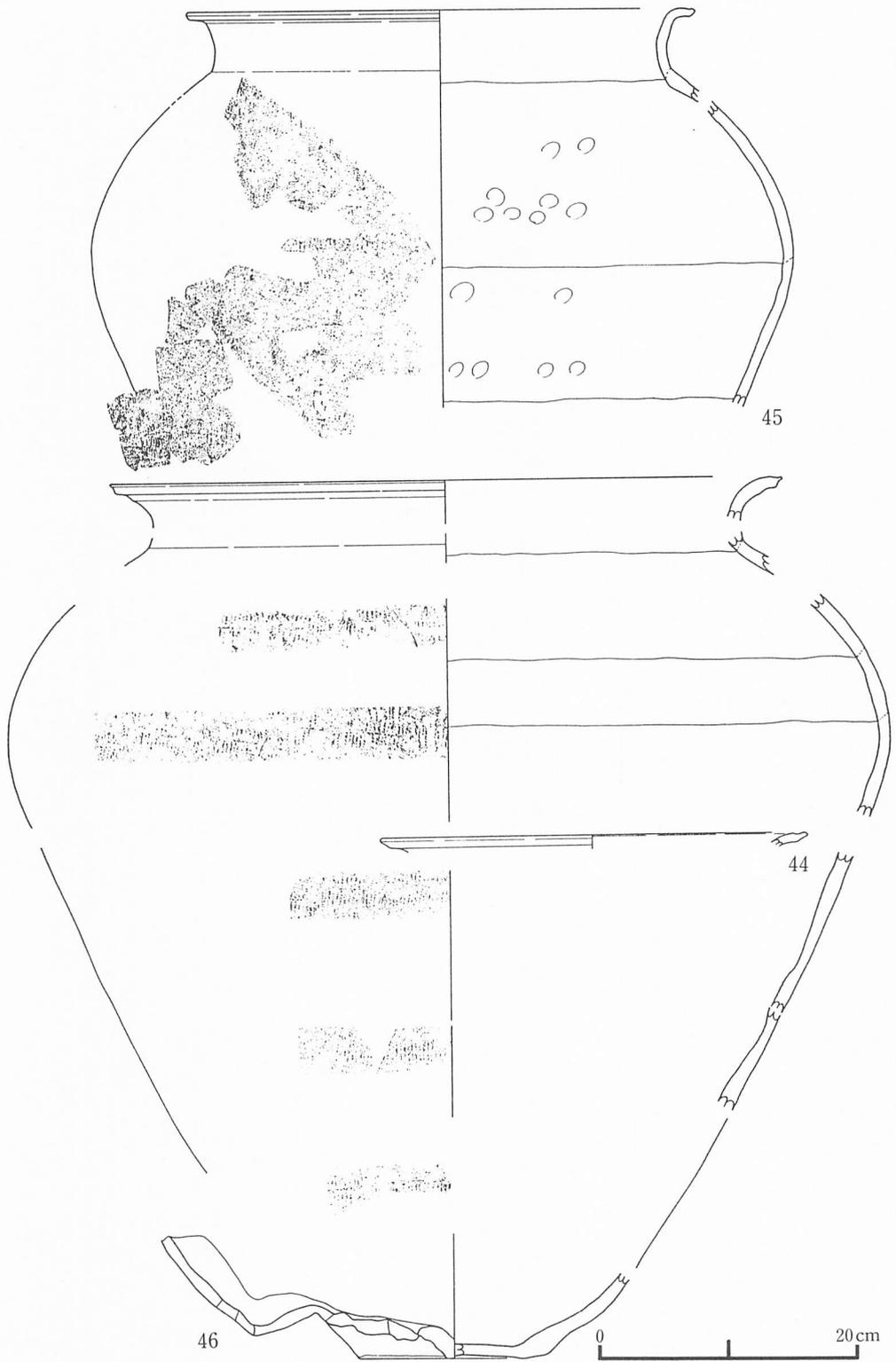
その他渥美窯の製品と思われる甕の破片が四点出土している。また近世陶磁器片が約二一〇〇点出土しているが、遺構外のものほとんどで、北の地区での出土量が多かった。陶器の九〇%、磁器の七四%



第9図 大畑上屋敷出土国産陶器実測図(1)



第10図 大畑上屋敷出土国産陶器実測図(2)



第 11 図 大畑上屋敷出土国産陶器実測図(3)

がIa・Ib層からの出土である。

(ハ) 舶載陶磁器(図版9~12)

青磁が五二点出土している。1~20は青磁劃花文碗・皿である。1と2は口縁部破片で同一個体と思われる。外面は片切彫りの花卉の中を櫛描文で充填し、内側は劃花文で飾る。3・4は素地、釉色、内外面の文様構成とも1・2と同様であるが口縁端部が肥厚しないですんなりまとまっている。5~7は3点とも胴部破片で、1~4のいずれかと同一個体になる可能性がある。8は胴下部の破片で前述のものと同類似するが釉に光沢がない。9は六輪花雲文劃花文の胴部破片と思われる、内面には縦に二本の平行した緩いS字状の沈線が片切彫りによって刻まれる。10は碗の胴下部破片で器肉が厚く、外面腰部には二本の沈線が巡り、内面は櫛描きと片切彫りにより施文される。11は碗の胴下部破片で、10と同様釉面には貫入が目立つ。内面は粗雑な片切彫りにより施文される。12は碗の口縁部から胴部にかけての破片で、内面には彫りの浅い劃花文が施される。

13は平底皿の胴下部破片と思われる、見込は片切彫りと櫛描きにより施文される。14は平底皿の胴部下位の破片と思われる、内面は四本を単位とした片切彫りによる劃花文で飾られる。

15~20は、いずれも外面無文、内面は劃花文が施される碗あるいは皿の小破片である。

以上青磁劃花文碗、皿は竜泉窯系のものが多く、一二世紀中半から後半に位置するものと考えられる。

21~33は青磁櫛描文碗である。21~23は同一個体と思われる。ガラ

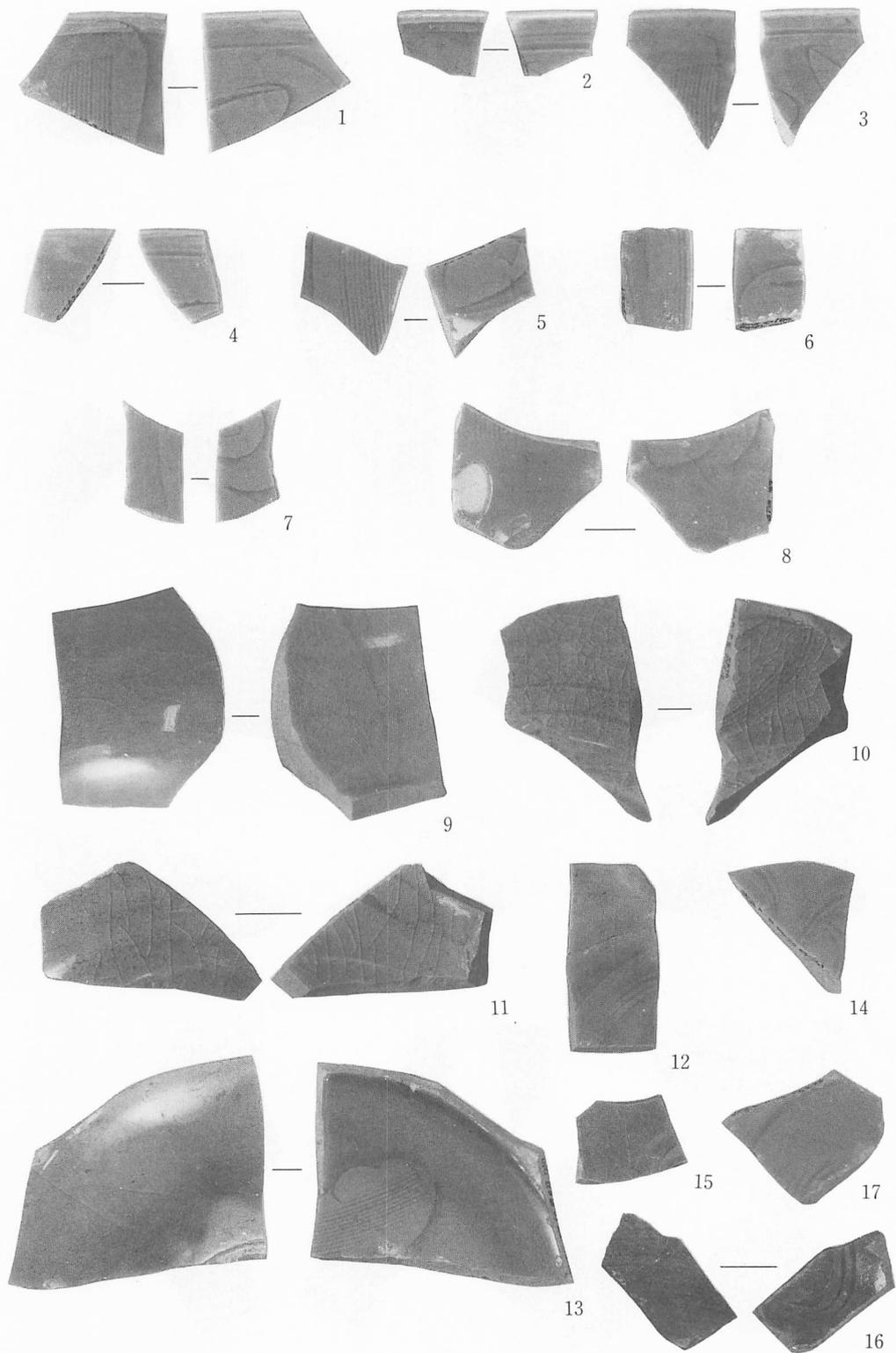
ス質の淡黄緑色の釉がかけられ貫入が目立つ。外面には縦位に櫛描きが施され、内面は片切彫りと櫛目による点綴文で飾られる。27は淡灰緑色の釉をかけた口縁部破片で、外面には縦位の櫛描文が施され、内面には一条の沈線が巡る。30は碗の底部で輪高台をもつ。わずかに残る胴下部には櫛目が縦位に施されている。31~33は残存部に櫛描文はみられないが、器形、釉調、やや粗雑な片切彫りなど櫛描文碗に共通する点が多い。

櫛描文碗とその類似品の大半は同安窯系の製品と思われる、一二世紀後半から一三世紀代にかけての所産と考えられる。

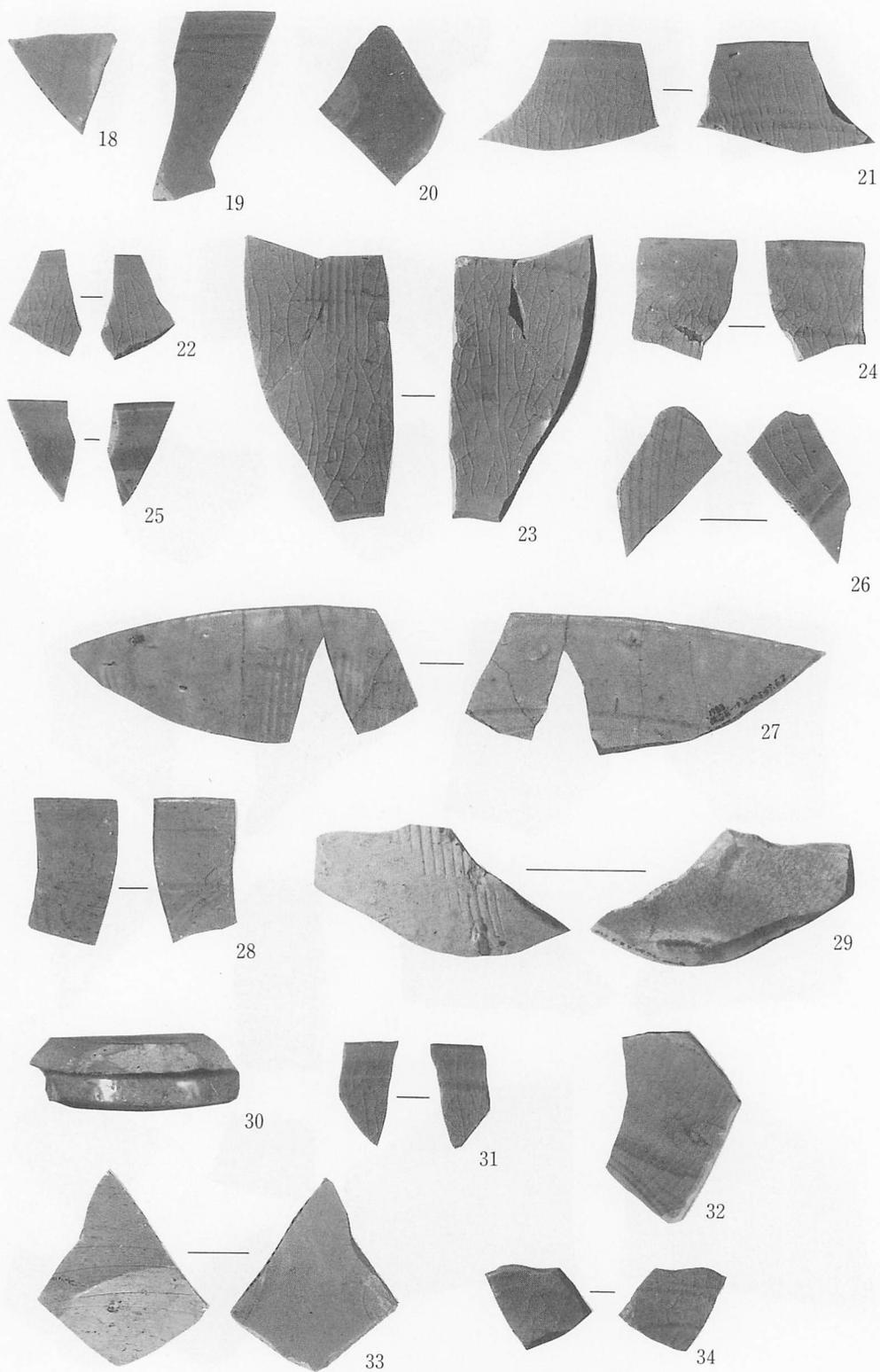
34は小破片で器形は不明であるが、十稜花で縁取られているとも考えられる。外に大きく開く口縁部の破片である。

35~40は青磁鎬蓮弁文碗である。35・36の素地は灰色、37~40の素地は灰白色。35は淡青緑色の透明度の高い釉がかけられる。蓮弁の形態は一枚ずつ異なり、鎬はやや鈍い。36は淡青白色の釉がけ、蓮弁は幅広で、鎬は蓮弁の中央を通らないで右にかたよる。37は淡青色の釉が厚目にかかり、蓮弁は比較的幅広で、鎬はやや鋭い。38は灰黄緑色の釉がかけられ、蓮弁はやや幅広で、鎬は鈍い。39は淡青色の釉が厚目にかかる碗の胴部破片で、外面には鎬が縦に施される。40は39と同一個体になるものと思われる、口縁端部がやや尖がり、外面には鎬がみられる。

41は碗の口縁部破片。素地、釉調とも12によく似る。42は灰白色の素地に淡緑青色の釉がかけられる。口縁部外面には釉が溜り状に厚くなる。43は外へ大きく開く口縁部の破片で、器形は不明。



図版9 大畑上屋敷出土船載陶磁器 青磁(1)



图版 10 大畑上屋敷出土土舶載陶磁器 青磁(2)

白磁は全てで二二点出土している。白磁の出土層位は、青磁が各層にちらばっているのに比べⅡ層に集中している。一二世紀代から一三世紀初頭のものと考えられる。

44・45は口縁に刻みをいれた白磁輪花小皿の破片と思われるものである。白色の素地に乳白色の透明度の高い釉がかかる。極めて薄づくりで、口縁端部は外反する。側壁内面に浅い沈線が一条巡る。45は44に比べても一層薄づくりで、内面には線文風の劃花文を施す。口縁端部は外反しない。

46～50は白磁口縁端反りの碗あるいは皿である。釉面には気泡の抜けた穴がみられる。

51～58は白磁碗の破片と思われるものである。51・52は同一個体と推定される碗の胴部破片で、見込及び胴部内面には櫛描文が施される。53は胴下部破片で、艶消し風の白濁色の釉面には細かな貫入が入り、内面には櫛描文が施される。56は口縁を折り返し断面三角形の玉縁をつくる碗の口縁部破片である。57は底部破片で輪高台をもつ。胴部外面下半及び底部外面は無釉。玉縁碗の底部になる可能性が強いものである。

60は白磁四耳壺の可能性がある破片である。灰白色の気泡の多い素地に灰緑を帯びた白色釉がかけられる。釉面は光沢があり貫入が入る。内面には釉下にろくろ水引痕が明瞭に残る。

青白磁は全てで二二点出土している。61～63は青白磁平型合子（印籠蓋式）の破片である。61・62は身部、63は蓋部でいずれも型造り。

61は器高、蓋受けとも低く全体に平たい器形である。側壁外面には菊

弁を配し、下位には稜を有する。62は前者に比べて小形であるが器高、蓋受けとも高い。外側面上端は蒲鉾状の低い突帯を有し、その下位に菊弁を配する。63は菊弁の造りが丁寧で、甲には細線で草花文と思われる文様が浮き出されている。一二世紀中半～後半の経塚遺跡から類似品が出土している。

64は青白磁瓜形水注の胴下部破片の可能性があるので、外面には縦に二本の筋目が引かれ瓜形をつくる。薄作りで内面にはろくろ水引痕がよく残る。

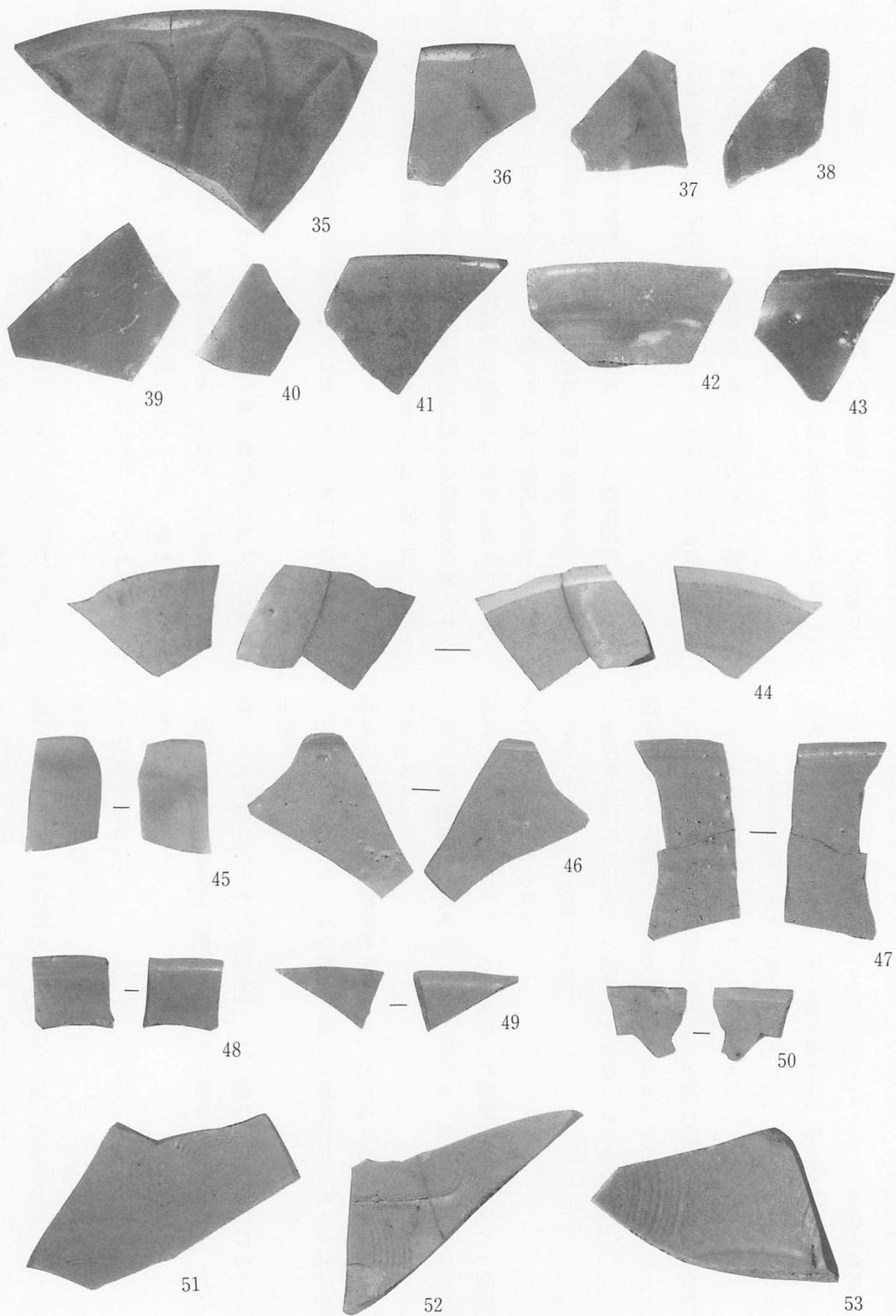
65は口縁に刻みを入れた輪花小皿の口縁部破片である。66は小皿の破片で、外面には刻線文の先端がわずかにみえる。65と同様極めて薄作りである。

67は碗の胴部から底部にかけての破片で、高台の断面形は三角形に近く、わずかに畳付をつくる。見込から胴部内面にかけて一面に櫛描きによる施文がみられる。

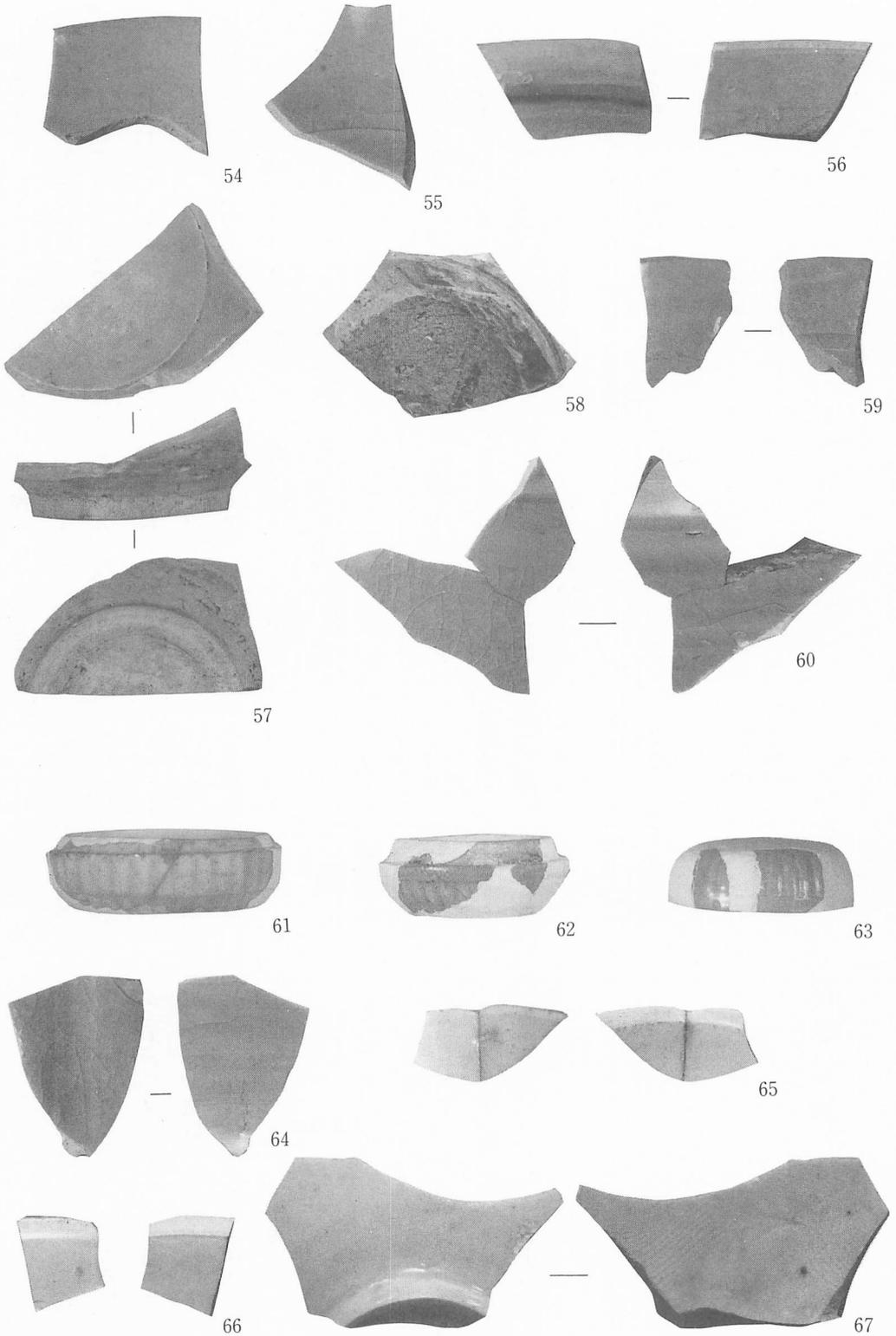
(三) かわらけ (図版13～15)

上屋敷地区から出土した遺物の中で量も数が多く七〇〇点を超す。細片が多く、実測が可能なのは一四九点である。本地区出土のかわらけには、ろくろ成形によるものと、手捏ね成形（あるいは型押し）によるものがあり、それぞれ小型と大型に分かれる。

ろくろ成形小型を大きな視点で捉えれば、1～36のようにやや深みのあるものと、41～56の一層小型で浅皿状、胎土も精選されているタイプに分かれる。前者はろくろ水引痕をよく残し、見込の調整は、渦巻状の成形痕をそのままに残すか、中央の高まりを指で押さえるか、



图版 11 大畑上屋敷出土船載陶磁器 青磁(3)・白磁(1)



図版 12 大畑上屋敷出土船載陶磁器 白磁(2)・青白磁

その周囲に回転ナデを施すもので、指腹による横ナデはみられない。後者は回転ナデを施すもの、中央の高まりを指頭で押えるものの他に、中央部を指腹で横ナデするものがある。この二つのタイプが二枚重ねで出土している。23の上に52が重なっていること、52をはじめこのタイプには煤の付着が目立つことから、小型で浅皿状の後者のタイプは前者との組み合わせで燈明皿として用いられることが多かったものと考えられる。この他16(上)と25(下)も二枚重ねで出土している。前者のタイプにも口縁部に煤が付着しているものがあることから、前者同志の組み合わせもあったことがわかる。16と25の二枚重ねは、かわらけ6・15・42と伴出している。

ろくろ成形大型(57~102)は、小型に比べ豊富なバリエーションを持つが、見込の調整だけで見れば、回転ナデを施すもの、ろくろ水引のまま渦巻状の成形痕を残すもの、中央を指頭で押さえるものがあり、指腹による横ナデはみられない。70と100がろくろ成形小型の浅皿タイプ45・53と伴出している。また87は、やはりろくろ成形小型浅皿タイプの47・50・51、手捏ね小型の107と伴出している。

手捏ね成形によるかわらけの胎土は一般にろくろ成形によるもの比べて粒子が細かく、赤色粒子を微量に含むものも多い。側壁外面上位に回転ナデを施し、ナデの強弱に応じて稜線が明瞭なもの、緩やかなものができる。側壁内面には回転ナデ、見込には横ナデが施される。見込には指頭痕が残るものがあるが、体部外面にはナデにより消されているためかほとんど残らない。小型(103~112)と大型(113~124)があるが整形や調整方法に違いはない。手捏ね成形品は前述以外に、S

K20内からろくろ成形小型14・15、浅皿タイプなどと共に破片が多く出土している。

かわらけの総点数が七〇〇点以上に及ぶことは冒頭でも述べたが、その総重量は二四二五〇gを測る。成形別で見ると、ろくろ成形品が一〇七四五g、手捏ね成形品が三七五〇gで、およそ三対一の割り合である。他に細片が九七五五gある。地区別にみると六区~一区での出土量が多く、特にC~七・八・九、D~八・九が目立つ。出土状況からこれらかわらけは小鍛冶操業にもなって使用されたと考えられる。

(ホ) 瓦 (図版16)

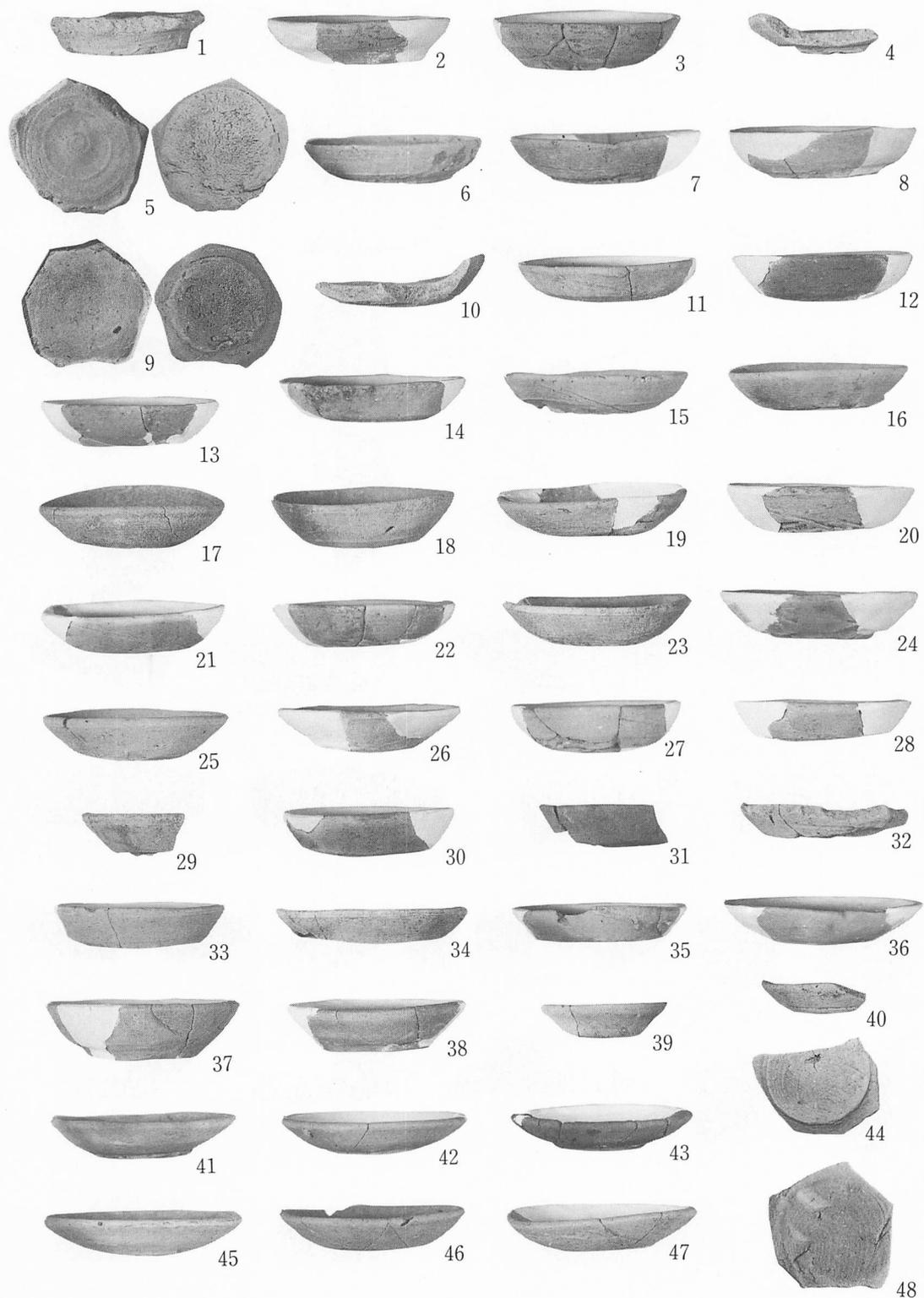
瓦の出土点数は少なく、丸瓦三点、平瓦六〇数点で、そのほとんどが小破片で大きさが推定できるものは皆無であった。出土地区も遺跡の北端近くでI層から出土のものも多く、遺構との関連はつかめなかった。平瓦は凸面に縄叩き目が側縁に平行、もしくは若干斜めに施され、凹面には布目が残るものと、ナデで消しているものがある。また離し砂の付着が顕著なものと、ほとんど観察できないものがある。

(ヘ) 金属製品 (図版17)

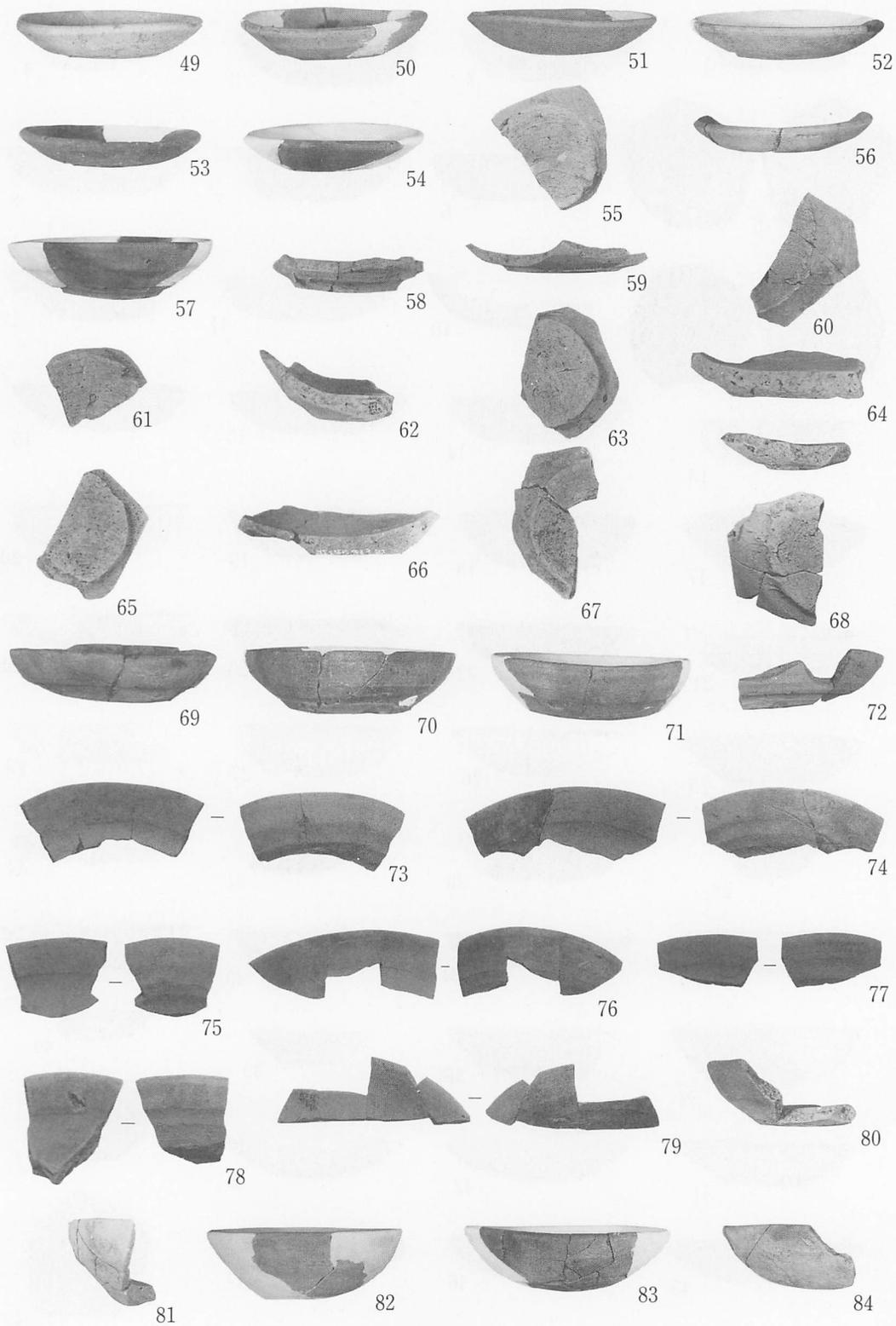
鉄製品のうち最も多く出土しているのが釘である。これらは鍛造の角釘で、長さは一寸前後のものから三寸を超すものまである。また釘には無頭式と折頭式のものがある。

その他、人形・鏃・楔形鉄製品・樹皮剥ぎ用刃物と推定されるもの、刀子・大刀の切先部分・鏃などが出土している。

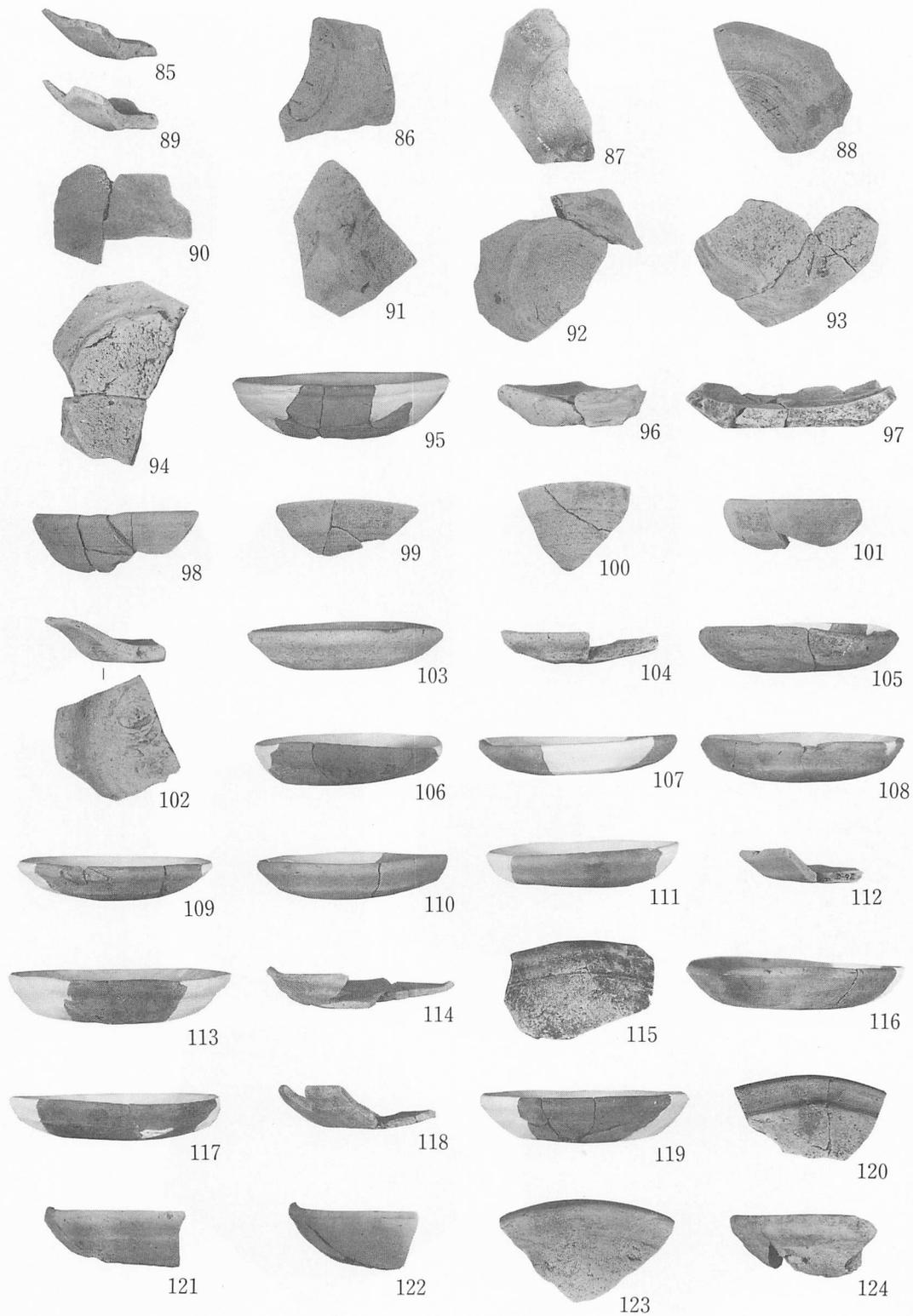
なかでも鉄製の人形は全国にもほとんど類例がなく貴重なものとな



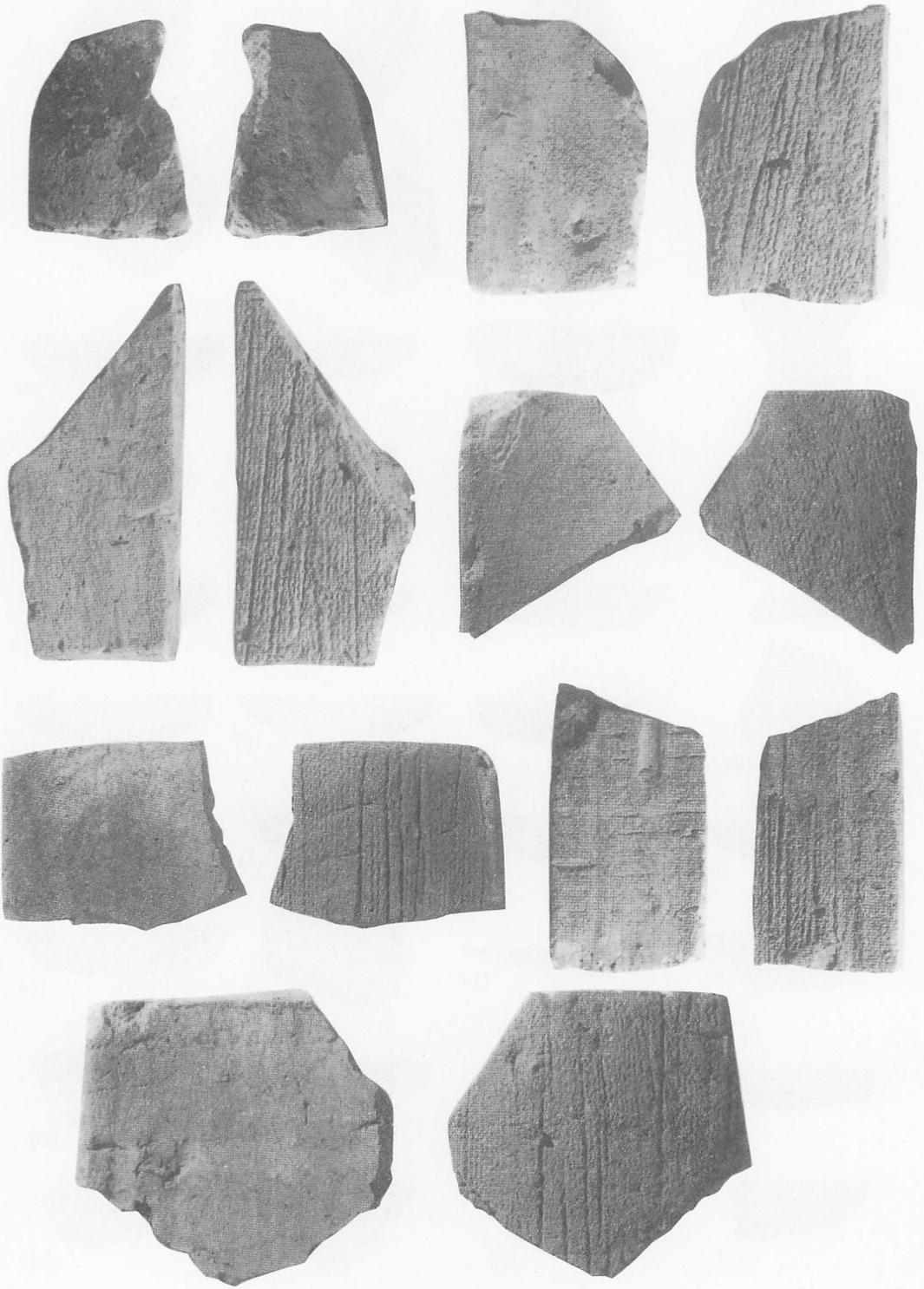
図版 13 大畑上屋敷出土かわらけ(1)



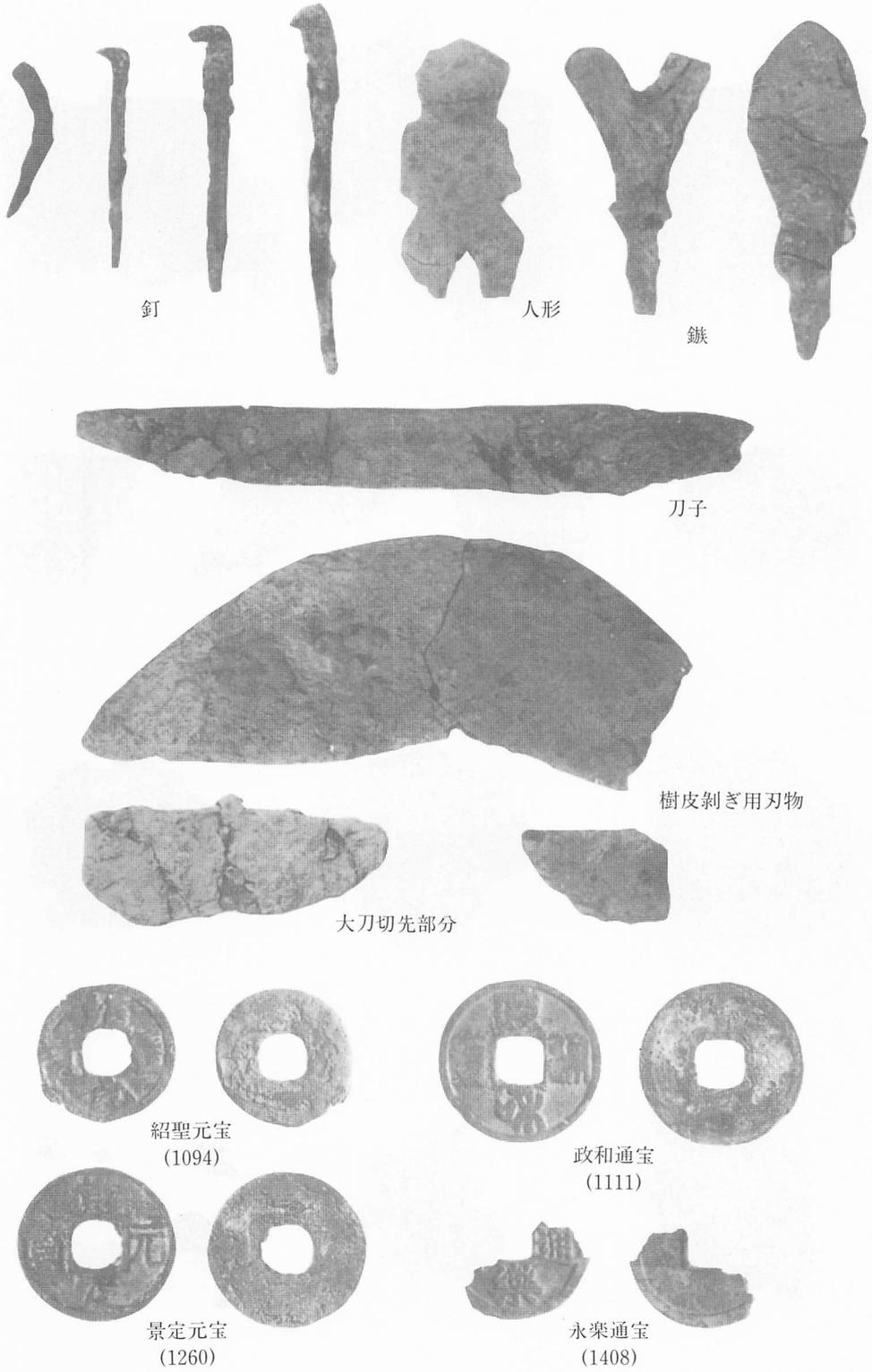
図版 14 大畑上屋敷出土かわらけ(2)



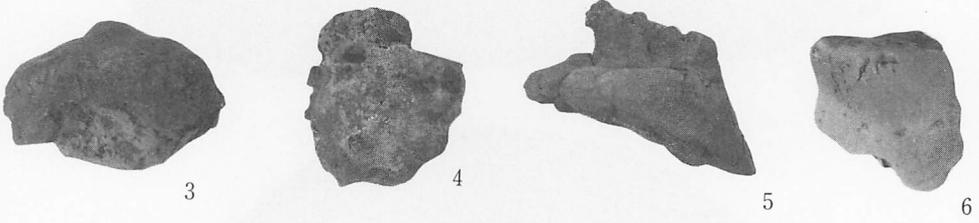
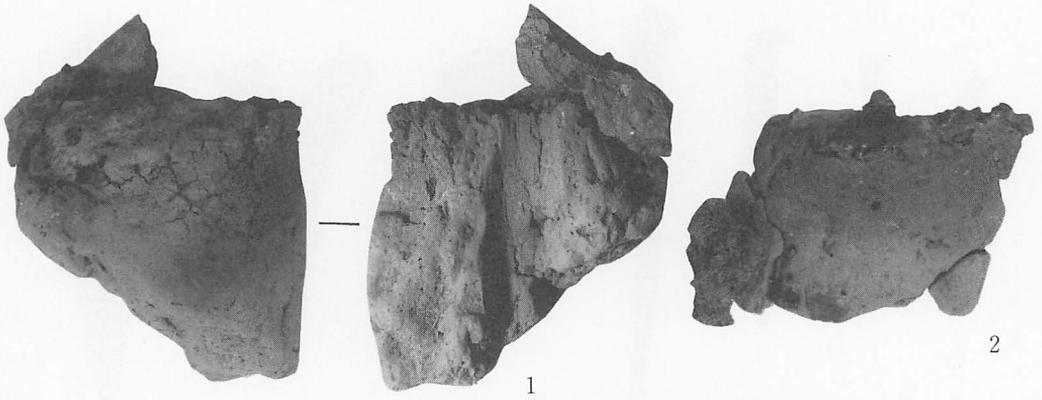
図版 15 大畑上屋敷出土かわらけ(3)



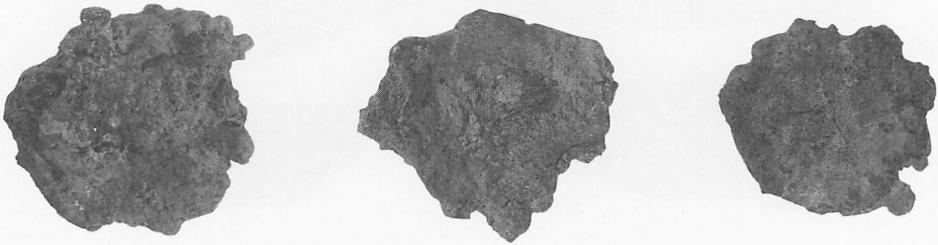
图版 16 大畑上屋敷出土瓦



図版 17 大畑上屋敷出土金属製品



羽口



碗形鉄滓



銅滓

図版 18 大畑上屋敷出土小鍛冶関連遺物

った。厚さ一・五mm前後の薄板を打ち抜いて造る。頭部は圭頭で面取りを施す。『延喜式』に御贖祈として用いられた呪物の一つとして鉄偶人が出てくるが、道教的世界の地方への広がりを考えるにあたって重要な資料である。

銅製品として、簪・碗形銅製品・キセル・銅銭が出土しているが、ほとんどのものがIb~Id層からの出土で近世のものである。銅銭は計一〇枚あり、北宋銭が二枚、南宋銭が一枚、明銭が一枚、寛永通宝が六枚である。

(ト) 小鍛冶関係遺物 (図版18)

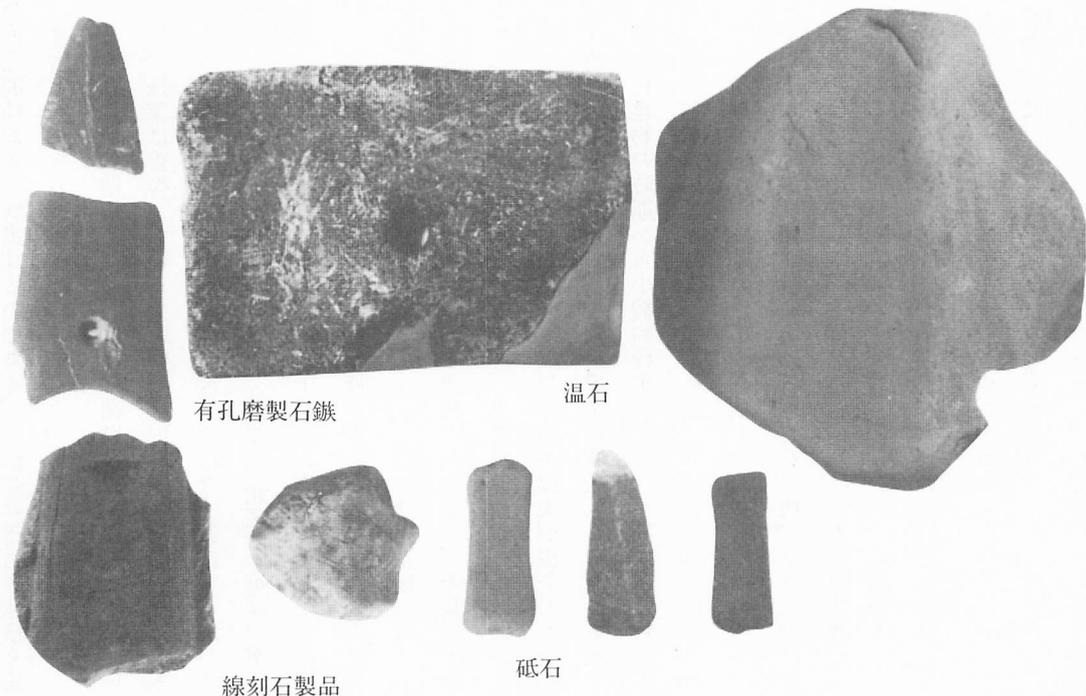
小鍛冶関係遺物として、石器の項で触れる砥石・石床以外に、鞆羽口・鉄滓・鉄膚・銅滓が出土した。

鞆羽口はSB2出土を除いて全てで一九点あるが、いずれも破片である。その内先端部付近の直径が推定できるものが二点あり、約八・五cmを測る。送風孔の直径は約二・〇~二・三cmである。大部分が廃棄された鉄滓に混じって出土している。

鉄滓は四区~一二区にかけて出土しているが、六区~八区が多く、なかでもC~七区からは多量に出土している。ここが廃棄場所選ばれたためであろう。SB2内出土を除くと上屋敷地区出土の鉄滓の出土総量は約五・五kgである。この内、小鍛冶火床の炉底に溜まってでる碗形滓が五点出土している。

鉄膚は成形鍛造の過程で特に多く出る酸化皮膜分で、SB2内・SG6・21・22の周囲から出土している。

銅滓はSB2以外に、SG22から三点、D-12区から一点出土して



図版 19 大畑上屋敷出土石器

いる。

(チ) 石器 (図版19)

唯一の弥生時代遺物として、有孔磨製石鏃がC―七区とSD6内から出土している。出土位置は異なるが同一個体と思われる。その他、おんじやく温石・砥石・石床・線刻石製品、約一五〇点の長楕円形をした用途不明の小円礫が出土している。

温石は、火で焼いた上、布で包み、冬の寒さや病気の際に身体を暖めるもので、鎌倉市内の平安末―鎌倉時代にかけての遺跡から多く出土している。滑石製で、全体に火熱を受け燻したような黒味を帯びる。一・五cm×八・〇cmの大きさで、ほぼ中央に直径一・五cmの円孔を穿っている。

遺跡の特徴 上屋敷地区からは、弥生時代から奈良時代にわたっての遺物や遺構も検出されているが、全体からみればごくわずかで、中心は平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構群である。一一世紀代と推定される土師器を出土する竪穴式住居跡二基のうち、SB2からは小鍛冶跡である火床が、鉄滓・鉄膚・鞆羽口とともに検出され、さらに銅製品の鑄造にるつぼとして用いられたと考えられる土師器坏が銅滓を伴って出土していることから、平安時代後期にはすでに、小鍛冶、銅鑄物製造を目的として工房が営まれていたことが明らかになった。

一二世紀代に入ると、掘立柱建物が建てられるようになり、検出された四棟の内、少なくともSH1・2・3は柱穴からの出土遺物の時期や、中軸線の向き的一致などから、ほぼ同時期の建物と考えられ、いずれも束柱を備えた床張りで、その規模もSH1・2は南北一〇間、

東西三間におよび壮大なものである。これらの建物の性格を語るような遺物は残念ながら出土していない。

これらの建物跡と重複して、小鍛冶跡が二七基検出されている。小鍛冶の操業は重複している火床炉や、炉と炉の間が近接しすぎているものもかなりあることから、同時操業ではなく数次にわたって営まれたことが明らかである。また、その分布を、北区、中央区、南区と三区に分けることも可能で、鉄滓の出土量や鉄膚の有無といった個々の特徴から、製造工程による分業的な操業が行われていたことも考えられる。時期的には、掘立柱建物跡より下がるが、小鍛冶跡の大半が建物内に存在すること、建物跡の柱穴と重複しないこと、多量の木炭片も建物内に集中していることなどから、掘立柱建物が、ある時点で本来持っていた機能が失われた時点、又は小鍛冶操業が優先した時点で、この建物の一部を利用して、小鍛冶操業を開始した可能性も考えられる。掘立柱建物の時期から小鍛冶操業の時期にかけての遺物の中に、中国からの舶載陶磁器がかなり豊富に含まれていることは、この遺跡の一つの特徴であり、遺跡の性格の一端を物語るものであろう。

また上屋敷地区の西北隅にあたる地点から検出された中世墓は、その緻密な構造と比較して、主体部の埋納品は、木製の骨蔵器が推定される他は、かわらけ片のみで、あまりに質素である。時期的には墓の形態から鎌倉時代と大まかな推定しかできないが、恐らく時期的には若干新しいと思われる磐田市の一の谷中世墳墓群の鎌倉時代中期の集石墓に、瀬戸や常滑、渥美産の陶器が骨蔵器として埋納されていたり、供献されていたことと考え合わせると、本遺跡の中世墓の質素さは何

を意味するものであろうか。被葬者については何も言及できないが、今後の調査で類例が増えることにより、どのような身分、階層の人間であったか類推できるようになることを期待している。

以上述べてきた、掘立柱建物跡・小鍛冶跡・中世墓などの遺構・常滑や渥美産の陶器類、湖西や島田の古窯産と考えられる山茶碗類に混じって出土した一二世紀代を中心とした中国産陶磁器・瓦器碗・温石・鉄製人形など、県下でもあまり類例のない遺物が発見され、他地域との交易のあり方も含め、この地域の古代から中世の歴史を研究する上で重要な遺跡となった。

中屋敷地区

層序と遺構 中屋敷地区は、幅三m程の道路を隔てて上屋敷地区の南側に位置する。調査区は中屋敷地区の西辺にあたり、竹林として土地利用されていた。土層は第I層を掘り下げるとすぐ基盤層のII層が現われる。第I層の厚さは平均して約三〇cmである。

中屋敷地区での遺構検出は全て第I層で行われた。上屋敷地区で検出された平安時代末から鎌倉時代初頭にあたる時期の遺構は無く、いずれも中世後半から近世と推定される時期の遺構であった。集石土坑状遺構、土坑状遺構、溝状遺構を検出している。(第12図)

集石土坑(SSK)は五基検出されているが、そのうちSSK1と2は近接して構築され、構造も共通しており、同時期の土坑墓と考えられる。SSK1(図版20)は長径一〇五・〇cm、短径七八・〇cm、深さ六〇・〇cmの楕円形で、底の北側はテラス状の段をつくり、中央

はさらに五〇cm×三〇cmの楕円形に五cm程掘り凹めている。中には一五〇cm大の礫を一一個詰めている。遺物としては、底近くから六枚の北宋銭がさびついた状態で出土した。

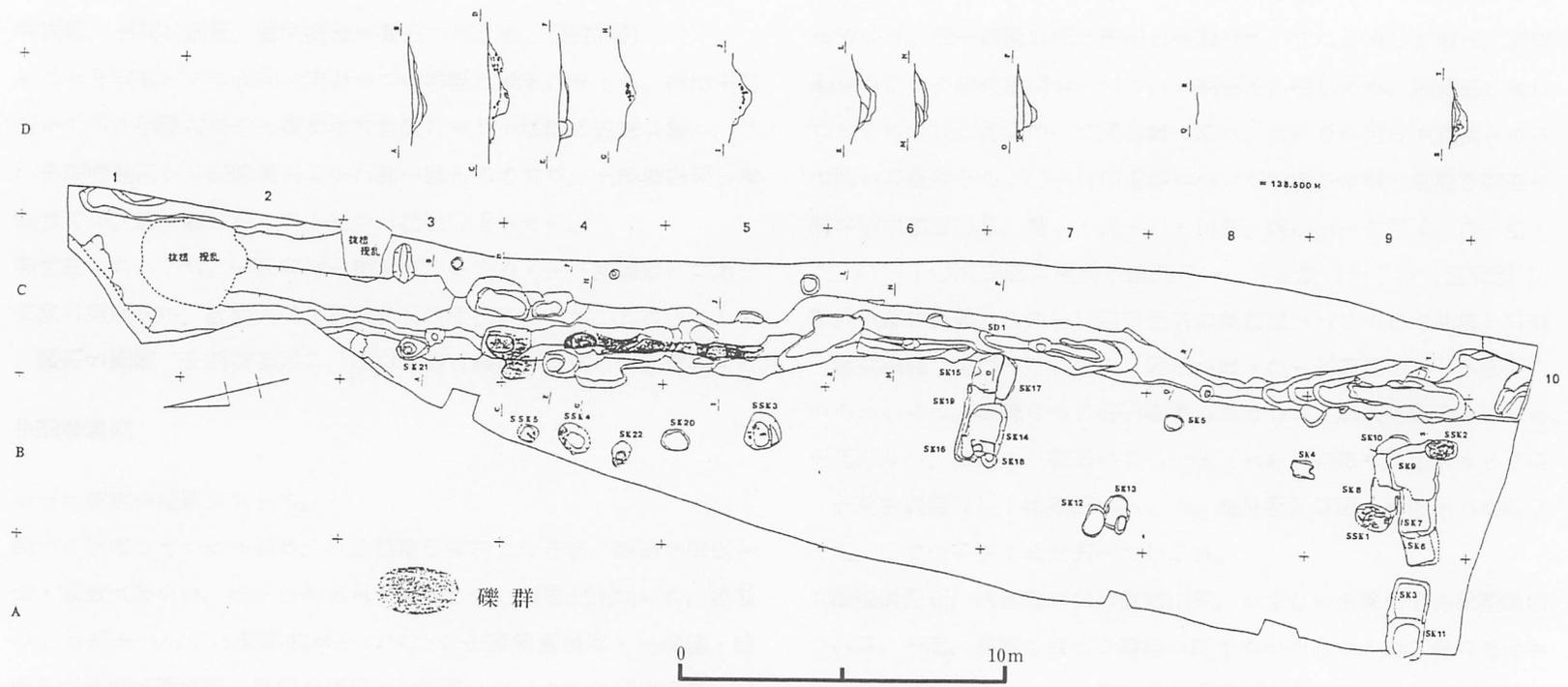
SSK2(図版21)は長径一〇三・〇cm、短径六〇・五cm、深さ三五・〇cmの楕円形で、五〇四五cm大の礫を一〇個詰めている。遺物としては、小柄、銅製の皿の口縁部と思われるもの各一点、歯にかぶせた鑄造冠四点、北宋銭を含む銅銭三枚、さびつきが激しい不明鉄製品二点、かわらけ片一点が出土している。

土坑状遺構は二一基検出している。基本的には隅丸方形をした浅い土坑が多く、重複して検出された土坑が大半で性格も不明なものが多いとみられる。遺構からの出土遺物はかわらけ・近世陶磁器片がある。

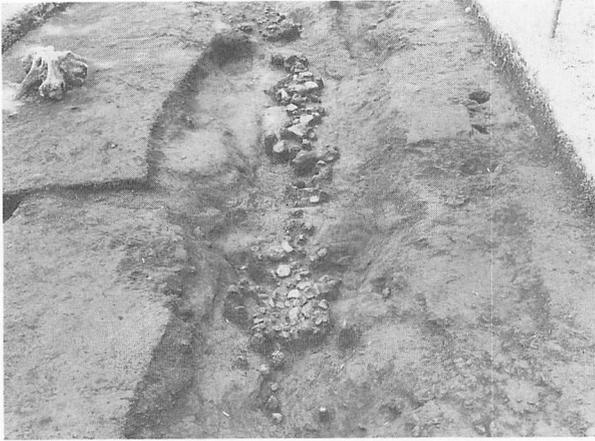
溝状遺構(SD1)はC一二区からB・C一九区にわたって南北に伸びる溝状遺構で、C一二区以北は自然消滅しているのか明確ではない。C一〇区以南は後世の掘削によって消滅している(図版22)。

現存全長約四〇m、幅一・三〇二・三m、深さ三〇六四cm。C一四・五区では溝底から一〇〇二〇cm浮き上がった状態で多量の角礫が検出されている。この溝はC一八区で最も浅く、わずかな凹みを形成するに過ぎないため排水施設などとしては使用不可能である。区画用の溝であろうか。出土遺構は溝の覆土の中層より上からのものが多く、近世陶磁器片・かわらけ片・鉄砲玉が出土している。

遺物 図版23の1〜5はSSK2内出土遺物である。1は銅製の小柄に鉄製の小刀を差したもので、切先部分が欠損している。全長推定一八・七cm、小柄部分長さ九・二cm、幅一・三五cm、厚さは最大で



第12図 大畑中屋敷地区遺構全体図



図版 22 溝状遺構



図版 20 集石土壇 SSK1



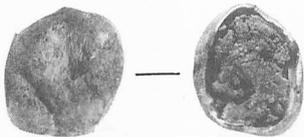
図版 21 集石土壇 SSK2



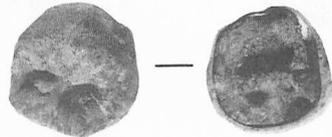
1



2



3



5

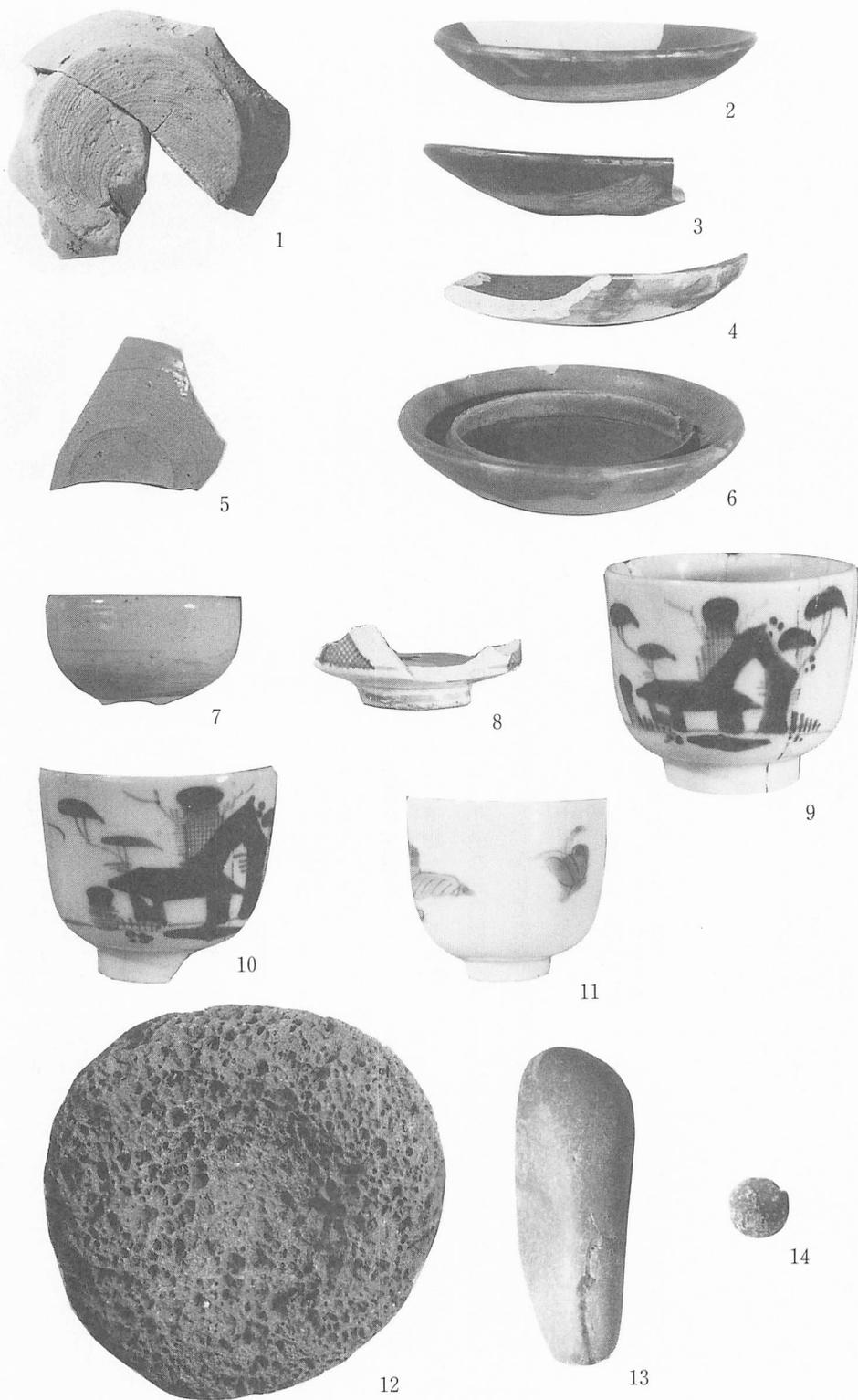


4

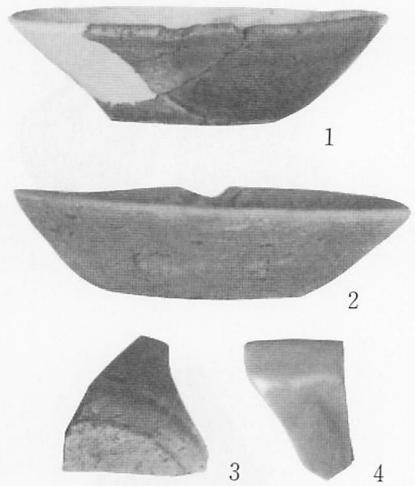
図版 23 大畑中屋敷集石土壇状遺構 SSK2 内出土遺物



图版 24 大畑中屋敷出土銅銭



図版 25 大畑中屋敷溝状遺構 SD1 内出土遺物



図版 26 かわらけ・青磁

三・五mm。小刀部分は平棟造りで、中央棟部厚三・〇mm。2は銅製の皿の口縁部かと思われるが明らかではない。口径、器高とも不明。口縁部は肥厚し、かなり鋭く外反させ口縁帯をつくる。3と5は铸造冠（クラウン）。天然歯に铸造で型をとって被せたもので、天然歯は腐って干からび、冠とは分離した状態になっている。冠の厚さ〇・五と〇・六mm。極めて精巧な造りで、3・4は右上顎大白歯、5は右下顎大白歯に被せたものである。

図版24の1と10は銅銭で、1と3、5と7がSSK1内出土。4・9・10がSSK2内出土、8がSK16内出土。判読可能なものは全て北宋銭。1は咸平元宝、2は熙寧元宝、3・4は元豊通宝、5は元符通宝、6は聖宋元宝、7と10は判読不可能なものである。

図版25の1と14は全てSD1内出土。1はかわらけの底部破片。2と4は鉄釉小皿、5は灰釉小皿、6は鉄釉の燈明皿、7は灰釉のぐい呑、8と11は染付碗。12は凹石で、最大径一三・〇cm。縄文時代の凹

石と違って、これは石皿の用途に近いものであろう。13は長さ一一・〇cmの長楕円形の礫で、一端に敲打痕が顕著に残る。14は鉛製の鉄砲玉で直径一・二cm、重さ九・〇g。

図版26の1と3はかわらけでそれぞれ、SK1・18・15内から出土した。上屋敷地区出土品に比べて器形が逆台形状であること、見込中央に横ナデを施すなど、より新しい時期のかわらけの特徴をもつ。

遺構外からも、かわらけ、近世陶磁器片が若干出土しているが、その中に混じって中国製陶磁器片が七点出土している。いずれも青磁で、内一点（図版26）は青磁蓮弁文碗の破片で、蓮弁は無鎊、先端は尖り気味で細身である。

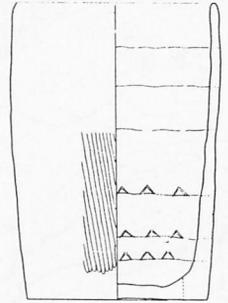
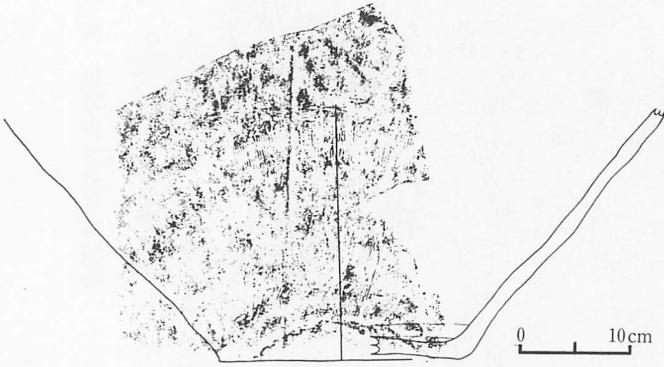
遺跡の特徴 上屋敷地区が平安時代末と鎌倉時代初頭を中心とした遺構、遺物がかかなり濃密に分布しているのに比べ、中屋敷地区は埋納された小柄などの形式から中世後半と考えられる時期の集石土塚墓を上限とし、溝状遺構など近世以後の遺構が中心となっている。上屋敷地区と中屋敷地区とはこのように時期も性格も隔絶している様相を示すが、両地区とも調査区域は限られた一部の範囲であるため、この状況を両地区全体まで押し広げることにはまだ時期尚早と言えよう。

現状 発掘調査終了後、上・中屋敷地区は、国道二四六号裾野バイパス建設工事が開始され、現在はその道路下となっている。両地区の大部分はまだ未調査で、田畑、住宅地として利用されている。

資料の所在 裾野市教育委員会 保管

文献 中野国雄・渡瀬治・袴田稔・井上輝夫「富沢原・千福馬場

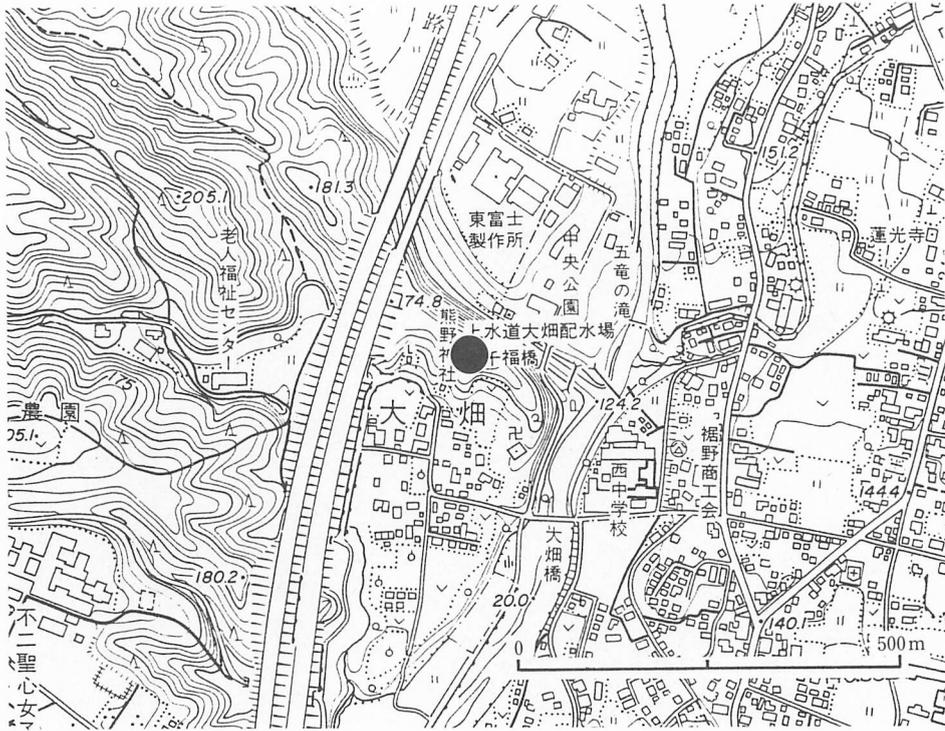
添・大畑・桃園入ノ洞」裾野市教育委員会他 一九八九



大畑経塚出土遺物

大畑城跡
おおはたじょうせき

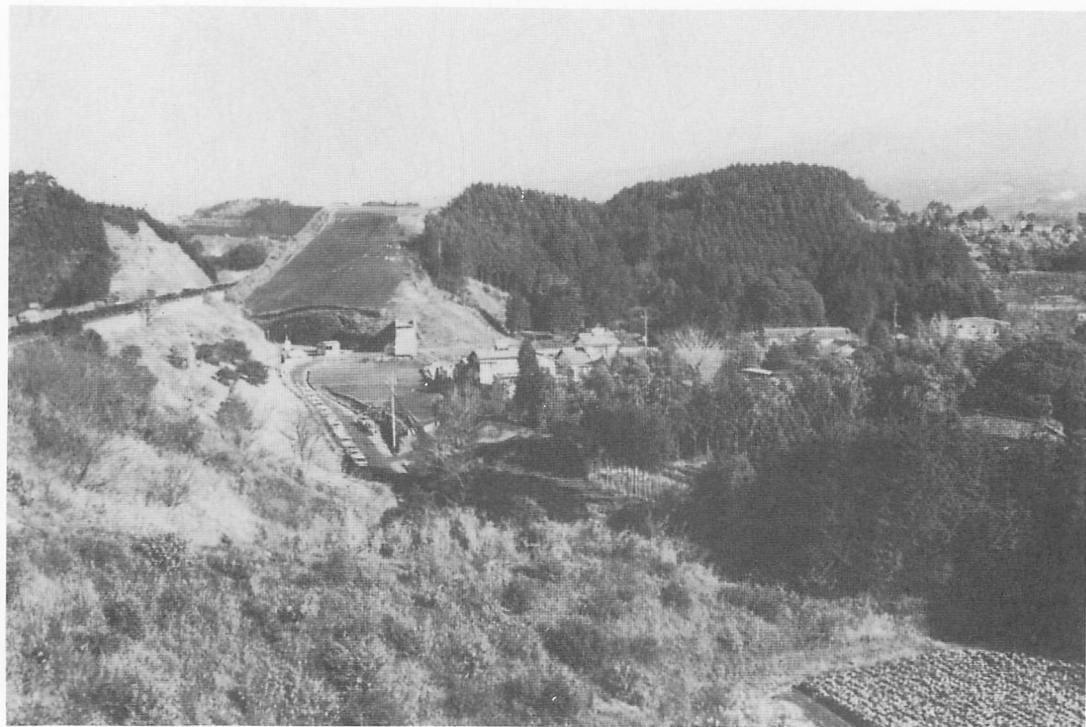
所在地 裾野市大畑字古城跡一八番地ほか



位置図



遺跡範囲図

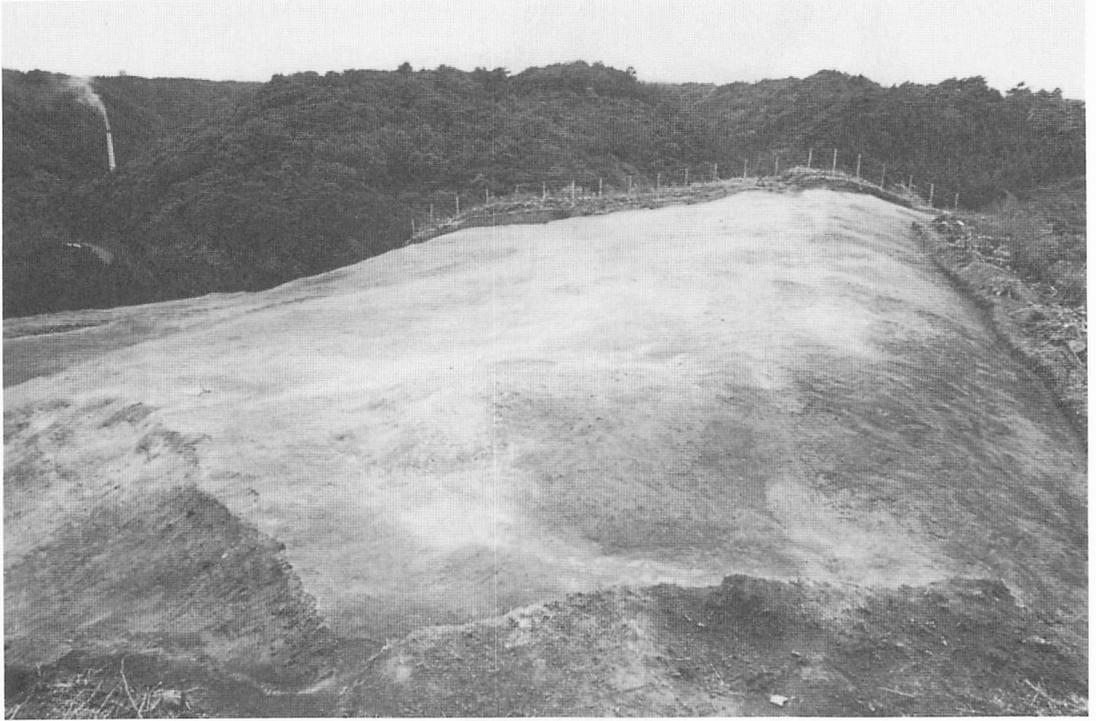


大畑城跡全景(南から)

位置と立地 愛鷹山から東南方に延びた尾根の末端が、大畑地区で低い鞍部となるが、再び高さを増して、大畑集落の北側をさえぎっている。本城跡は、この丘陵の海拔一七六・二mの頂部を中心にして築城されている。城跡の北側は急崖となって佐野川の溪流に落ち込み、南は大畑集落のある台状地形となっているが、その東側は黄瀬川が流れ、西側は勝負川が愛鷹山麓を区切って深い溪流をなし、大畑全体が天然の要害となっている。

発見と調査 本城跡は、昭和一〇年代の初め、沼館愛三が踏査して「静岡県郷土研究」第九輯に発表している。その後、昭和四〇年代に、県立沼津東高等学校郷土研究部のほか、裾野郷土研究会の市川高雄、佐藤隆らが踏査し、昭和五〇年代、伊禮正雄、関口宏行、中野国雄らが調査して、関係する機関誌、報告書、刊行本に発表している。昭和五九年（一九八四）、国道二四六号バイパスが、本城跡の西曲輪を通過することになったため、県と裾野市が主体となって、事前の発掘調査が実施された。

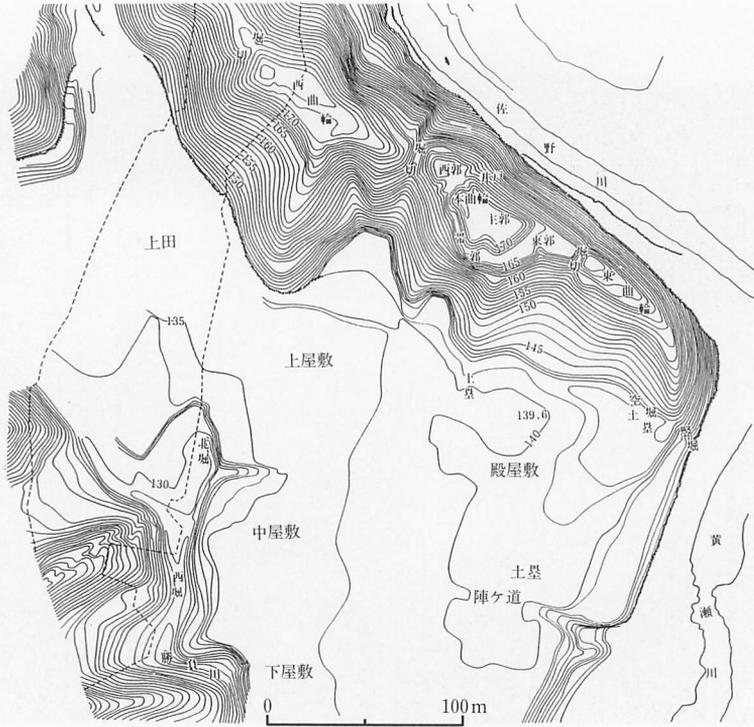
遺構 大畑熊野神社すぐ北方の丘陵頂部を削平して、長さ約三〇m、幅約二〇mの不整形な主郭があり、西隅に低いふくらみがある。主郭の北西側と南東側の一段下に、ほぼ同じ高さに平場があって、東郭と西郭を構成し、南側にこれを結ぶ通路状の帯郭がある。主郭を中心に東郭と西郭の両端は、大きな空堀切で仕切られている。以上の長さ約一〇〇m、最大幅約三二mの主体部を本曲輪としている。この本曲輪には、数本の堅堀と、南側に小さな平場が付属し、主郭北西端の直下に井戸址がある。東の空堀切から東南方向に下る丘陵稜部には、



大畑城跡西曲輪全景(東から)

数段の狭長な平場があり、その末端に黄瀬川に落ち込む堅堀と、反対側に空堀と土塁趾が残存している。以上を東曲輪としている。この東曲輪と本曲輪の南側下に、一辺約一一〇mの通称「殿屋敷」といわれる方形の居館跡があって、北西隅と南側の一部に土塁趾が残存している。本曲輪西側の空堀切から北西に続く丘陵の稜部に、長さ約六三m、幅約二〇mの平場がある。その先端に基部で一辺一二m、上端部で一辺の長さ七mの見張台のような高まりと、それに続く稜部に空堀切の遺構が、東名高速道路建設の時に作られた実測図に示されていたが、同工事によって消滅した。東南側にその半分が残されており、この部分を西曲輪としていた。国道二四六号の建設工事は、西曲輪残存部分の大半をカットすることになったため、発掘調査が実施されたが、曲輪内に遺構は検出されなかった。しかし土層の状況から、稜部を削平して平らに地ならしをしたことが明瞭に観察された。また北側の佐野川に面した平場状の裾部からは、多くの柱穴が検出されたが、組み合わせはできなかった。

遺物 出土遺物には、縄文時代土器片(図1~3)、青磁片(図4・11)、近世陶磁片(図5・6)、金属製品(図7~10)、鉄鏃(図12)があった。このうち青磁片の4は、頂部平場から出土した、中国産の劃花文碗で、福岡市祇園駅出入口遺跡から出土したものと極めてよく似ており、年代は一二世紀中葉から後半のもの、同じく11は、裾部平場から出土した中国産の鎬蓮弁文碗で、一三世紀後半から一四世紀代のものと考えられている。また12の鉄鏃は、現存の長さ一〇・八cm、身長さ五・八cm、同幅二・四cmの逆刺かきりの深い大形鏃で、この形式のもの



大畑城見取図

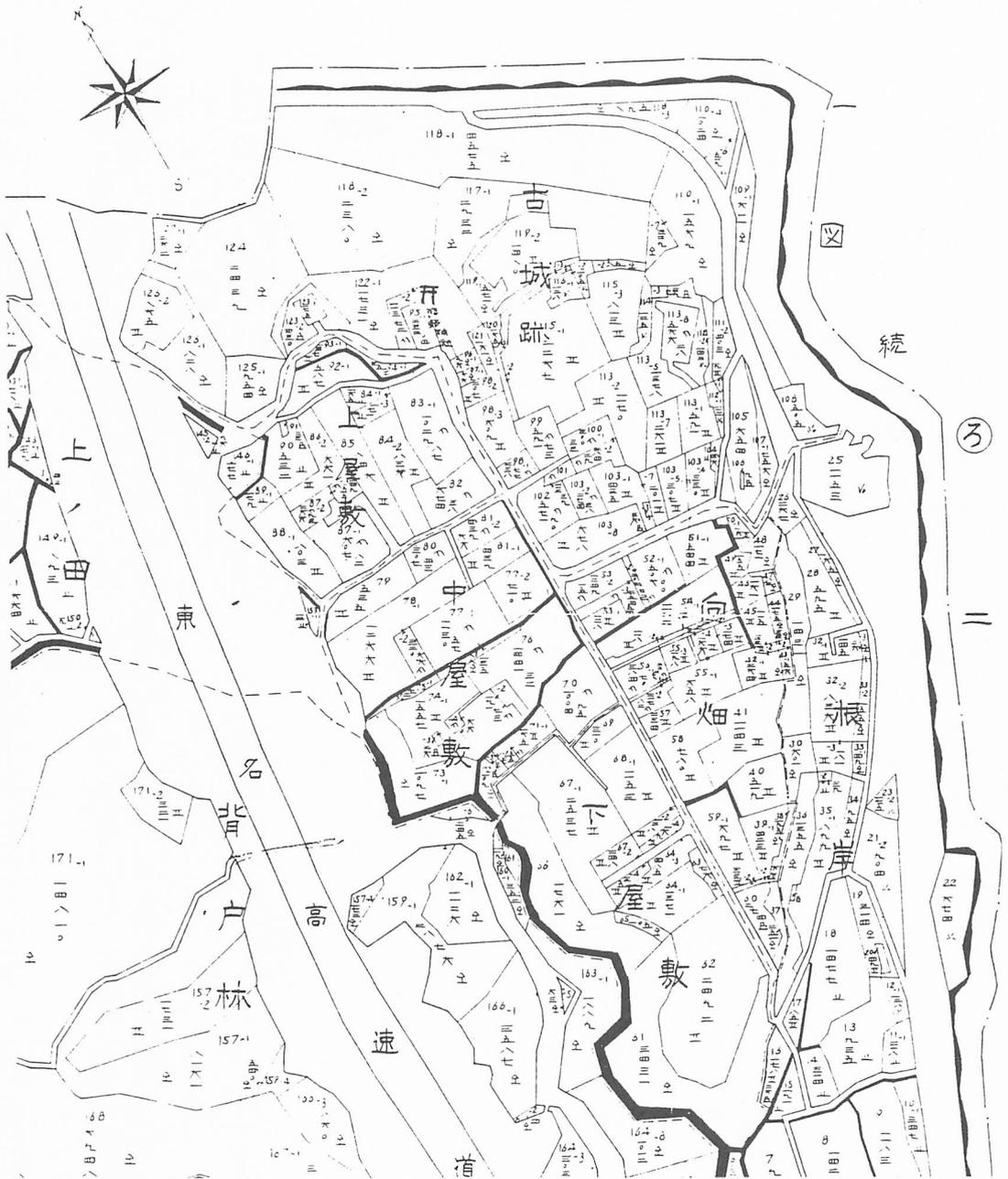
を「腸扶^{わたくり}」といい、製作、使用年代を中世初頭までさかのぼることができる。

遺跡の特徴 本城跡は、大畑字古城跡地籍内に、「古城跡」と「殿屋敷」と呼ばれる居館跡が一体となって存在し、中世の典型的な城館跡であって、成立年代の古いことを思わせる。

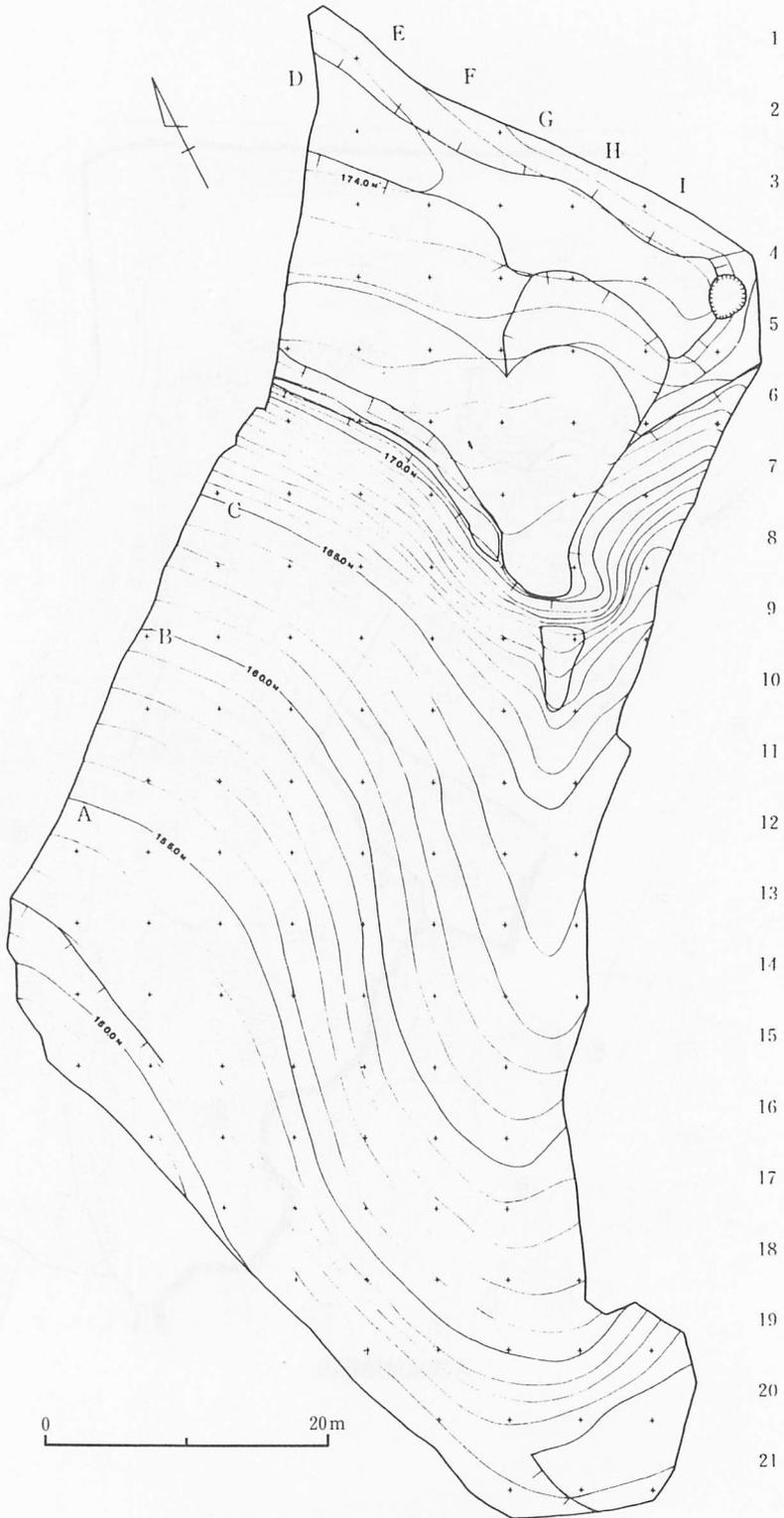
現状 大部分は山林で、本曲輪、東曲輪の遺構は、よく残存しているが、殿屋敷の大部分は住宅地となっている。西曲輪は、国道二四六号の路線敷となって消滅した。

資料の所在 裾野市教育委員会 保管

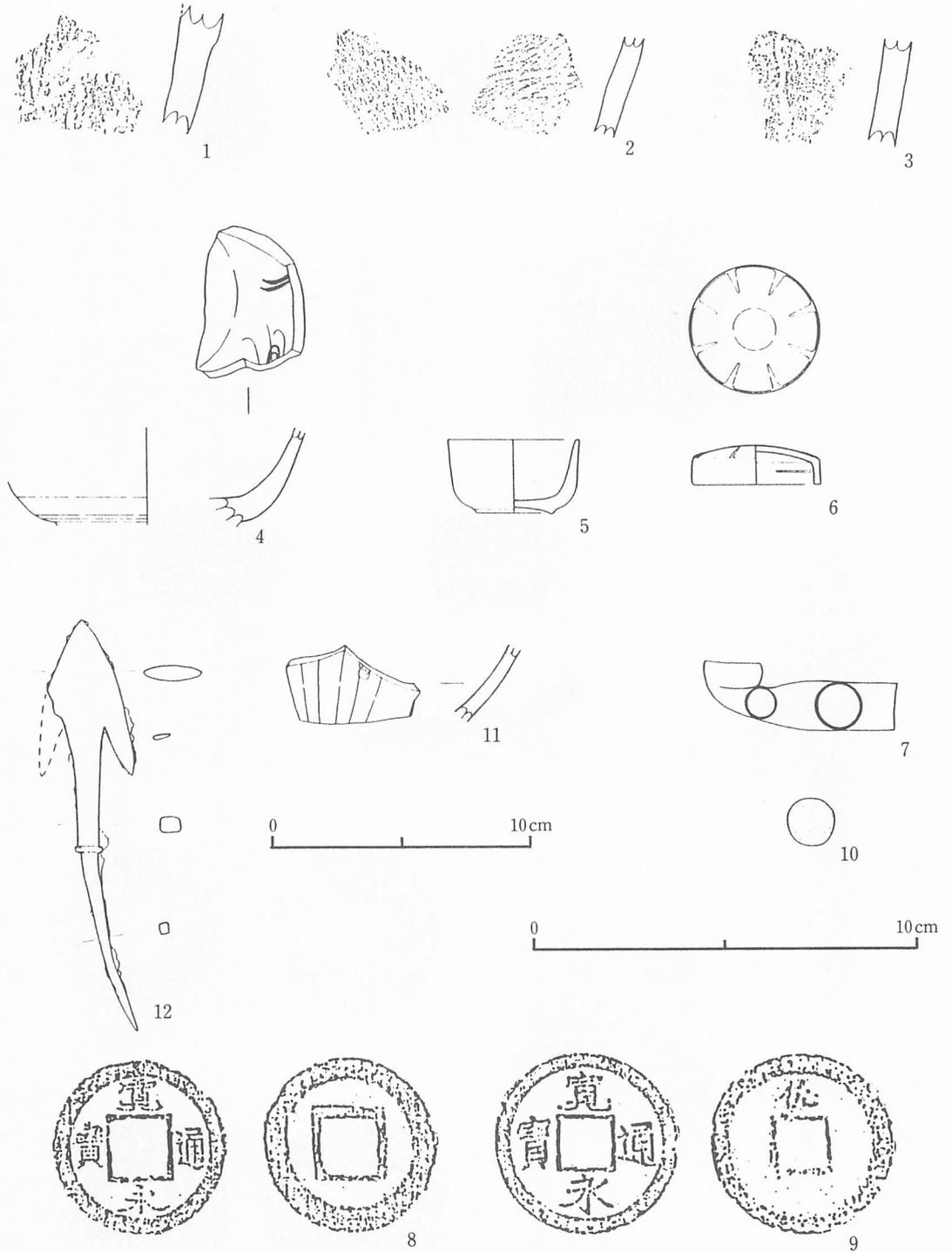
文献 渡瀬治ほか「富沢原・千福馬場添・大畑・桃園入ノ洞」建設省、静岡県、裾野市教育委員会 一八八六



大畑城跡地籍図

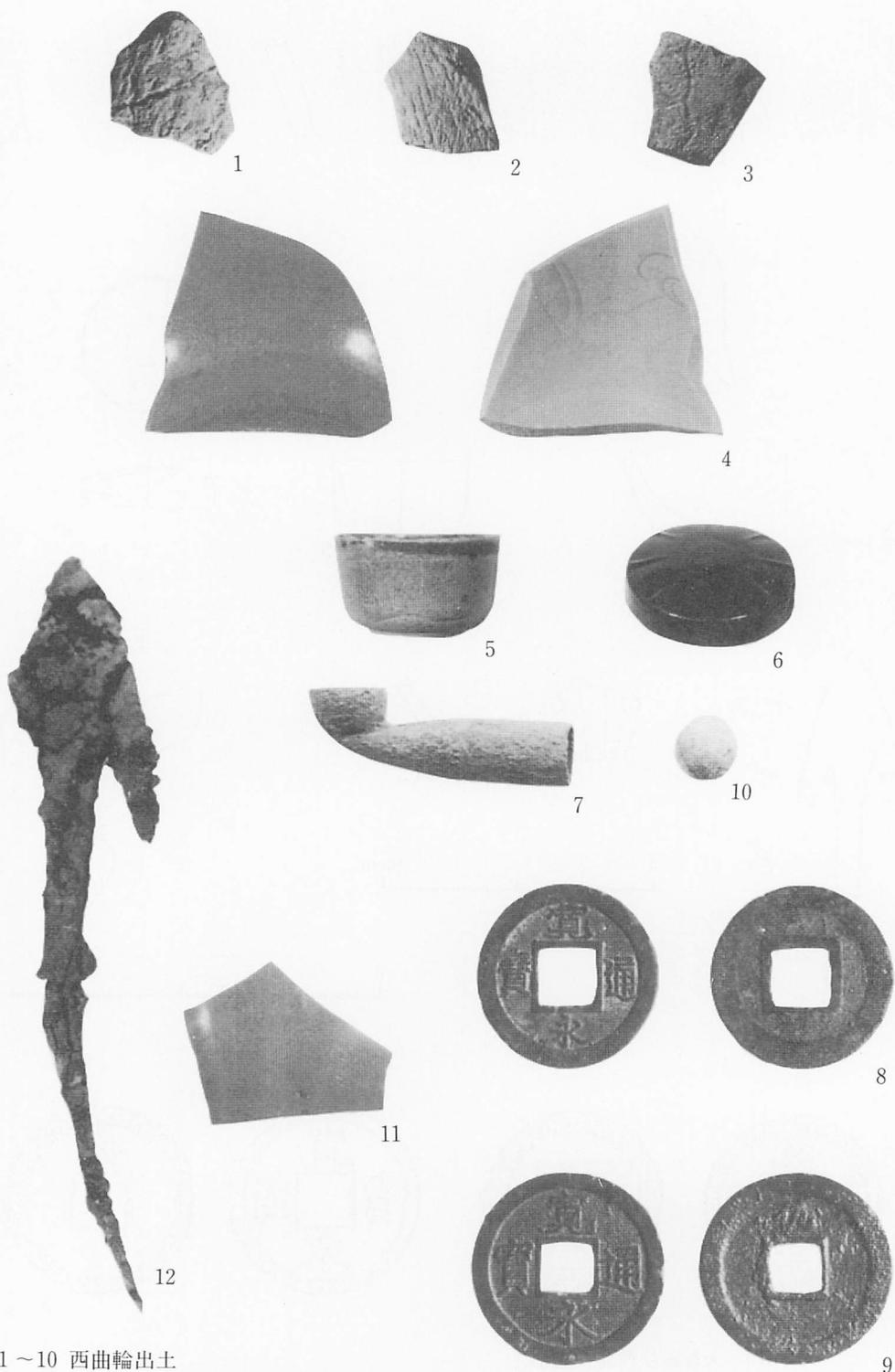


大畑城跡西曲輪及び調査区地形実測図



1～10 大畑城址西曲輪出土
11、12 西曲輪北方河岸段丘状平場出土

大畑城跡西曲輪及び河岸段丘状平場出土遺物実測図



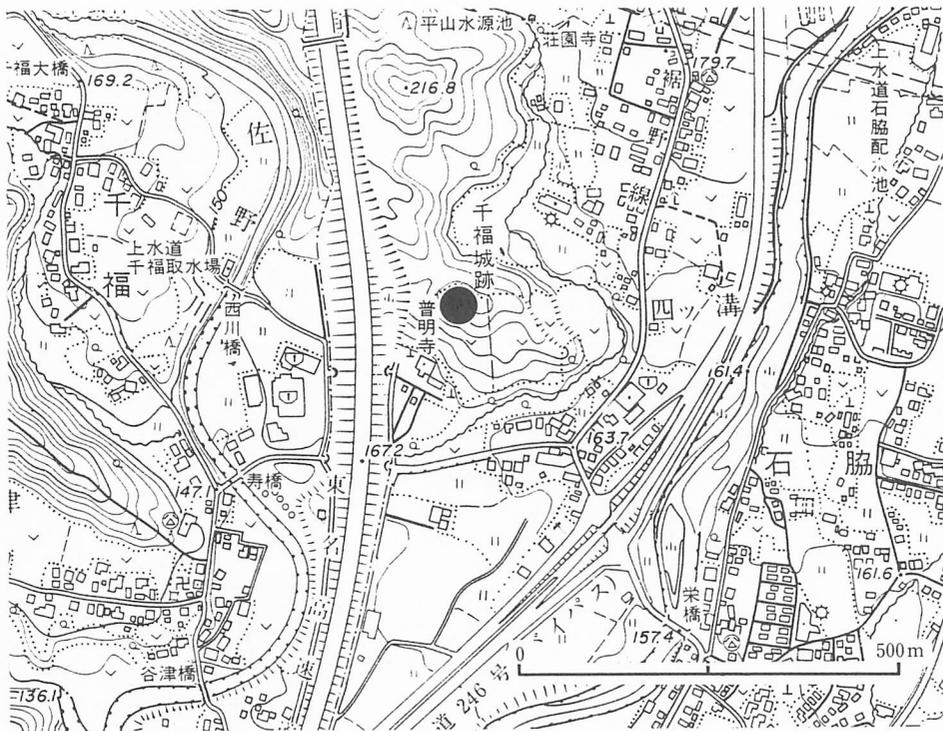
1～10 西曲輪出土

11・12 西曲輪北方河岸段丘状平場出土

大畑城跡西曲輪及び河岸段丘状平場出土遺物

千福城跡
せんぶくじょうせき

所在地 裾野市千福字平山耕地三七七番地ほか



位置図

位置と立地 本城館跡は、裾野市御宿と千福との間にある、海拔二〇一mの独立丘陵平山を利用した山城跡で、北と東及び西側を平山川が深く浸食谷を形成して防壁の役割をはたし、また大きくは東方に黄瀬川、西方に佐野川を控え、北駿と南駿を結ぶ交通路を扼す天然の要害に立地している。

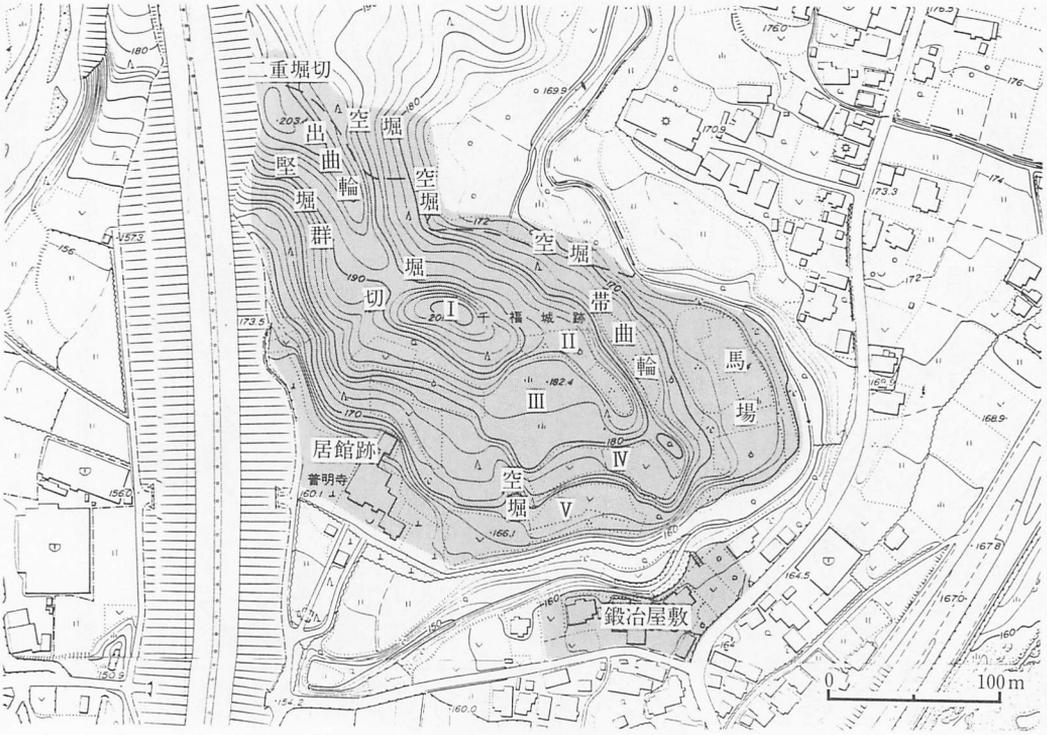
発見と調査 本城跡は、昭和一〇年代に沼館愛三が踏査し、その後、昭和五〇年代に、伊禮、関口、中野が調査して、それぞれの関係機関誌に報告している。(深良陣山・堀ノ内の項参照)

遺構 千福(平山)城跡の範囲図に示したように、海拔二〇一・六mの平頂部Iを主曲輪とし、東及び東南側の裾部に向かってII～Vノ曲輪を配置し、それに付属する帯曲輪、空堀を置き、複雑な縄張りを構成している。Iノ曲輪の北西、海拔二〇三mの丘陵平頂部に曲輪を構成しており、その先端に二重の空堀切があるが、東名高速道路で一部消滅している。Iノ曲輪と出曲輪の間の空堀切中央部に土橋状の遺構がある。また出曲輪の西斜面には、数本の堅堀がある。地籍図に示したように、南側に鍛冶屋敷という地名があり、かつて空堀に囲まれていたという。これに接して「塩やぐら」と伝承されるころもあつたという。南西裾部の普明寺境内は、城主の居館跡であるとする。

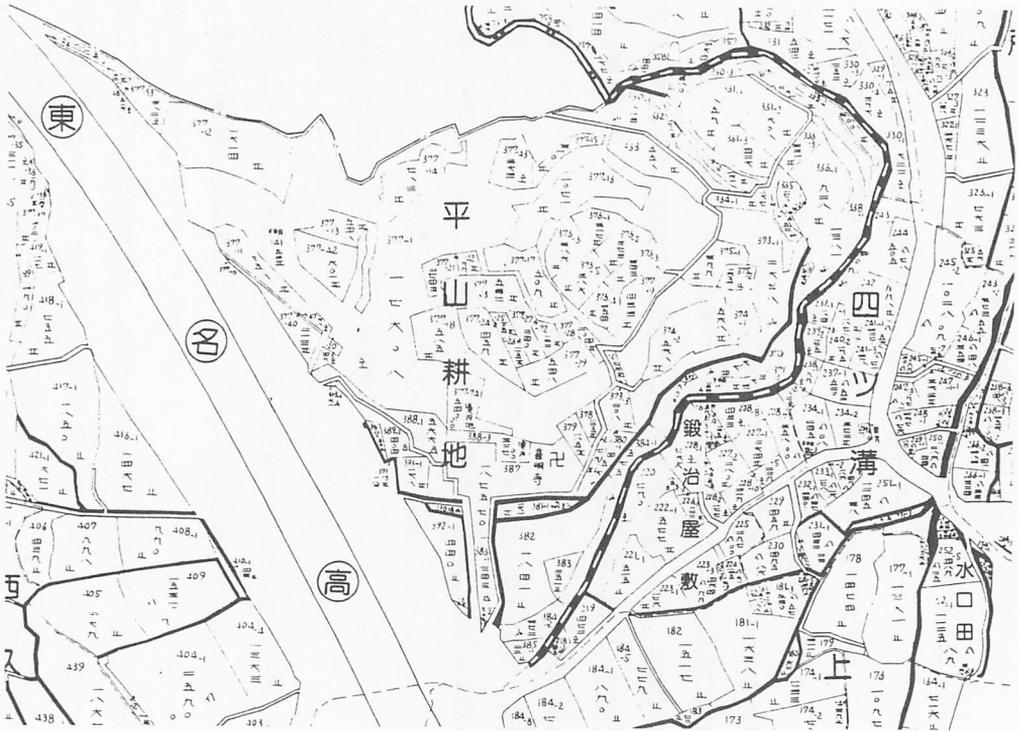
遺跡の特徴 顕著な遺構の残る中世城館跡として注目される。

現状 市の史跡に指定され、保存されている。

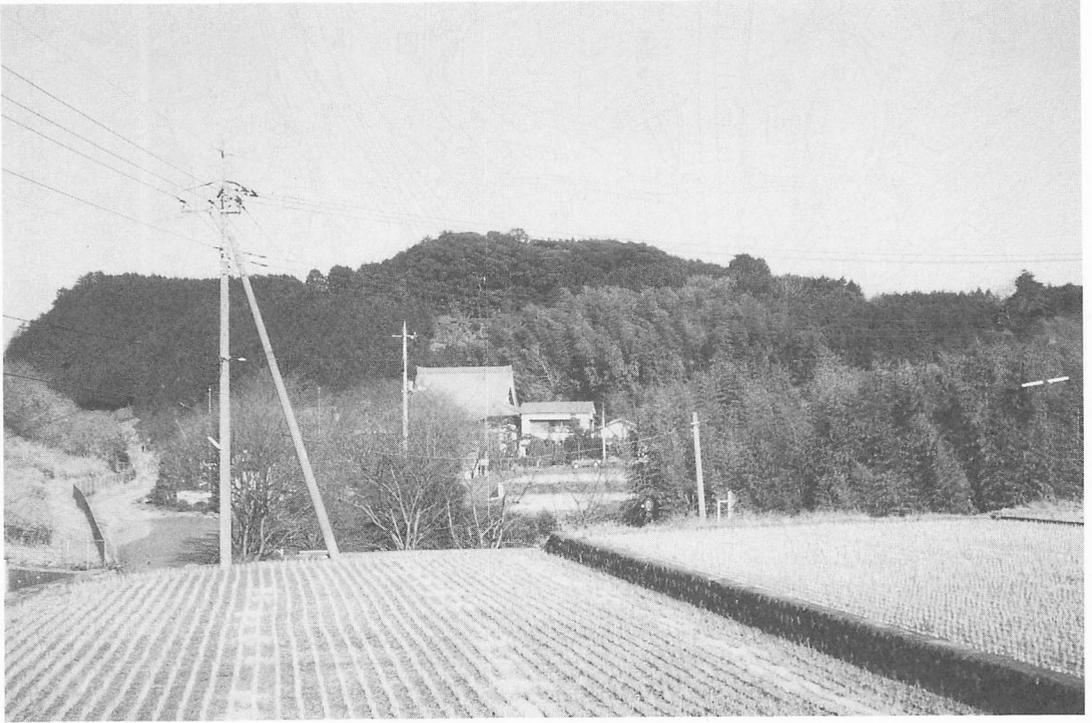
文献 「駿河記」ほか、「大畑村他五ヶ村山林・古跡・用水等書上慶安三年」湯山芳健家文書 裾野市史第六巻 一九九一



千福(平山)城跡範圍圖



千福(平山)城跡地籍圖



千福(平山)城跡遠望

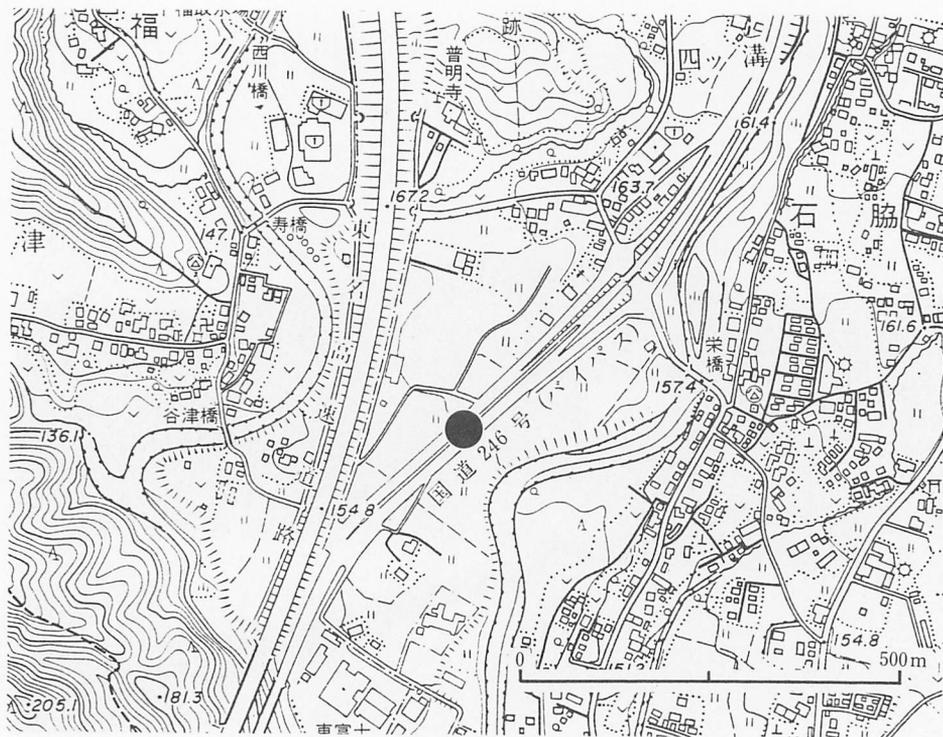
(用語解説)

郭 城郭のなかで、防御施設を備えた一区画をいい、山城跡で袖のように張り出した郭を袖郭、細長く帯のように延びた郭を帯郭、城郭を構成する山城の裾部にある郭を裾郭すそくわなどという場合もある。

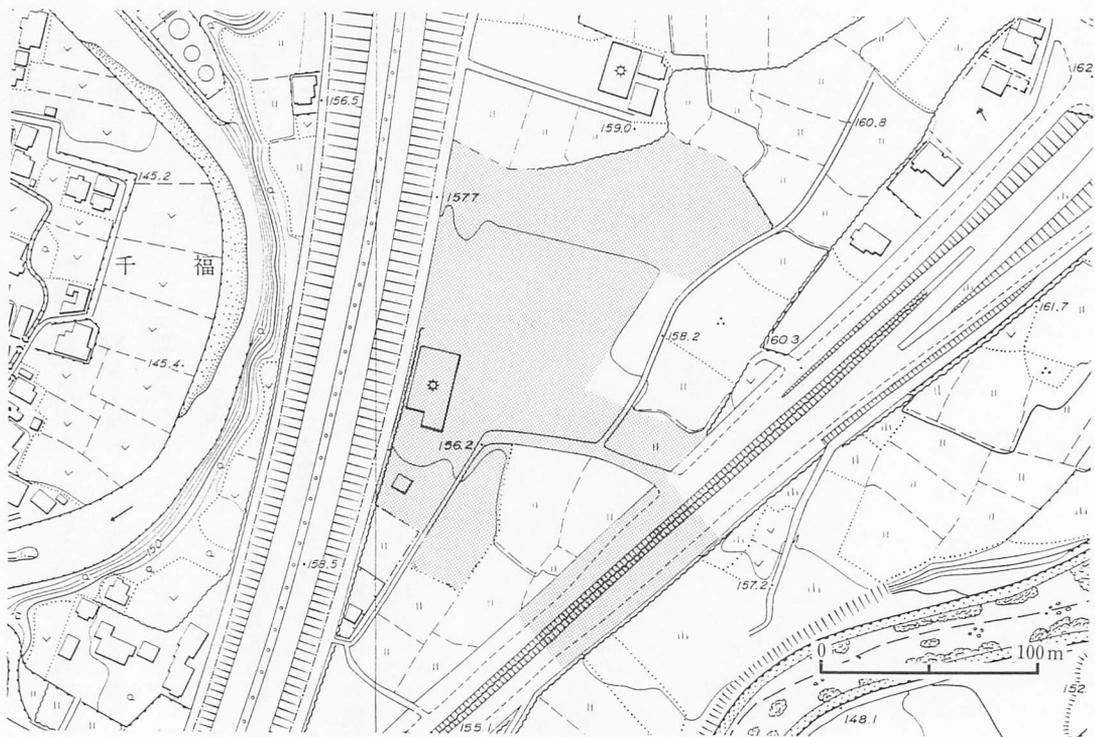
曲輪 中世の城郭で、いくつかの郭、土塁、空堀、堀切などの防御施設で構成された区画を曲輪といい、中心となる曲輪を主曲輪、本曲輪または一ノ曲輪、以下二ノ曲輪、三ノ曲輪、あるいは主曲輪を中心に東にあれば東曲輪などといっている。一般に数曲輪で一つの城郭を形成している。近世になって本丸、二ノ丸、三ノ丸などというようになった。

千福馬場添遺跡
せんぷくばばそえ

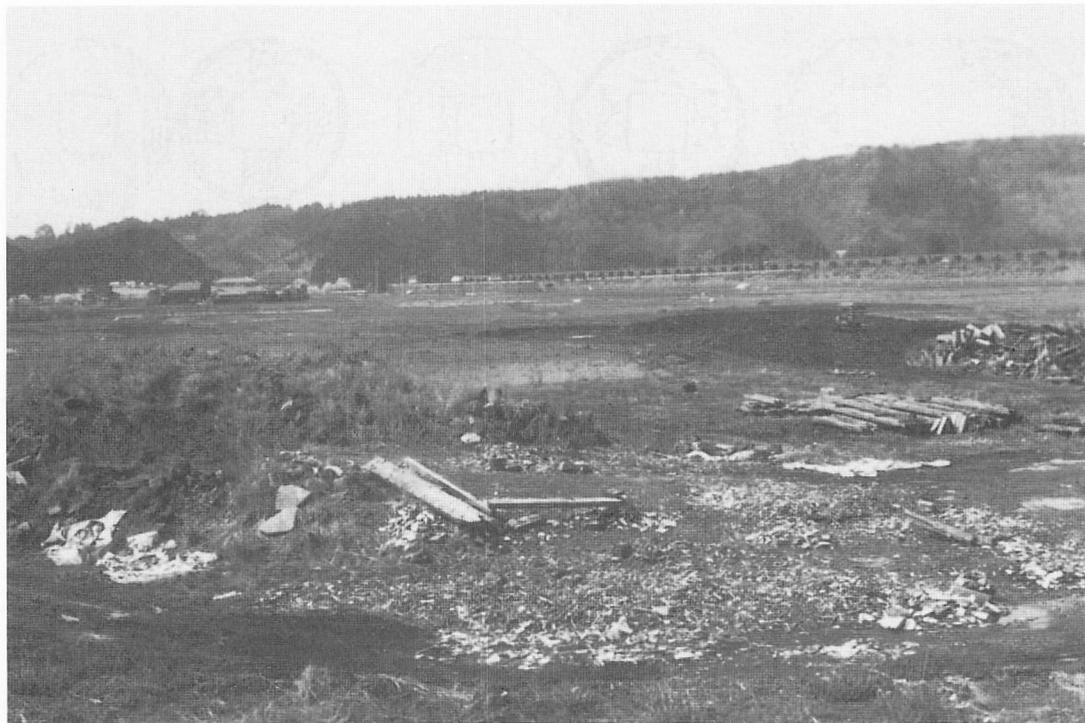
所在地 裾野市千福字馬場添



位置図



遺跡範囲図



千福馬場添地区調査前遠望

位置と立地 本遺跡は、千福平山丘陵の南方に広がる平坦地、海拔一五五〜一六〇mの千福馬場添に位置する。この地区は北に千福城跡があり、東は黄瀬川、西に佐野川に囲まれたほぼ中央に立地する。

発見と調査 本遺跡は、千福城の馬場であったといわれてきたところであり、昭和五八年（一九八三）、国道二四六号バイパスが、この地区を通過することになったため、五八年と翌五九年（一九八四）、静岡県及び裾野市教育委員会によって発掘調査が実施された。

層序と遺構 第一層は、表土耕作土層、第二層は、暗黄褐色土層で黄・赤色粒、砂礫、鉄分を含む。第三層は、暗黄褐色層で灰色粘土ブロック、鉄分を含む土坑が検出された。第四層は、暗黒褐色土層で砂と小礫を含む。堅穴状遺構、溝状遺構、集石土坑、土坑、柱穴等が検出された。第五層は、黒褐色土層で、黄・赤粒、小礫を含む。第六層は、黒褐色土層で赤・黒色粒、小礫を含む。第七層は、黄褐色砂層で赤・黄色粒と小礫を含む。第八層は、砂礫層、第九層は、砂層で硬く縮まる。

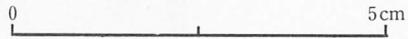
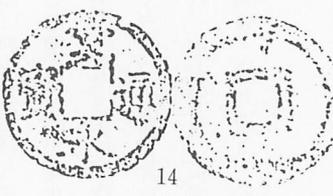
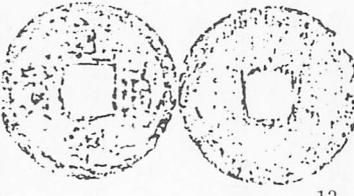
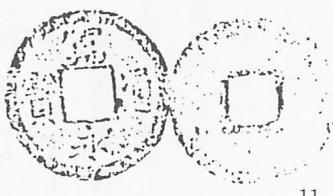
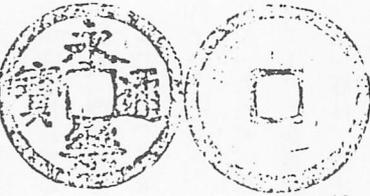
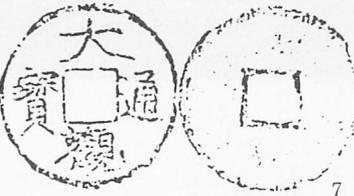
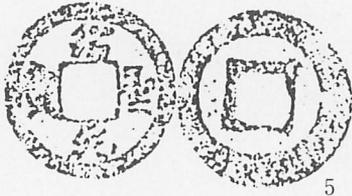
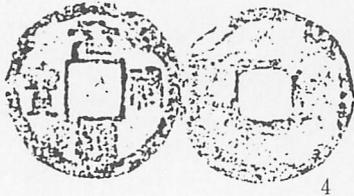
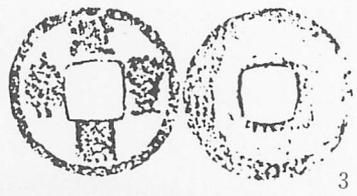
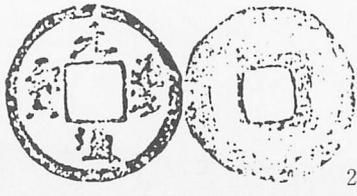
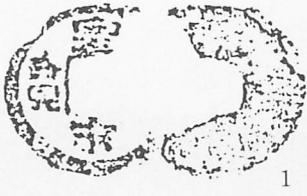
遺物 陶磁器類、金属製品、古銭、砥石等が出土している。のうち陶磁器類には、鉄釉、灰釉、緑釉の施された小皿、天目茶碗、挿鉢、中国産青磁破片があり、一六世紀代の美濃・古瀬戸窯及び中国産のものと思われる。

遺跡の特徴 中世城館跡に関連する遺跡と考えられる。

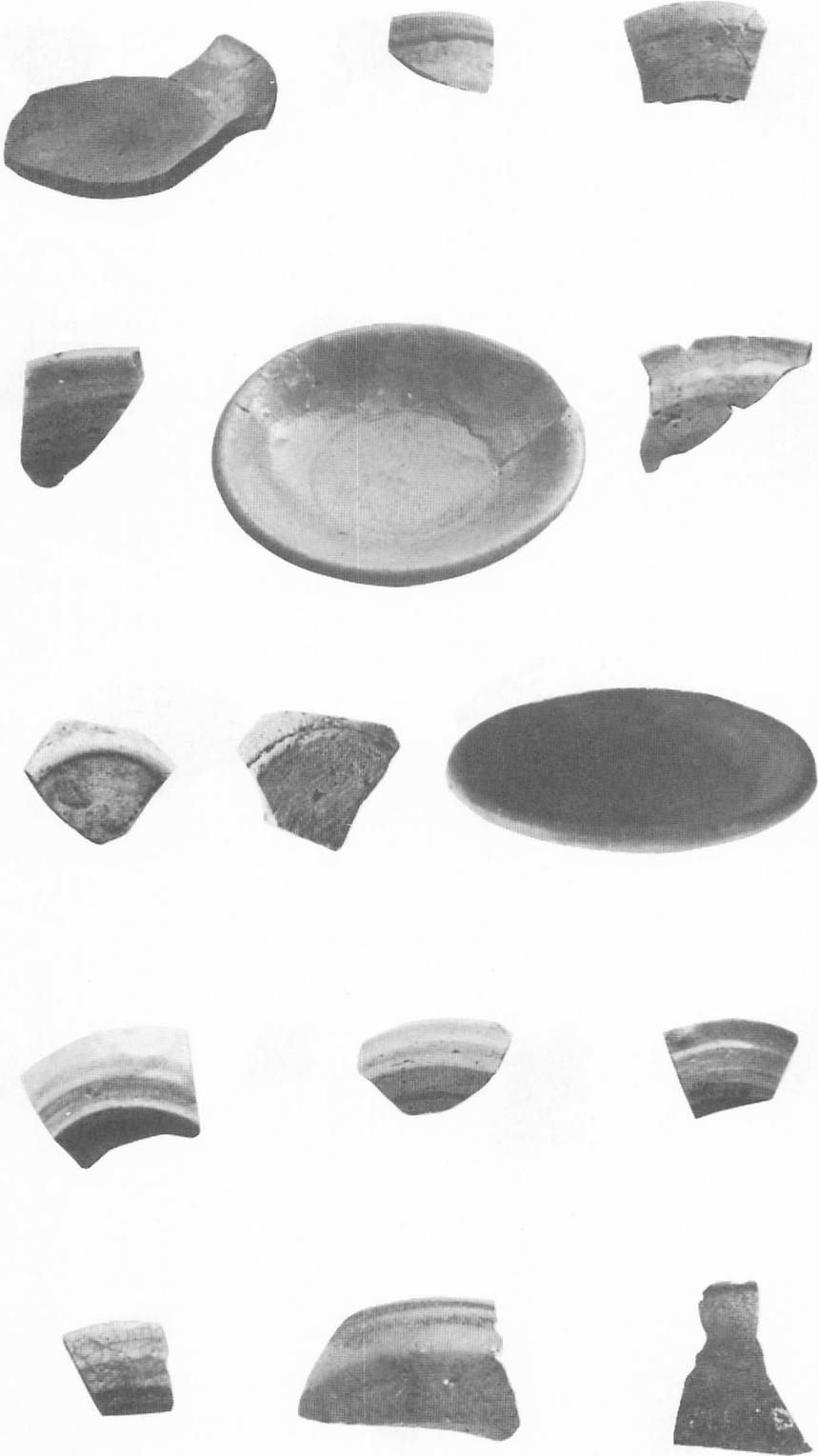
現状 国道二四六号路線敷、工場、住宅地となっている。

資料の所在 裾野市教育委員会 保管

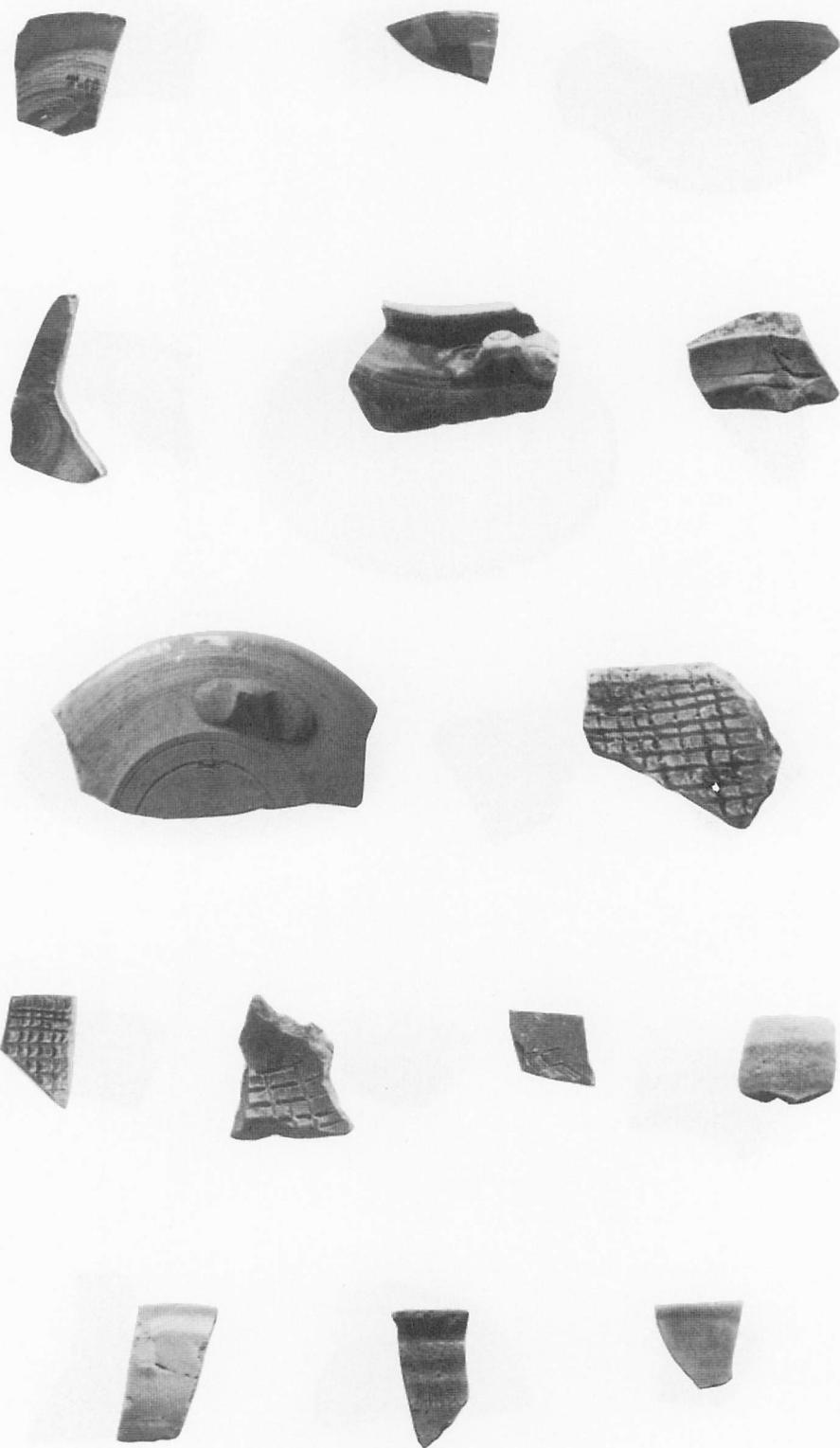
文献 富沢原遺跡と同じ



千福馬場添遺跡出土古錢拓影



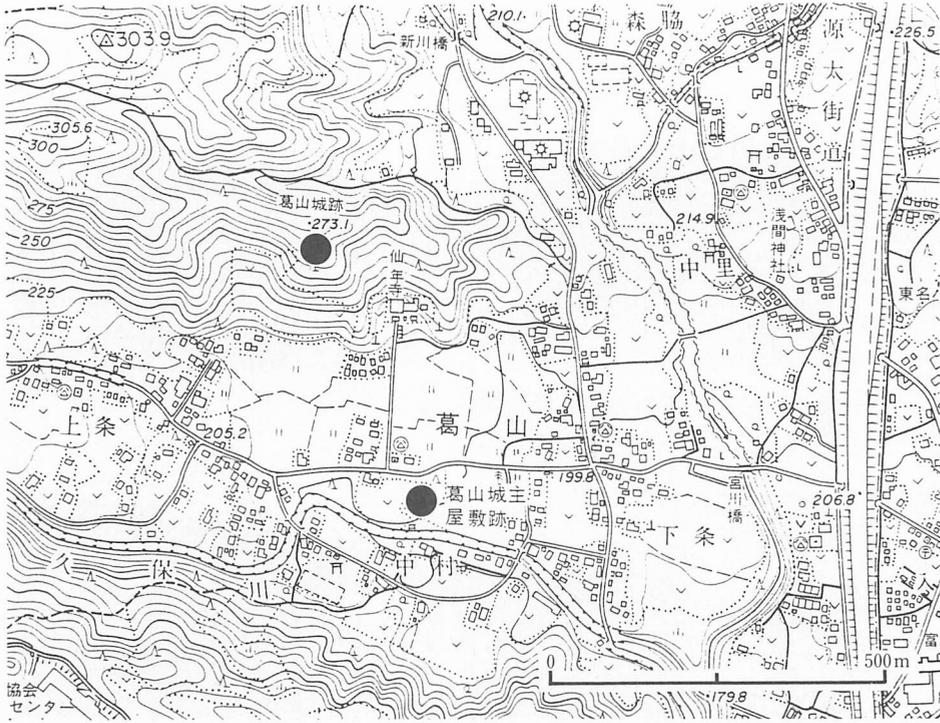
図版 1 千福馬場添遺跡出土陶磁器類(1)



図版2 千福馬場遺跡出土陶磁器類(2)

葛山城館跡 (城址・居館跡・かくし砦)
かづらやまじょうかんせき

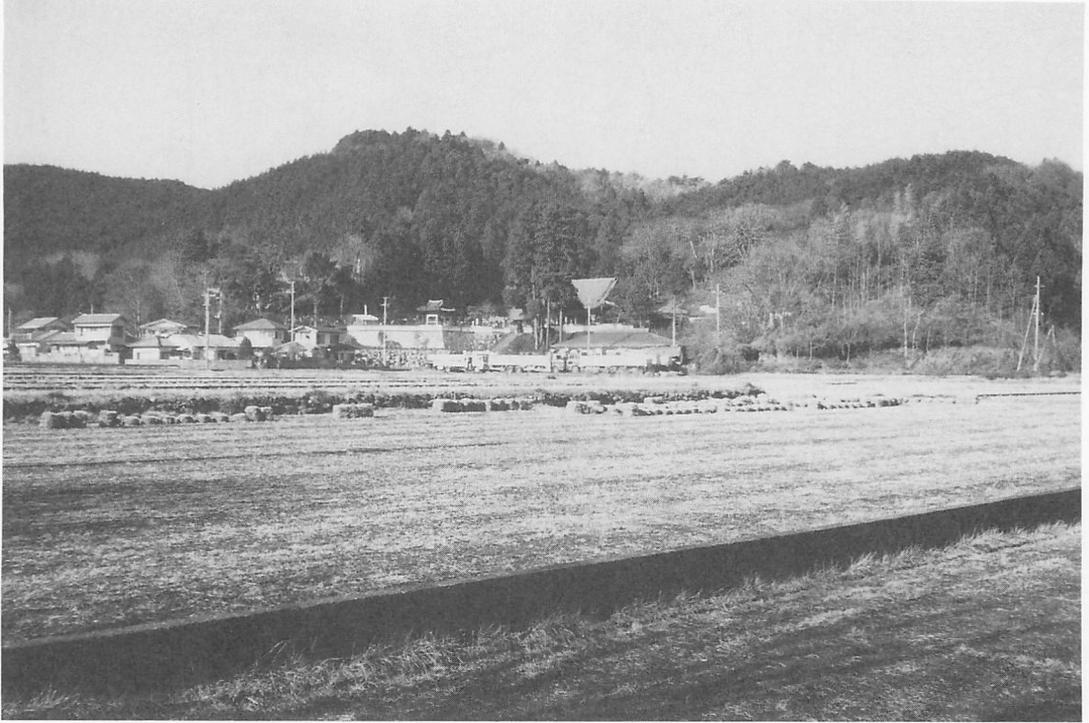
所在地 裾野市葛山



葛山城館跡群 位置図



葛山城跡範囲図



葛山城跡遠望

位置と立地 葛山城跡は、愛鷹山から東方へ延びた尾根の末端、海拔二七〇・四mの愛宕山頂部を利用して築城されている。居館跡は、葛山集落のある平坦な入谷地形のほぼ中央部にあり、南側に接して大久保川が流れている。「葛山かくし砦」は、葛山上城から大久保川の沢谷を約2kmほど遡ったところにある、山神社北側背後の海拔四九〇mの尾根稜部に築かれている。

発見と調査 本城館跡は古くから知られていたが、昭和一〇年代に、沼館愛三によって踏査され、その全体像が明らかになった。その後、昭和五〇年代に東海古城研究会の長倉智恵雄、伊禮正雄、関口宏行、地元の研究者らによって踏査されている。平成元年（一九九〇）、裾野市教育委員会は居館跡の実測と井戸址の確認調査を実施し、同二年（一九九二）、居館跡内B号井戸址の発掘調査を行っている。

層序と遺構 層序は居館跡内B号井戸址の発掘調査の時、地下八・四mまで調査されている。それによると、第一層 黒褐色耕作土層、第二層 黒褐色有機質土層、第三層 黄褐色土層（埋立土層）、第四層 黒褐色粘質土層、第五層 明黄褐色スコリア層、以下第六層から第一層までは細砂泥土層の互層、第一二層 明黄褐色をしたスコリアのレンズ状ブロックを含む暗黄褐色粘質砂泥土層、第一三層 暗黄褐色含細砂土層、第一四層 明黄褐色スコリア層、第一五層以下第一九層までは細砂泥土層の互層、第二〇層は、暗赤褐色集塊質泥流層で水脈があり、地表下約四mのところから下に厚く堆積する。

〔葛山城跡遺構〕 通称愛宕山（旧小字では条山）の頂部に、人為的に削平された東西約一七m、南北約二七mの平場があり、ここを主曲



葛山居館跡範囲図

輪としている。現在、北側と西側の一部に土塁址があり、北西隅に門址、北東隅に櫓台らしき土壇状のものがあ。主曲輪西側下段に、方一五m×一〇mの袖郭がある。主曲輪より六〜八m下に、西、南、東側をとり囲んで二ノ曲輪の平場がつくられ、北西隅に方五mの小さな枡形囲の門址と、北側に土塁址があり、東側の行き止まりとなった上段に、主曲輪櫓台に続く張出郭がある。二ノ曲輪の下段に全体をとり囲んで、通路状の三ノ曲輪があるが、北側は崩壊して不明瞭である。

この部分に四本の小空堀が認められる。南側外縁には土塁址が残り、放射状に四本の空堀があつて、うち一本は裾部にある仙年寺へ通じている。三ノ曲輪の東端部と西側には、鍵状土塁が通路をふさぎ、門址と確認できる。三ノ曲輪東端と西端に、尾根稜部を切断する大きな二重の空堀切がある。この東空堀切に接して小郭があり、西空堀切西方五〇mのところの小空堀切が認められる。三ノ曲輪南東脚部に、仙年寺平場があり、これを東西に囲む尾根支脈端にも、舌状の平場が認められる。仙年寺山門前方を堀田というが、遺構は認められない。なお本城跡北側下の伯母子沢に面して、張出状の郭らしき遺構と、本沢を直角に区切る堤防状遺構があるが、これは直接城郭遺構と結びつくかどうか明らかでない。

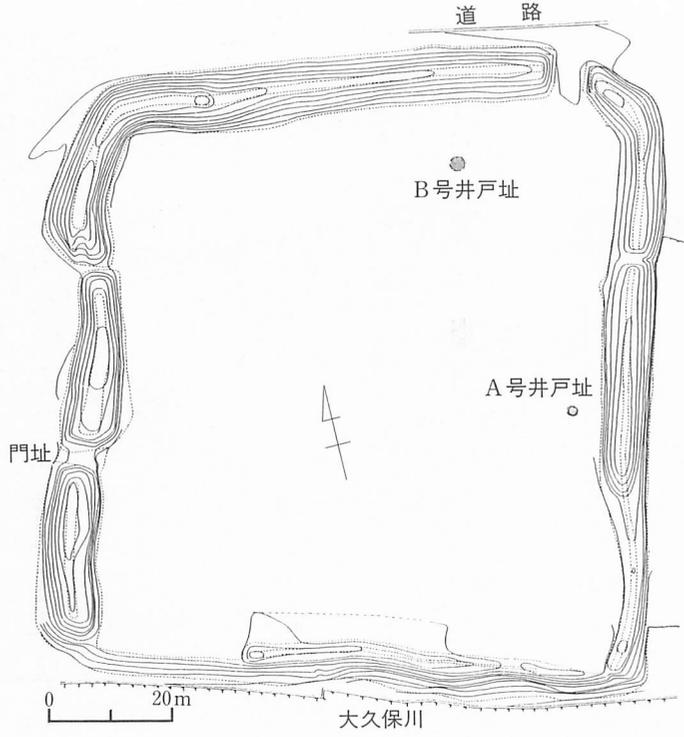
〔居館跡遺構〕 本居館跡は、葛山入谷地形の微高地字中村の海拔二〇〇mのところの構築されており、東西約九七m、南北約一〇四mの規模がある。かつて空堀と土塁に囲まれていたというが、現在、空堀は埋め立てられて、畑地と道路敷となり、土塁は東側三分の二と、北及び西側に、高さとも規模を減じた形で残存している。最も原形を保つ



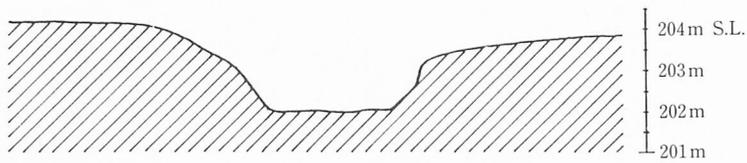
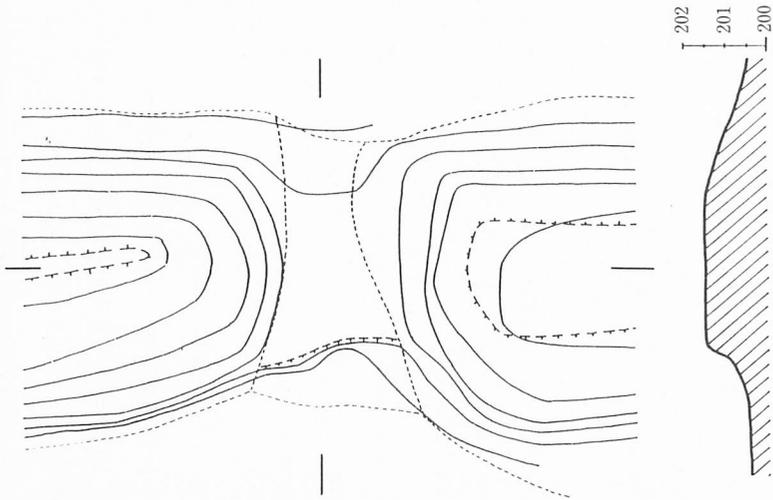
葛山居館跡土塁



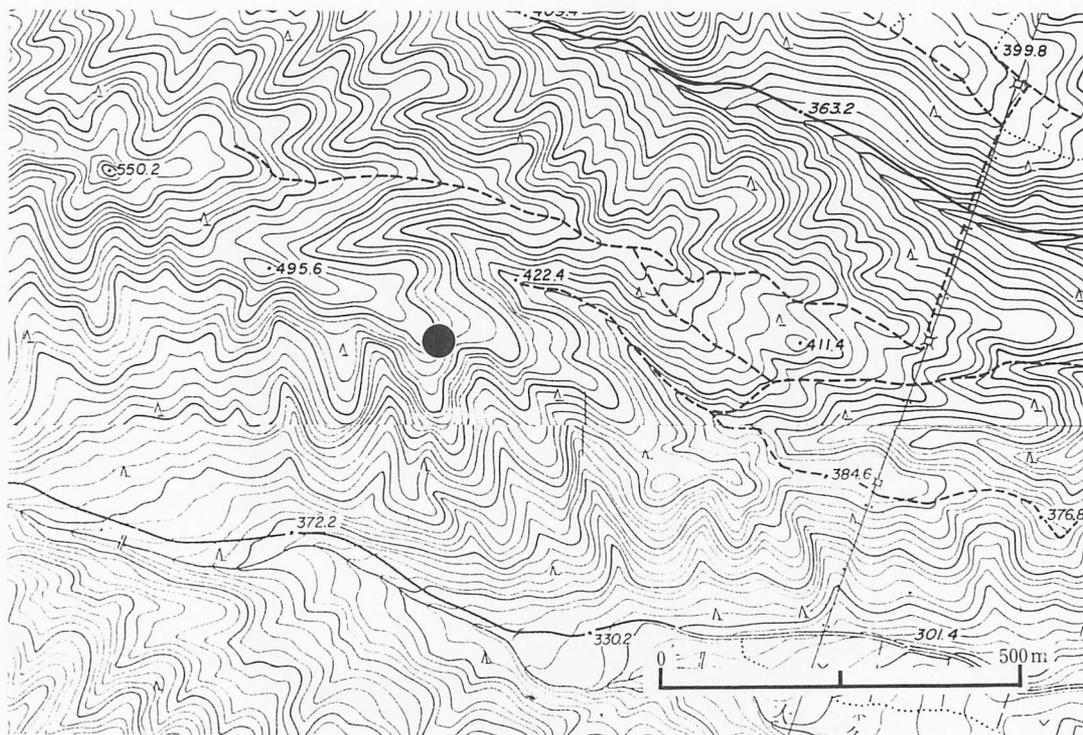
葛山居館跡土塁



葛山居館跡実測図



葛山居館跡門址断面実測図



葛山かくし砦跡 位置図

ているとされるところは北西隅で、この個所での土塁規模は馬踏幅約一・二m、高さ約三・五m、底敷幅約一〇mほどある。出入口は現在三カ所あるが、うち北東隅と西側北の二カ所は後世の開口という。残る西側南の出入口が門址であるとされ、幅約二m、長さ約五・五m、中央部で居館跡敷地面より高さ約一mある。内外に階段状の石列がみられる。土塁内は東西約七四m、南北約八〇mあり、畑地となっている。居館跡内に二カ所の井戸址が確認され、うち北のB号井戸址は、平成二年（一九九〇）、発掘調査が実施された。井戸の掘方は、平面ほぼ円筒形素掘りで、表土下第二層面から掘り込み、最上部径二・四m、深さ四mのところまで二・二m、深さ八・四mで挿鉢状の底となっていた。内側壁石積は、深さ四・一五mまですべて崩壊しており、以下から石積が検出され、径二五〇cmの楕円ないし長楕円の河原石または小口割の石を、小口野面または小口割石積にして円筒状に積上げ、掘方壁面との間には河原石、割石を裏込めして土砂で固めてあった。内径は最上部で一・一六m、底部で〇・九mあり、底部石積は厚さ約一二cmの松材を井桁に組んだ上から積まれていた。井戸埋立土中から、中世陶片が検出されたが、井戸底近くの砂礫土中から出土した陶磁片によって、近世末から近代にかけて使用されたものと判断されている。

本居館跡西隣の半田家屋敷北側の門を中心に、東西にも土塁址の一部が残存し、居館跡西土塁外側と半田家に続く萩田家西側に、空堀状遺構の一部と思われるものが観察される。

〔かくし砦遺構〕 葛山字上城西方の通称城ノ腰の尾根頂部を主曲輪とするが、一五m×二〇mのせまい平坦部で遺構は認められない。こ

こより南裾部にある山神社へ下る支尾根上に、二カ所、空堀切がある。また主曲輪から東方へ下る尾根の、海拔四六〇m付近と同四五〇m付近の稜部に、二カ所の空堀切と、この堀切に連続する曲線状の空堀に囲まれた上下二段の平場がある。曲線状空堀は通路状を呈している。

上段平場は、長さ約二〇m、幅約五〜六mで、尾根の稜部をそのまま利用しており、この北東側下段に帯状の平場がある。下段平場は、長さ約二三m、幅約一二m前後の広さがあり、不整形な舌状を呈する。この付根部に空堀がくい込み、門址状の遺構が観察できる。この上下二段の平場の構成される尾根稜部の、約三五m先のところに左右から空堀をくい込みました土橋状の遺構がある。さらに上段平場の北西側に、空堀を交差させた遺構があるが、城郭の機能的な役割は不明である。

なお葛山字大久保の、琴比羅山裾部に御宿屋敷、御宿字宮原に宮原居館跡があったというが、これらは既に削平され遺構は認められない。

遺物 図の土器片と陶器片は、すべて居館跡内とその周辺から出土採集されたものである。1・2は、「かわらけ」であり、良質の粘土で作られている。1は復原の口径一〇・八cm、高さ三cm、底径七cm、2は復原の口径九・五cm、高さ二・三cm、底径五・五cm、ともに糸切底である。3・4は、鉢の口縁部と坯の底と思われる。灰青色で硬く焼き締る。5〜10までは、播鉢の口縁部で、5・8・9には縁帯がみられ、9は一〇本以上の播目が施される。胎土は灰黄色で、内外面にねずみ色に発色した鬼板掛が施される。11〜15までは、常滑古窯産の甕破片で、11には叩き目がある。14・15は底部破片である。播鉢破片は、美濃古窯産のもので、中世末のものと思われる。

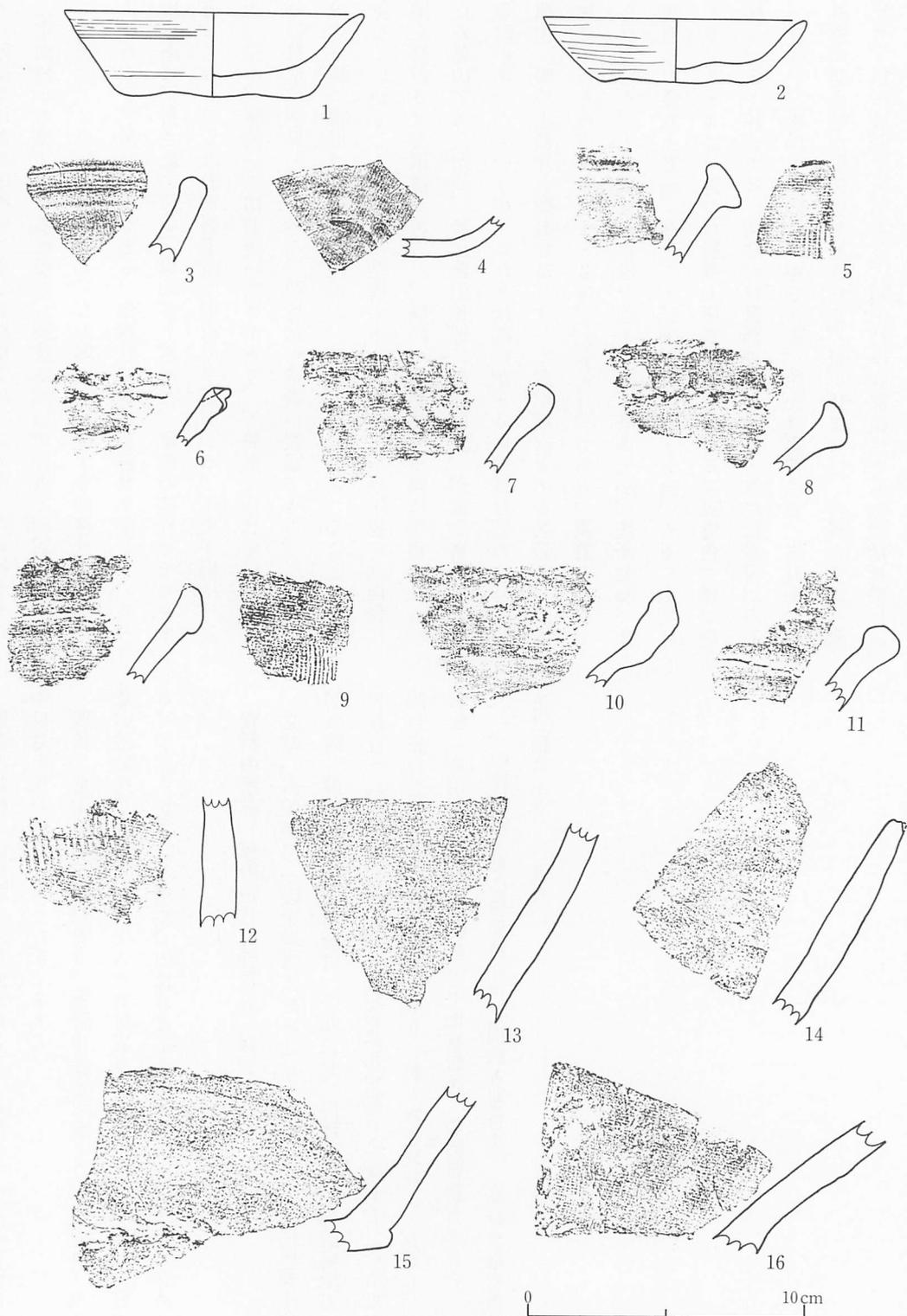
遺跡の特徴 山城跡と居館跡が対となった極めて貴重な城館跡で、中世葛山氏の拠点となった所でもある。

現状 葛山城跡と居館跡は、裾野市指定史跡となっており、地元葛山城址保存会によって手入れが行届き、遺構の保存状態は良好である。「かくし砦」は、現在、山林のなかにあり、ほぼ原形をとどめている。

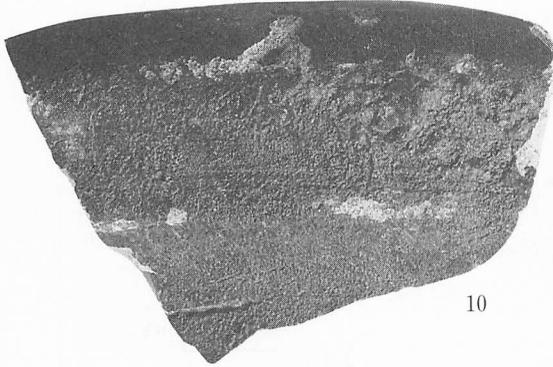
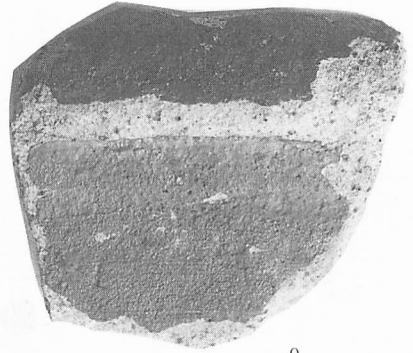
資料の所在 裾野市教育委員会 保管

文献 沼館愛三「駿東地方に於ける城郭の研究」静岡郷土研究

第九輯 静岡県郷土研究協会 一九三七、伊禮正雄「御殿場地方の中世城址」御殿場市史研究1 御殿場市史編さん委員会 一九七五、関口宏行「葛山城」日本城郭大系9 新人物往来社 一九七九、中野国雄「葛山城館跡」静岡県の中世城館跡 静岡県教育委員会 一九八一、中野国雄「葛山居館跡井戸発掘調査報告書」裾野市教育委員会 市史編さん室 一九九〇



葛山居館跡および周辺より出土の陶器片拓影・実測図

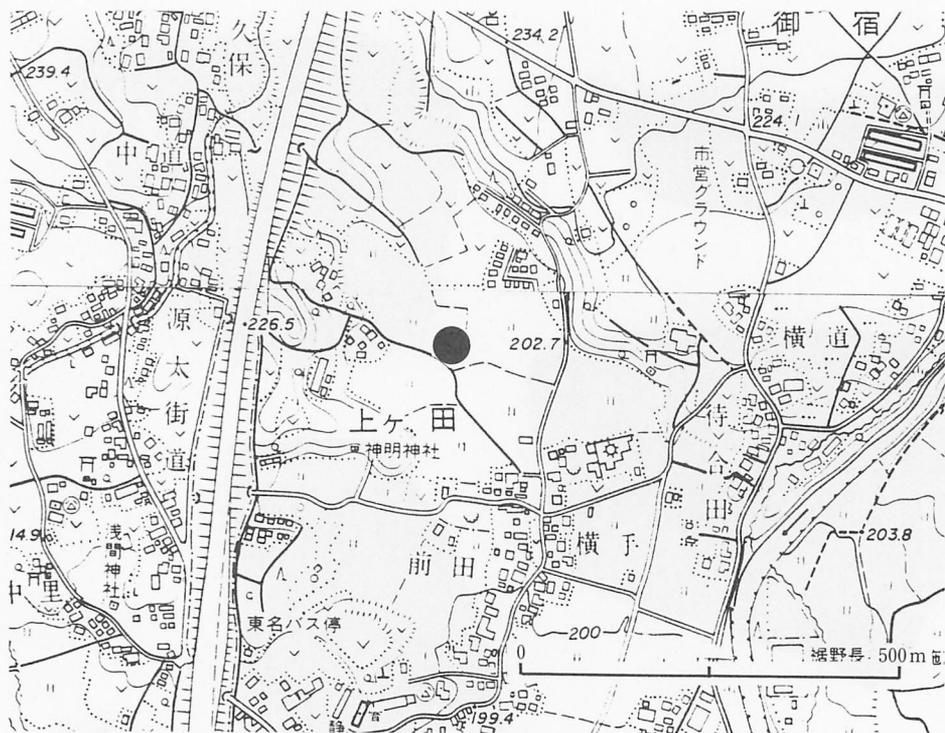


葛山居館跡および周辺より出土の陶器片

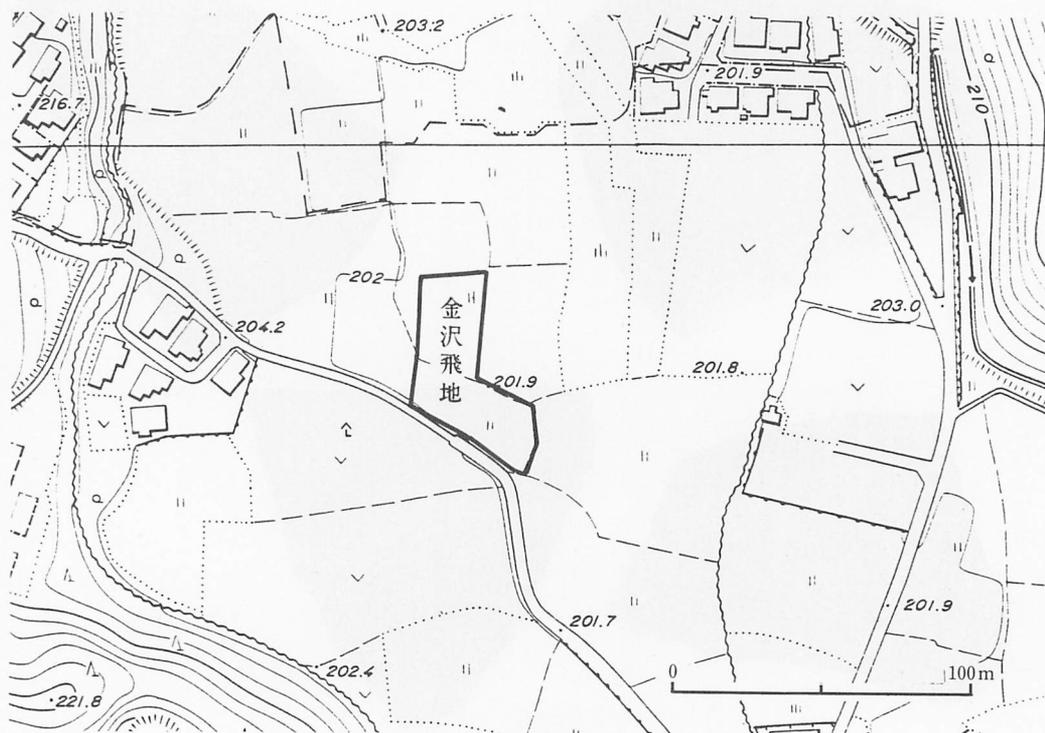
かねざわてしろやませき
金沢手城山跡

所在地

裾野市金沢字手城山四九八・四七〇番地



位置図



金沢手城山跡範囲図



金沢手城山地籍図

位置と立地 裾野市上ヶ田集落の西北約二〇〇mの、海拔二〇一mのところろに位置し、北と西側は富士山東南麓の海拔二三五〜二三〇mの台状地形にとりかこまれ、東と南側は水田地帯が広がっている。地籍図上の地籍は、金沢手城山となっている。

発見と調査 本城跡について、昭和十二年(一九三七)、沼館愛三は「駿東地方に於ける城郭の研究」の葛山城の項に於て、金沢地区に出城という地名があり、葛山城に関係するものであろうと指摘している。平成元年(一九九〇)、市史編さん事務局の市内城館跡調査で、その位置を確認した。

遺構 地元の話によると、かつて高さ約二五mぐらいの、平頂部のある独立した小丘で、頂上に小祠が祀ってあったという。

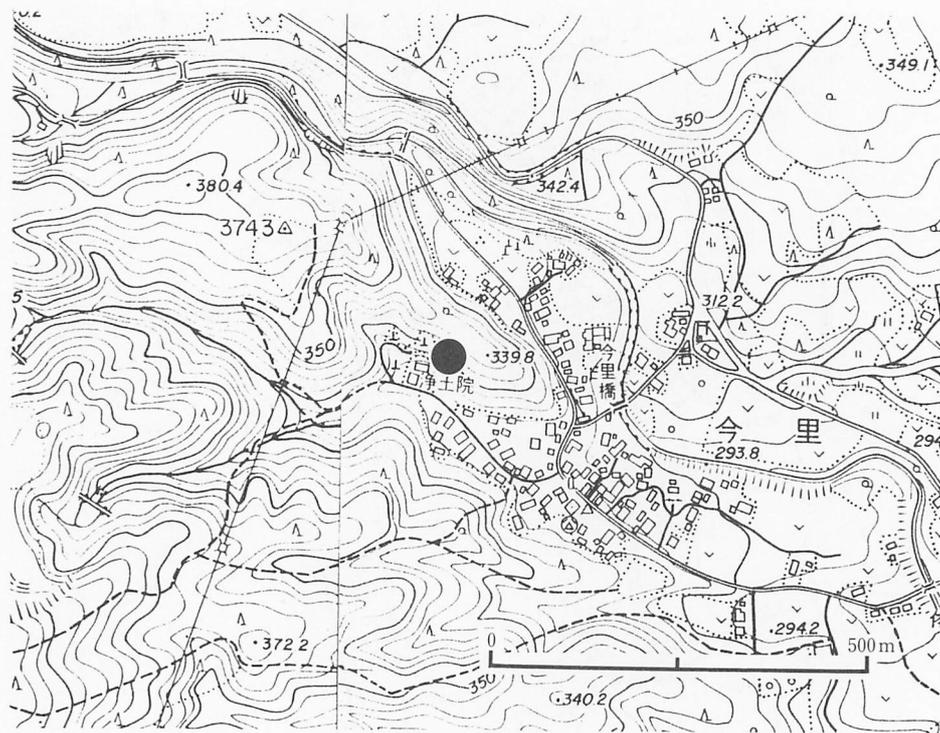
現状 土取工事によって、完全に消滅している。

文献 沼館愛三「駿東地方に於ける城郭の研究」 静岡県郷土研究第九輯 静岡県郷土研究協会 一九三七

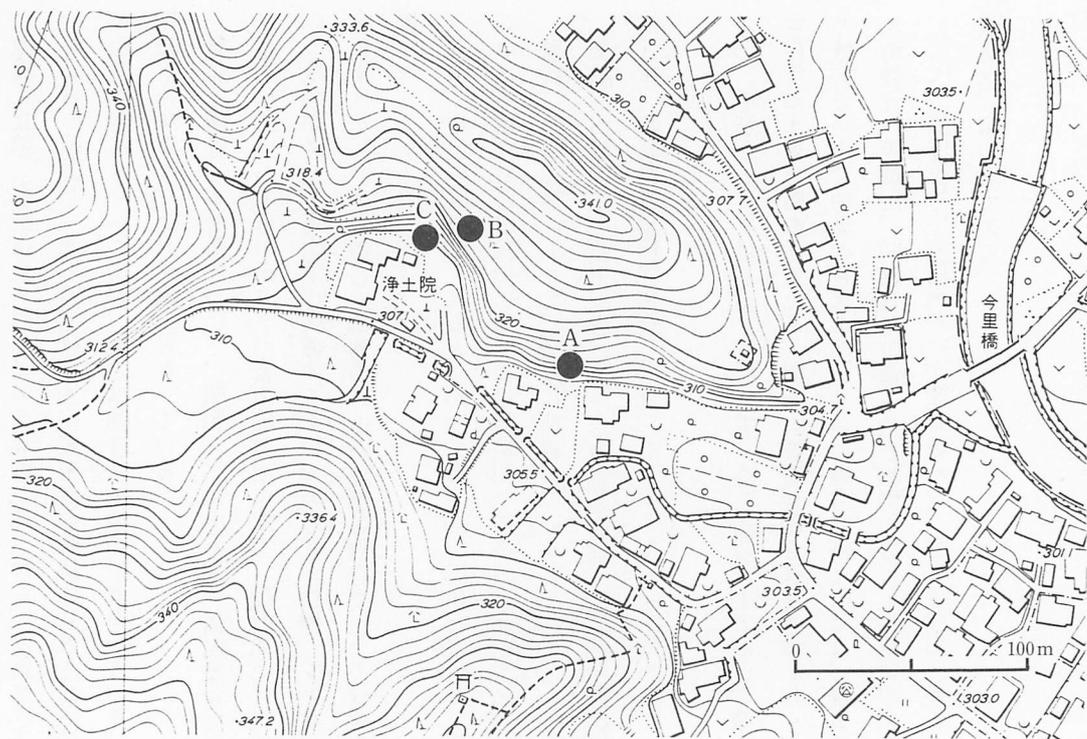
(注) 手城というのは、「てしろ」「でしろ」(出城)ともいい、城主の在住する本城を防御するため、周辺の要害の地を選び築城した小規模の城郭をいう。中世の時代に多い。この地方の例としては、駿東郡清水町徳倉に手城山、同郡長泉町南一色と裾野市富沢との境に手代(てしろ)、同市深良に手城橋という地名がある。金沢手城山に最も近い城跡は、葛山城である。

今里中村遺跡
いまざとなかむら

所在地 裾野市今里字中村八五七番地ほか



位置図



今里古銭出土地

位置と立地 今里字中村の浄土院は、今里集落西端の三方を愛鷹山尾根丘陵に囲まれた、袋状の入谷に位置し、古銭の出土したところは本寺院の北側を囲む、通称寺山の南斜面であったという。

発見と調査 地元の話では、戦前、古銭が約五〇〇〇枚出土し、その大半は永楽銭であったが、第二次世界大戦中、他の金属品と共に政府へ献納してしまったとする。その後、寺院で裏山を開墾したところ、壺が三個出土し、中に古銭が数枚ずつ入っていたという。昭和四三年（一九六八）、上水道のパイプ布設工事の際、地表下三〇〜四〇cmのところから、約一〇〇枚単位で縄が古銭に付着した状態で、約一一二二枚出土した。古銭は、裾野郷土研究会の手によって整理された。

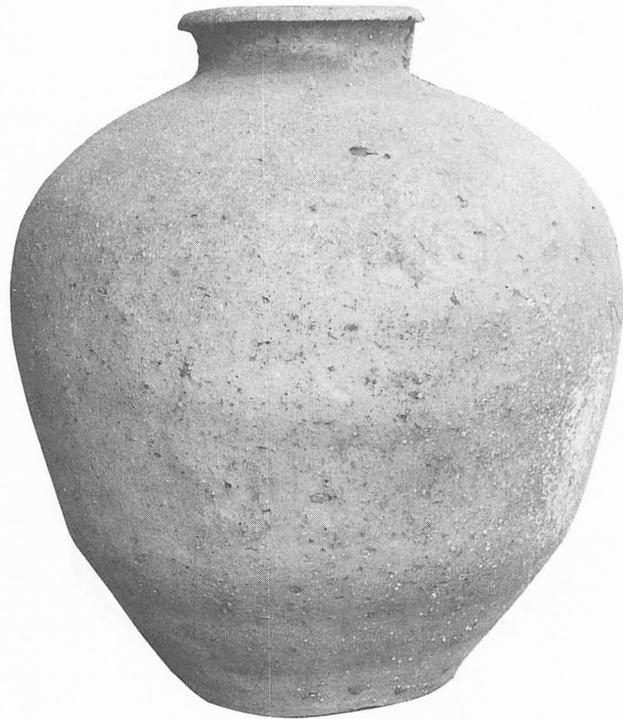
遺物 古銭は、第1・2図に示した通りである。壺は図版1に示したように、胎土に大粒の乳白色半透明の石粒を多量に含み、硬く焼き締まる。表面に「石はぜ」があり、火面ひおもてに灰白色の釉が吹き出している。焼成・胎土の特徴から信楽焼であろうと思われる。

遺跡の特徴 地図に示したように、戦前、古銭の出土したところはC地点であり、昭和四〇年に出土したところはA地点である。壺はB地点から出土し、なかに数枚の古銭しか入っていなかったというから、性格が異なるものであろう。共に永楽通宝が含まれているので、一五世紀後半から一六世紀代にかけての埋蔵と思われる。

現状 山林と一部宅地となっている。

資料の所在 今里浄土院、裾野市教育委員会 保管

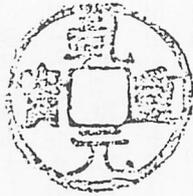
文献 芹沢充寛「今里出土の古銭」 裾野郷土研究4号 裾野市郷土研究会 一九七〇



図版1 今里浄土院出土大壺



開元通宝
(621)



乾元重宝
(758)



太平通宝
(976)



淳化元宝
(990)



淳化元宝
(990)



至道元宝
(995)



至道元宝
(995)



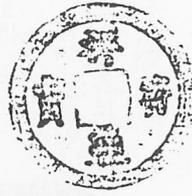
咸平元宝
(998)



景德元宝
(1004)



祥符元宝
(1008)



祥符通宝
(1008)



天禧通宝
(1017)



天聖元宝
(1023)



天聖元宝
(1023)



景祐元宝
(1034)



皇宋通宝
(1039)



至和元宝
(1054)



嘉祐元宝
(1056)



嘉祐通宝
(1056)



治平元宝
(1064)

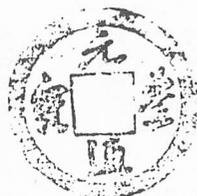
第1図 今里浄土院出土古銭拓影 () の数字は西暦



治平通寶
(1064)



熙寧元寶
(1068)



元豐通寶
(1078)



元豐通寶
(1078)



元祐通寶
(1086)



紹聖通寶
(1094)



元符通寶
(1098)



元符通寶
(1098)



聖宋元寶
(1101)



聖宋元寶
(1101)



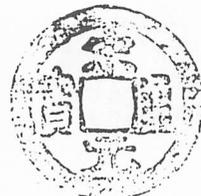
政和通寶
(1111)



政和通寶
(1111)



皇宋元寶
(1253)



宋元通寶

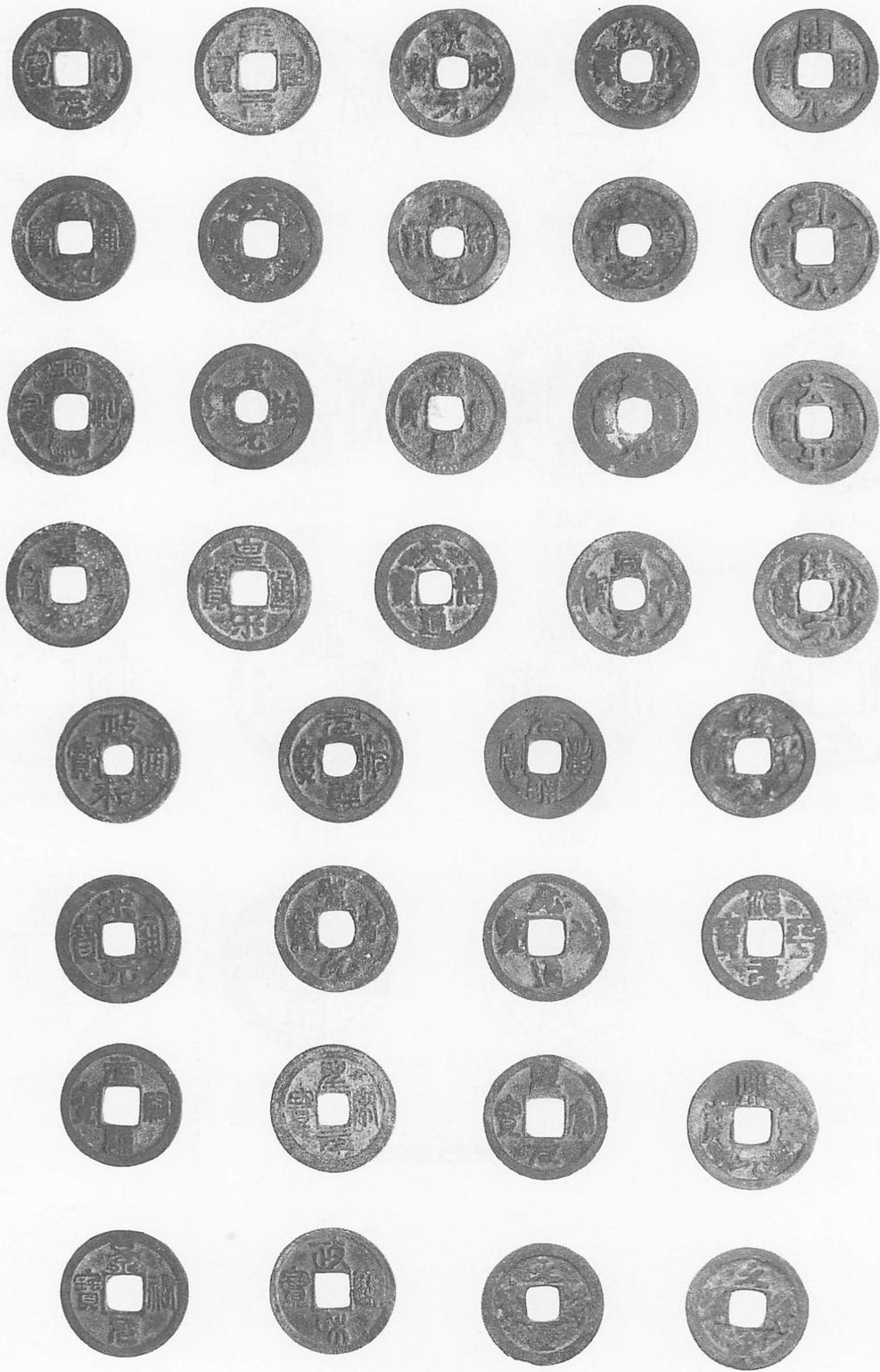


元祐通寶



景祐元寶

第2圖 今里淨土院出土古錢拓影



图版 2 今里浄土院出土古銭